

川柳塔

平成六年六月一日発行
創刊大正十三年 通卷八〇五号



白川協加盟

No. 805

六月号

『川柳塔』八〇〇号記念出版

集句夫婦

旅人

麻生 路郎

福寿草

麻生 葭乃

句集「旅人」などから四〇〇句、同「福寿草」から三〇〇句を収録し、表記を現代仮名遣い・新字体に統一した新訂版としました。

編集・発行 川柳塔社

体裁 B6判・一八四ページ

定価 一、五〇〇円（送料実費）

★お申込みは、なるべくグループで冊数をおまとめの上、川柳塔社事務所へご連絡下さい。

2冊以上のご注文は送料不要、10冊以上の場合送料不要の上、1割引で頒布いたします。

川柳塔社

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口二、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

① 1/2頁六、〇〇〇円 ③ 2/3頁一二、〇〇〇円

② 半頁九、〇〇〇円 ④ 一頁一八、〇〇〇円

▼原稿締切 6月25日

〒545 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

新刊

銀髪

本間満津子句集

西尾 葉序・吐田公一跋

B6判・230頁・上製本

銀髪になったら着たい色が有り

発行所 川柳塔社

中往生

西尾 葉

無理矢理に生かされている葉漬待合室患者同士が診察し

人生は紙おむつから紙おむつ

長寿もいいが、長生きすると何だか胸の底に寂寞の思いが漂ってくる。自分も去る三月の誕生日で第四コーナーを回った。

その寂寞は何だろうと思ふのは、自分の運命に、どんな死に方がついているのかということである。昔は畳の上で死ぬことが理想であつたが、新聞記事を見ると殆ど病院で亡くなっている。病院でもよいが、余り他人様に迷惑をかけずに死にたいものである。長寿の果てはボケがくる。鉄道唱歌や戦友、結んで開いてを歌っている間はよいが、夜中に起きて徘徊したり、裾の世話になつたりして老人ホーム巡りして、あの世行きとなるのもご免だし、交通事故も嫌だ。どんな死に方をするか長生きする者の一番心配の種だ。

この間、朝っぱらから家内が掛け付けの医者へ電話して「主人が昨日宵から寝

て、もう十五時間になるのにまだぐっすりかぐっすりか眠っているんです。先生このまま死ぬんと違いますやうか。心配になりましたので一寸、電話しましたん」

「眠つたまま死んだら結構やおまへんかいな」「はあそうですね。私はこの会話で目がさめて、エライとこで起こされた。このままあの世へ逝けばよかったのになと思つた。」

こんな心配があるものだから、先日、「大往生」という本を購つてきて読んで

いる。

その本に「知らない町へ行つたら、知らない老人に親しげに挨拶するんですよ。そうするとその老人は今挨拶したのは誰だつたかなアと考える。考えるからボケなくなる。これ皆さんでやりましょう」とある。

× × × × × × × × × ×

「老人ホームはお洒落な二枚目のお爺さんを探している。素敵なお爺さんがいるだけで、お婆さんたちがみんないいお婆さんになりますから」。九州の老人ホームで、戦前、上海でピアノを弾いていたという粋な老人が入所した。カンカン帽がよく似合い、いつも赤の細身の蝶ネクタイをむすんで、どのお婆さんにも、レディーとして対応する。この老人が園

内を散歩するようになったら、お婆さんたちも精一杯のお洒落をするようになった。一時、雑巾みたいなお婆さんが少女のように愛くるしくなりましたが、そのお爺さんが亡くなつたら、もとの雑巾婆さんになつちやつたということで、どこの老人ホームもシックなお爺さんの出現を望んでいるという。

× × × × × × × × × ×

「不思議なものだね」

友達が死ぬと、「どこか楽しいんだよね」

「淋しいだけじゃないんだよね」

友人と葬式の帰り道の話

「甲子園と同じなんだよ。生き残るということは、勝ち残ることでもあるからね。俺は勝つたという気持ちで、それで楽しいんじゃないか」

ただ高校野球と違って、このゲームには優勝ということはない。

「生まれてきたように死んでいきたい」これは賀原夏子さんの言葉である。

急いでゆくとこでもないのでポチポチゆきましよう。

皆さんにゆつくり御札を申して別れましよう。

大往生は大徳の出来るもの我々は中往生で御の字だ。



座右の句

国境を知らぬ草の実こぼれ合ひ

(井上 信子)

私の句

新聞を目で追い耳は妻に貸し

田中 文時

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 中往生

映画・小説・川柳

川柳塔(同人吟)

自選集

川柳の群像 川口弘生

■古川柳 柳籠裏二篇研究(二十一・二十二丁)

大空のころ(42)

水煙抄

路郎賞・川柳塔賞中間発表

秀句鑑賞

同人吟

水煙抄

西尾 栞 (1)

田中正坊 (2)

西尾 栞選 (4)

東野 大八 (42)

橘高 薫風 (48)

黒川 紫香選 (41)

玉置 重人 (74)

藤 解 静風 (76)

映画・小説・川柳

田中 正坊

映画『シンドラーのリスト』と『ピアノ・レッスン』を見た。スピルバーグ監督の前者は、アカデミー賞を総なめにした作品だけに文句なしに感動した。原作もベストセラーとなっており、新聞や雑誌でも取り上げられているので、ストーリーは紹介するまでもなからう。十数年前に私は、この映画の舞台となったポーランドの古都クラクフを訪れたことがある。そして、近郊にある当時の姿そのままに保存されて国立博物館となっているアウシュビッツ強制収容所を視察し、ユダヤ人大量虐殺を物語る遺跡・遺品の数々をこの目で見ていたので、次々に展開されるシーンに身の震える思いであった。

後者の映画について、こういう話がある。女性の友人から「見終ってから、立ち上がれないほど感動した」と言われて見に行った男性が、「一体、どこが面白いんや」と怒ったらしい。この映画の脚本・監督は女性で、アカデミー賞では脚本賞、主演女優賞、助演女優賞を受賞している。無学で野性的な男のピアノを弾く女への無器用な愛情表現への反

■エッセー「闘病の記」	田中透太	(77)
銀河系	河内天笑選	(78)
茴香の花	八木千代選	(82)
「膝」	榎山隆選	(84)
一路集「梯子」	西田柳宏子選	(84)
「はしゃぐ」	川上より子選	(85)
初歩教室「破る」	吉岡美房	(86)
各地柳壇(佳句地十選/田辺灸六)		(88)
五月本社句会		(100)
柳界展望		(104)
■句会だより 川柳藤井寺	笠原吸江	(106)
六月各地句会案内		(107)
■編集後記		(108)

座右の句
私の句

天と地のはざまにふわり生かされて (尼 緑之助)
すんなりと赤くはなれぬ唐辛子 岸 桂子

応が、この映画に対する男女の評価が分かれるところではないかと、映画評も書いていたが、観客は若い、あまり若い女性たちで占められていた。

小説『マディソン郡の橋』がロングセラーとなっている。はじめから買って読むほどの興味もなかったが、たまたま図書館に申し込んでおいたところ、順番が回ってきたのでその日のうちに読んだ。アメリカはアイオワ州の片田舎にある屋根付きの橋を撮影しにきた初老のフリー・カメラマンと二人の子持ちの中年農婦の恋をドキュメント・タッチで描いた作品である。野暮な男性である私には、先の『ピアノ・レッスン』と同じように、この小説のどこが面白いのか、さっぱり分からない。ベストセラーのリストでは性別は明らかではないが、読者の大半はおそらく女性で占められているに違いないと思った。

川柳の世界でも、こういうことがあるのではなからうか。斎藤大雄が著書『情念句』に「女性川柳の手引き」というサブタイトルをつけているが、最近、女性川柳がブームを呼び、私たちの周辺でも女流作家の台頭がいちじるしい。「女性の句は、男性の感受し得ぬ句境がある」と石曾根民郎も言っているが、男性川柳と女性川柳とは明らかに違いがある。紙数が尽きたので、稿を改めて「女性川柳」について考えてみたい。



西尾 葉選

海南市 三宅保州

他人には靴の重さがわからぬ

一匹になると生きてはゆけぬ雑魚

力抜くことも力のうちである

通訳より先に笑って睨まれる

疑問符を付けると湧いてくる悩み

過去形が増えて祈りが深くなる

米子市 林 瑞枝

太公望の夫を絵にして夕焼ける

わたしを測る風の耳 人の耳

想いはるか娘と玉葱の皮を剥く

表札を守りつづけてきた泥だ

バックミラーに映す明日の影法師

草むらに遊んで癒す脳細胞

豊中市 田中正坊

いかなごの釘煮が届き春となる

花明かり金子みすゞを読んでいる

図書館の澤地久枝をみな借りる

営門という青春の門ありき

リストからまず私の名をはずす

長生きをして逆縁がまた一人 (甥 晴彦死去)

熊本市 永田俊子

花万朵 軍歌聞えて遠ざかる

悲しい話さくらはたんと知っている

春を歌い命を歌う花万朵

起承転結知つていさぎよい落花

よきに計らえと殿様席を立ち

縄とびの上手下手がある議員

和歌山市 福本英子

個人差を物差し容赦してくれぬ

春の靴まだまだ古希を弾む気で

新調の服着て花の場所取りに

場所取りに大学出した子と出会う

蜜柑の種 古里恋し母恋し

いつまでもニトロで騙し続ける気

今治市 矢野佳雲

笑う者一人もおらずパンが焦げ

般若経 無の字数えて悟れない

いい夢を見せてくれたと切れ言葉
森が削られ総代さんが病んでいる

いい目見せてやると言われてそれつきり
母さんのことを思えと叱られる

松原市 小池 しげお

二人きりなのにテレビが二つある

早死をしたので惜しい人になり

よい妻と良い嫁がいて板ばさみ

春爛漫 喫茶店から駅が見え

近道を覚えた猫の身のこなし

斎場でだんだん腹がへってくる

藤井寺市 吉岡 美房

賑やかな春の小川と会う故郷

満開の桜 情けに触れて咲く

花溢れ人が溢れて春の鬱

騙し絵のように桜に身を匿す

目覚しに春じゃないかと言ひ聞かす

僕だけは落ちぬと決めた機内食

竹原市 小島 蘭幸

春はおぼろよ花も野菜もいただいて

偉い人だったと知った日の夕陽

朝刊を読む順番があるのです

てのひらの上の宇宙を大切に

宇宙を描いて宇宙を語る歯が白い

羽曳野市 吉川 寿美

平凡な幸せ二合の米を研ぐ

母の世界で時計が止る二度童子

父と子が不協和音の笛を吹く

傷つくことが怖くて輪からぬけ出せぬ

咲けば散る花の哀れを知りすぎる

豊中市 安藤 寿美子

花茶漬今年も春にめぐり合う

ビルラッシュ狭斜の巷も立体化

花吹雪お隣さんのおすそわけ

テープカット十人並べてズタズタに

パンジーとデージー植えて駅は春

西宮市 奥田 みつ子

万愚節 愚かなままに生きてゆく

エープリルフルに書いたラブレター

白木蓮 人妻たちもさんざめく

コピ―屋が流行り学生街暮れる

スニーカーまだまだ夢を追いかける

大阪市 西出 楓楽

新緑にあおられている旅ごころ

新緑へセコいはなしはやめました

助け舟が沈まないとは限らない

一徹のそれがあなたのいいところ

居眠りが上手になって老いてゆく

下関市 石川 侃流洞

自治会長やめたと妻の愚痴を聞く

鬼だつて最後は紐る仏の掌

第九を聞いたお酒の酔い心地

竹光を研いでこだわる過去の地位

快刀乱麻あつさりジョークで片付ける

堺市 楊井 二南

リハビリが効いて歩幅を広くする

素通りで無事だとわかる救急車

満開の短期を惜しむ花吹雪

リハビリに疑念を挟む弱氣出る

義理ずくめ捨て身で当る他はない

米子市 林 荒介

ボタ山は何も語らず咲くさくら

人間の脆いところが列になる

本棚にならべる昨日今日の嘘

日記帖に埋める些細ないちにち

父を見て育った川が渡れない

倉敷市 小野 克枝

結び目の再確認をする晴れ間

酔いざめの水一ぱいに叱られる

生乾きのシャツ着せられている案山子

青リンゴまだ友達のままにいる

透き通る大空があり職がない

砂川市 大橋 政良

より抜きが顔を揃えて息苦しい

共倒れのシナリオを書く外野席

疑いの深まる穴を掘っている

路のとう南斜面の一行詩

窓際に飾りボタンのようにいる

柳井市 弘津 柳慶

外米が嫌なら外遊やめなはれ

散髪の隣同士で米談義

いじめ抜かれてついに兜ぬがされる

貯金箱 孫がふって見せに来る

宅急便 僕の誕生日知っていた

島根県 堀江 正朗

五十年の闇にも足跡刻みつつ

新緑の輝きもどらない戦盲

足がまた短くなつたかなズボン

春の縁 茶筌も妻といて和む

手さぐりで砂のぬくみも春の庭

島根県 堀江 芳子

戦盲を饒舌にする花の土手

つばめ来て季節の風を感じさす

どんな時にも笑つてゐる夫婦箸

たじろがぬ妻でいいのか悪いのか

新緑の喜ぶ雨音ぬくう聞く

松原市 玉置 重人

シベリアの頃が肥やしになってます

日の丸の売場を君は知ってるか

ナツメロが好きでつじつま合わしとく

四月馬鹿 電気炬燵をオンにする

久しぶり訳あるひとも老い給い

松江市 柳 楽鶴丸

爆弾と言われた頃もありました

バージロード改名されたら如何かな

婦化をしたボタンが県の花になり

味覚音痴かな外米も苦にならぬ

愚痴言うなタイの農民に失礼だ

奈良県 田 中 紀美代

旨いお茶入れて手紙の封を切る

花に嵐 急に手紙を書きはじめ

外米もやって来ました花の下

スパーではったり母娘で同じもの

吸いがらを溜めてガンの書読み終える

鳥取県 新家 完司

週末は緑の谷で蘇生する

四人死んだ山とは見えぬ春霞

傘として雨のブルース口ずさむ

麻雀に負けて汚れたシャツを脱ぐ

迎賓館の門わたくしを拒絶する

東大阪市 森 下 愛 論

泣き癖を知って盃回らない

肩書が取れて酒量も減りました

酒もよし花も尚よし城下町

花おぼろ女ばかりの座にまぎれ

セーターの胸まん丸い娘と歩き

奈良市 天 正 千 梢

にぎりこぶしひらけば豊かさにげて行き

空回りしやべりすぎに気がつかず

序列を気にし臭いセリフを吐いている

試行錯誤 地図をひろげて虫めがね

価値観の確立へゆっくり深呼吸

富山市 舟 渡 杏 花

春遠からじ同行ふたりの幕があく

退院をして仏飯のてんこ盛り

したたかな尻尾をさりげなく補修

やんわりと打つ本物の母の釘

冬の楷書に春をもたらず女文字

倉吉市 奥 谷 弘 朗

人情の深さを知った里帰り

山官で山の魅力にとりつかれ

笑顔には女房の処世術がある

こうなれば明日を信ずることにする

古里は母の素肌に似た温み

松江市 舟木 与根一

散り際の良さが若者わからない

語りべが繕うている郷土愛

視聴率変わり我が家が日永かな

綾取りでふれあい工夫しています

顔芸の要るお見舞をして帰り

奈良市 宮口 笛生

勝者にも似た五月雨の激し音

予定表約束ごとの多い春

外米もめし屋はうまいめしにする

年老いて美人も男前もない

金のない苦勞に老妻が慣れている

堺市 高橋 千万子

在不在 朝の電話に今日の賭け

完全な敗北奥の手まで行けず

一等の旗へ気持が先につく

たわむれの恋だけ残し花は散る

そつと肩抱いて話の座に戻り

八尾市 宮西 弥生

通り抜け熟女ばかりで行く牛歩

この先は健康下さい一顧不動

先のこと分らないけど木を植える

この町を愛するひとりでゆくスニーカー

タコ焼きのおじさんと仲よしになる散歩

大阪市 津守 柳伸

狂乱の米善人をもてあそぶ

ああ平和フレッシュ5度の荷が届く

歳でんな三寒四温疼く腰

香辛料控え長寿の胸算用

安眠を願う電話が抜いてある

寝屋川市 稲葉 冬葉

風船のロマンおじさん帰らない

主治医から優等生というカルテ

博多帯その頃までに縫い上げる

モーニングコーヒーにおしゃれして出かけ

お隣のさくら見ている旅気分

高知県 赤川 菊野

孤の扉 淋しがり屋で強情で

正論を吐いて左遷の荷をまともめ

その昔小旗で埋めた無人駅

淋しくて夫婦茶碗を買ってくる

紀子様の笑顔に負けぬ内の嫁

和歌山市 木本 朱夏

裏木戸を開けておくのも母なれば

ほこりまみれのたましいだから森へゆく

ともだちのひとりが消える花吹雪

残り香の枕をいまでも捨てきれず

貰われた子猫を想う菜種梅雨

横浜市

菱田満秋

尼崎市

春城 武庫坊

どなたにも優しいところが気に入らず
靴はもう帰る気でいる揃ってる

ぐらついた歯を舌先が抜きたがり

嫁さんにポックリ寺を教えられ

ゴキブリを叩いて男認められ

笠岡市

松本忠三

尼崎市

春城 年代

鼠とることを忘れた猫を飼ひ

逃げ道を考えてから策を練る

挙げ足をとるはずなのに勇み足

わたしだけ反対をしいいかしら

転居先不明捜してくれたのか

廿日市

林野甦光

鳥取県

土橋 螢

雨模様の港で恋をした話

一人では生きられませぬあわせ味噌

少しくずれた女が温い膝をもち

朝からの雨 郵便受け覗く

見通しが暗くて落ちぬラムネ玉

松山市

白石春嶺

寝屋川市

江口 度

あいさつは汽笛で交わす島の便

打ち沈む肩 職安の順を待つ

神様の手抜きテープで笙の笛

当分は親子の距離を置く別居

ライバルに一步遅れた風邪を引く

桜見せたい戦友はビルマにまだ眠る

水中花 蝶のささやきなど知らず

外米の鯖寿司よばれ祭見に

週刊誌に新語辞典がおつつかず

衣替え妻の乳房はまだたしか

眼を閉じて一句を産んでいる飢えか

かくなれば心満ち来るときを待つ

肩を落した友の喪服と目を交わす

喪服の群れはかつての乙女ぞわれら

爪伸びると一週間が経っていた

万緑にこの身ひとつの置きどころ

五月雨や米買い人が現われる

紙漉きの名人という女に会う

陽炎に溶けてしまった恋ひとつ

幸せて何だろう飯のおかわり

寝たままで会社に運んで欲しい朝

ひばり囀り心の鍵を盗まれる

点滴をひきずる病院のマンガ

退院間近咲いた咲いたを聞きながら

皆勤賞 妻にあげたい退院日

羽曳野市 榎本吐来

久々に主役となった松葉杖
濡れ落葉に心が通う松葉杖
鳩時計 花見の朝の音で鳴る
とつときの顔で座った花の下
お互いに天狗を宥す花の下

島根県 西村早苗

可愛いかわい乳房が揺れる夏ごろも
夢を見ましたと仏さま拝みに来

握りめし日本の米が少しある

茶柱で占うもののなく昼餉
だあれも居ない飯の変りの盗み酒

伊丹市 榎谷寿馬

北国の便り温めて封を切り

静かなる冬との訣れ春の雪

老人に酷し高齢化という活字

命名も難しアクマとモリヒロと

隣から赤子の声で春が来る

高槻市 川島諷云児

重い日も軽い日もあるベダル踏む

年金を受け取るだけの認め印

身から出た錆 磨いても磨いても

心から詫げる涙は真珠色

定年五年 首輪の傷も消えました

弘前市 蒔苗果林

握手した拾人十色の掌の息吹
お茶にお湯そそぎ気持を落着かせ
公園の雪 春来ても無垢な娘で
ストレスが雑談連れて街に出る
アイヌ語の館の跡のいい景色

弘前市 村田善保

夜桜にせめて不況の世を忘れ
聴診器暮らしの音も聴いている
堂暗く五百羅漢の私語を聴く
脳天で回る自虐の独楽がある
近すぎて愛の深さに気付かない

弘前市 小寺花峯

減塩にこだわるコーヒー飲んです

徳利の林の向こうに妻がいる

あら不思議今日は何にもおこらんわい

電線に止まったカラスとにらめっこ

目をそらす背中では嘘が逃げ惑う

弘前市 岡本花匠

ほろほろと大和を偲ぶレイイエム

雪に小突かれ桜に浮かれ出る本音

花冷えに王手飛車取り詰める駒

聞き上手父が自嘲の処世術

柳眉筆致こけし美人が旅に出る

弘前市 佐治 千加子

五所川原市 齊藤 岳

薪能 破約のことは灼く炎

花びらがあなたを追って風となる

マンションの窓 窓の灯も春彼岸

しろがねのティースプーンの今日の罪

樹の中の仏性に会う仏師かな

弘前市 高瀬 霜石

常識の対角線に居る女神

亡父の名を刻む日陰の石ひとつ

十年に十度曲がった老母の腰

ネクタイの数だけラプストリーがある

神様がくれた一病だと思ふ

弘前市 一戸 ツネ

夢千里 島の仏の声がする

ゆつくりとわたしを運ぶ砂時計

歩幅ずれ心もずれる老いの坂

刻む葱に哀しいなみだ隠します

性善説 木魚の音と協和する

弘前市 中山 雅城

鼻唄が流れる朝は孫が来る

曇り後晴と雨との受験生

何時もの味噌汁が欲しい旅の朝

屋上の旗は社訓に耐えている

羽二重の餅にはならぬ他所の米

寺山修司の碑あり野鳥の啼くところ
何もしないで津軽風揚げている

転勤の荷に父遺影母遺影

新任地は父母の墓ありあかたな

もう少し降っておこうか戻り雪

十和田市 小笠原 敏人

お供えにまぶしたような雪になり

万作が咲いたか老母の手紙来る

嫁姑葛藤こえて介護する

昏睡の空気が重くのしかかる

呑んだくれ山頭火には詩がある

黒石市 相馬 一花

血圧が低くなるまで測定し

なんとなく俺の水割りだけ薄い

医者が聞く前に風邪だと言う患者

ひよっとこの顔でルージュを塗る女

瘦せ型の女も止めぬグイエツト

十和田市 阿部 進

ハードルが見合いつたが高くなり

桶のたが外れたような三代目

根まわしが不足で出番まだこない

子育てと勝手が違う孫の守り

可愛い孫生んだ嫁さん何故憎い

笑顔には笑顔の答える鏡

米子市 石垣花子

化粧とは無縁な母の糸切り歯

えくぼ一つ女は坂をのぼりつめ

山は雪けものは麓へおりた切り

むごい話ばかり聞かせた冬の山

米子市 寺沢みどり

雑踏の街に深入りしてしまふ

長雨をつぐなう虹が美しい

書き溜めた日記に古い駅がある

椅子深くかけて横ゆれ防いでる

枕辺に明日をたたんで落ちつける

米子市 青戸田鶴

芽吹かせるためか春雨降りしきる

沈黙の長さにたじろいでしまふ

一面の菜の花を見に汽車に乗り

深追いをしすぎて汽車に乗りおくれ

ねじ巻いて柱時計を眠らせぬ

米子市 政岡日枝子

夫婦して違ふ振り子で動いてる

少しずつ振り子が狂う倦怠期

花嫁姿で出た遠い日の駅舎

貪欲に出世もとめる顎の張り

父に似た声の男に持つ不安

母という字が好き大き目にかいた

母も私もむすめもみんな丸い顔

六ツ目の地蔵はとても話し好き

うぐいすよ明日の朝も鳴くがよい

タイ米も素直に食べるうちのボチ

米子市 野坂なみ

長い雨期あけて私の道たしか

生きたこと教えてもらう寺の屋根

砦です わたしを庇うコルセット

エイプリルフル可愛い嘘は許されよ

児の瞳には地獄絵の嘘やきついた

米子市 澤田千春

気がつけばまた追うていた青い鳥

世の中を動かす笑顔だつてある

深い祈りにやがては見えてくる灯

何時の日も肩寄せ合せて屋根瓦

充電の裸木たちが芽を吹いた

米子市 川上より子

抱きぐせを一度も言わず母子草

田を売った後の不作に口つむぐ

茶ごころはないが利休梅待つところ

ゆるやかに山野に染まりゆく旅路

右脳の扉を叩く鍵盤を叩く

米子市 光井玲子
始発駅わたしを叱咤してくれる

ベストセラー一氣に読んだ日のおごり
たゆまずに前進だけの蟻である
ひとりでは物足りないなコーヒー館
息づまる成りゆきみんな渴いてる

米子市 中井ゆき

大屋根と私の長い根比べ

人間がどんぐり山を取り上げた
ログハウス建ってお山が若返る
ストレスを溜めたカラスが意地悪い
桜咲く美しすぎて落ちつかぬ

米子市 金山夕子

桜まつりお局さまも大はしゃぎ

四十万川の清流になる私小説

氣が付くと空き地に立っている案山子

じいちゃんの話ところに花がふる

コーヒー館 知恵の泉を飲んでいる

米子市 茂理高代

膝ほどの水に溺れている余生

心して聞け飯食べられぬあの時代

よい妻でなかったような氣がし出す

ビタミンよりもきいてる児の笑顔

春らんまん好きだと花に言ってやる

米子市 白根ふみ
太陽が必ず明日にしてくれる
壺を焼く奥が深くてとどかない
甘えても呆けてもならぬ遙かな娘

三月の地図 葉ばたけの中を行く
深いところで繋がっている同志

米子市 新正子

雨が好き 私の彼は雨男

闇からの深い思いを受け止める
母さんがよそうと飯はてんこもり
休火山の時はやさしいお父ちゃん
さらわれる娘がとてもよく笑う

米子市 菅井とも子

開発を見て来た故郷の天守閣(松江城)

内緒話聞いて笑いが止まらない

故障したテレビ明日まで待たされる

雨音を聞いてひとりの夜に堪える

亡兄に手向ける杏の枝を切る

和歌山市 堀端三男

桜前線追うて海峡越すプラン

花吹雪降らす役なら買うて出る

記念樹を植えて学校ひとつ消え

野暮用があつて楽しい輪を抜ける

茶断ちする老母へ吉報先届け

和歌山市 福井桂香

四月馬鹿だれも欺しに来てくれぬ

葱植えてエンゲル係数抑えます

かりそめの恋に酔うてる花言葉

かたつむりなれば土地など要らぬもの

挑発にけっして乗らぬ昼の月

和歌山市 桜井千秀

姦通罪 遠い昔の物語

ホッチキスで封緘唯の報告書

ボロだけは出さぬようにとする正座

いま一步譲って自分説き伏せる

笑いごとでないよと笑いながら言う

(前月分) 和歌山市 松原寿子

胸を突く言葉の裏に棲むぬくみ

振り向いて翼やすめる海がある

髪切っていつそう想い熱くなる

謎を解く鍵はるかぜのなかにある

胸ふかく我慢と書いて日々を織る

和歌山市 松原寿子

定まらぬ言葉に迷い石を積み

フリルの傘へ触れば小指うずき出す

人を恋う角度に炎える海がある

糸つむぐ未完の詩がある限り

響き合う望みへ橋を架けようか

和歌山市 細川稚代

後もどりもう出来ないよ日本丸

花びらも添えて駅弁届けられ

にぎり飯うまいジョークが転げ出る

御好意に甘えています桜餅

ちようどよいおしめりでした移植ゴテ

和歌山市 宮口克子

何回もはじめる前に言うた筈

思うほど人は気にしていないもの

上司への女心と母心

旅カバン 猫はしきりに顔洗う

潔く引いて虚無感持て余す

和歌山市 田中輝子

薬指楽しいことはすぐ過ぎる

おろかにも夢の続きを生き甲斐に

まなうらに一齣残す花吹雪

遅咲きの桜もあるという旅路

靴擦れを庇う言葉が見つからぬ

有田市 松井かなめ

とる前にわかった姉の計の電話

谷間に鶯の鳴く姉の葬

土筆摘み町に住む子に春送る

花冷えの日 露の皮むき灰汁の指

浅漬の色連想し茄子植える

和歌山県 小倉アサ

大物を迎える度に道を掃き
春なのに中間守備にいる迷い
真つすぐに見せる力のある根っ子
偏屈な膝を折らせた日の熱意
スカートへすぐにまつわる村の風

和歌山県 岩本美智子

沿道の田にむらがつているカメラアイ(野上電鉄廃線の日に乗車2句)
廃線の駅に一輪 桃の花
ひとひらの花を浮かべて灌仏会
風車 風のごきげん聞いている
落日の朱にそまって風と去る

和歌山県 玉井豊太

人情味まだ若わかし師の手紙
父さんへ内緒で母が叱られる
勘訝えて駒を進めたのが王手
朝までの時間が長い痛み止め
嫁はんを隣は上の貰いもの

和歌山県 青枝鉄治

春風のささやきで買う赤い靴
針山に優しい母の髪ねむる
上役の波長に合わす趣味の会
マジシャンの指は上手に嘘をつく
再建へ先ず雑兵の首を切る

香川県 木村あきら

八人目の敵はどうやら家に居る
口達者 妻が隣へ行ったまま
黒檀の仏壇買って孝終わる
エリートでないが一芸持つて生き
悪い事できん影法師傍に居る

香川県 成重放任

秋刀魚焼く匂 内ではないそんな
悩殺の隣の声に気をつかい
花嫁を見てもう一度ほしくなる
家に居て登別から別府の湯
孫帰る便りたびたび読み返し

香川県 川崎ひかり

ぞんざいな口調で優しい事を言う
馬鹿になる事も覚えた朝の靴
手を握るだけでなんにもしてやれず(娘の手術)
辛酸をなめて男の顔になる
冗談にするにはきつい言いまわし

香川県 新川マサエ

いそいそと着替えた妻の白い足袋
そろそろと歩幅ようやく揃い出す
コトコトと安らぎくれる落しぶた
名曲を隣の猫が聞いている
句碑羅漢 花の出湯で永遠に生き

香川県 池内 かおり

幸いなことにどちらも良く眠り
店構え広げて味が消えて行く
こんなにも美味しかったかコシヒカリ
制裁と疑似餌で敵は攻めて来る
人権に目覚めて家事を放棄する

香川県 山地 マツエ

相づちを打ったら味方にされていた
三代目あたりでゆれる境界線
防波堤になる母が居て生き延びる
離婚劇片隅で見る倦怠期
菜の花を添えて仏に春告げる

香川県 工藤 吟笑

十七字夢に描きつサヨウナラ
(迷観子追悼句)
人情が未だに残る過疎の里
国訛り丸出しでゆく島遍路
薬草の種を蒔いてる医者嫌い
カザリ気のない付き合いで長つづき

唐津市 田口 虹汀

舞鶴城頭猶夜桜に酔いしれて
カステーラ胸のすくほど割る王子
夕焼け小やけ友が手を振るビルの窓
蟬螂を無視して火傷した狐
寝返りを打つと酸素が抜けそうで

唐津市 久保 正剣

また違う噂を聞いているボトル
初デート肺腑をえぐること言わぬ
留守電で女一人の城守る
都合すぐつけます愛の電話なら
墨審の誤審を裁く席がない

唐津市 仁部 四郎

地下街で血液型を忘れかけ
日が暮れるおばばの露店売り切れた
村祭り子供クラブの露店あり
名水のツアー社長と顔が合い
大臣のジョーク物価に跳ね返り

唐津市 山口 高明

娘の帰宅遅れ日脚も長くなり
接待のゴルフと妻に頭下げ
罰金を妻に払ってゆくゴルフ
拝まれたばかりに難問抱え込み
チンドン屋犬も一匹従いてゆく

唐津市 筒井 朴竜

彼岸には蓬団子と里墓参
亥の子さま祭り主役は子等が継ぐ
鯉五郎追う濁櫓の釣天狗
菜畑の遺跡で赤い米みのり
古代史のページ披いた吉野ヶ里

唐津市 浜本義美

春の風結んで開く園児たち
地下街という傘がある菜種梅雨
対岸の朝市を見に出る宿の舟
奢られて奢って春の夜の酔歩
日溜りに枯葉同士の語り合い

唐津市 浜本ちよ

じんわりと注意の何と難しさ
上等の皿 時には出して気分変え
佐志川に白鷺群れて町平和
七転び八起きも後の無い余生
古い二人火の要心は殊更に

大和高田市 岸本豊平次

お水取り 春場所 選抜 春は其処
日曜菜園止めたら日曜多くなり
しゃべるのも無口も閉口旅の連れ
明日早いと言つとけば亡母起きていた
花冷えの真産の花見を見て通る

西宮市 門谷たず子

即席漬 妻は身軽に翔んでいる
傾いてまだゆつくりと舞う独楽よ
芝桜咲いて故郷は祭り月
一人の夜のひとりの音で食う茶漬
縹渺流転 風の軽さに身を任す

姫路市 人見翠記

悲しみの極致の人に言葉なし
定めある運命を悟れる人の顔
椿寿忌に我が家の椿も咲き初める
海に入る太陽浄土に誘われる
老いて学べば死して朽ちずをモットーに

高石市 浅野房子

ニュージールランド情熱ひとつ置いてくる
新旧交替 袖ひるがえす輩たち
義理がたく長幼序列守り抜く
無視されるよりはましだと聞き流す
雑草が伸びて隣は病んでいる

大阪市 大塚節子

総理退陣桜だよりで日が暮れた
専菜は旬を食べたと咽喉をこし
何時の日か嫁ぎゆく娘と雛納め
朝まだき祭りの後の難波橋
五味五法レトルトパックで忘れてる

寝屋川市 岸野あやめ

八重桜褒め殺しなど知らぬこと
習うより慣れたお米の水加減
ぬるい風呂樹に降る雨を聴きながら
酒タバコ毒は美味しいものですな
米の乱 漬物桶が渴いてる

宝塚市 丸山よし津

終点がないので急がない木馬

雑音にも老母の日課は狂わない

恥重ねかさねてきょうも生きている

ペン立てに使わぬベンが増えて行く

逆転にこだわり持たぬ砂時計

八尾市 宮崎シマ子

乗せてもらう孫の車へ投資する

花散って地道なくらし葱きざむ

風邪の床妻より娘よく叱る

影武者が好かれ本人出番なし

負けるものかと思う吊橋ゆれるたび

八尾市 高杉千歩

いい旅でした入園式へ老いふたり

居眠ってばかりの鬼と新幹線

結び目がゆるみ放しの孫の城

先代の話へ板前一本つけてくれ

五十回忌 父も兄も遠くなる

八尾市 吉村一風

いい酒を飲みたい電話かけてみる

歳老いて物差し持たぬことにする

不景気でせわしい貧乏神と居る

花も子も構い過ぎると育たない

花も実もある嘘だから身にしみる

大阪府 糺山隆

学問を植えると落ちた目のうろこ

港区に海が無くなるベイエリア

がむしやらに奪った愛は咲かすもの

早瀬から流れは洩へ移る恋

一夜限りの愛も予定に入れておく

八尾市 山下美津留

編み針のリズムを崩すあくび出る

伊吹山おふくろ仏に会うてくる

漂流の奇跡へ海は温かった

流れ星写すチャンスに巡り合う

万葉の花咲く園へはずむ足

八尾市 片上英一

心うきうき夜桜のバス通り

売れのこる土地にも春の息吹あり

小うるさい一言居士も黄泉の人

駅伝にあらずゴールの見えるまで

あっけなくやめたい言うてやめはった

姫路市 丁坪サワ子

明日の米あるのに騒ぐナンセンス

合格通知 家族に戻る笑いの渦

大風呂敷広げて待つ四月馬鹿

視野狭い女で箱を出たがらぬ

母よりも女を選んだ友の業

姫路市 中塚遊峰

奇抜に生きた父はゆつくり地に還る

修羅坂を越え来た母の持ち笑顔

遠い日は男まさりに生きた身も

錠剤が増えて枯野が迫り来る

佗しさの老母へ青空だけ味方

岸和田市 福浦勝晴

トデシャンといわれて持てたおばあちゃん

ハネムーンの寝言が耳にこびりつき

帰途急ぐピエロの肩に星が降る

二次会でゲロ出しポロ出し足も出し

政治家の頭にモラル植えつける

岸和田市 島崎富志子

インブット二度三度する記憶力

ほろ酔うてぼろり落した過去の秘話

アルバムに記憶違いの過去を見る

さて何年乗れるか免許書きかえる

満ちたりているのに老いの愚痴が出る

岸和田市 原さよ子

お花見をしながら今日もペダル踏む

ママと子の絵本を覗く春の風

和紙の味ほんのり温い筆の跡

恥や悔いもう積みたくないこの歳で

うぐいすが迎えてくれる寺の坂

岸和田市 高須賀金太

あほなこと言うな俺にも意地がある

爛漫の花から風邪をもろてくる

浪々の耳にラジオは落花告げ

通院の背に薫風の心地よし

薫風に遠く商店街の鯉のぼり

岸和田市 古野ひで

ブライドのかたまりみたい男の背

旅に出るプランがありて日々豊か

魚煮る匂かんばし亡母という

手入れたように綺麗な夕茜

三世代同居で守っている老舗

岸和田市 岩佐ダン吉

石仏他人のそら似かなと思ふ

飢餓の列明日の日本が見えてくる

反対かとそんなに念を押さんでも

抜け道を知って男が軽くなり

提灯にめし大阪に帰りつく

岸和田市 寺田甚一

ミクロ単位でもリハビリに日々努め

医者一巡漢方薬に頼ってる

樹医がいて古木安堵の花咲かせ

米漁り一巡をして花に酔い

見る人も咲く桜にもある寿命

島根県 小砂白汀

地平線とろとろと溶けはじめ

春霞木の芽を愛撫した泪

風を得て旗はにわかには生きかえり

蹴られても砂利踏みつけられても砂利

老妻病んで月月火水木金金

島根県 榊原秀子

四月馬鹿悲劇の主にさせられる

何故の涙夕やけ空といて

お花見がしたいと言つて逝つた母

あつけらかと笑えばすんでしまふこと

花曇りやたら眠たい気のゆるみ

出雲市 尼れいじ

病名がドイツ語で書いてある不安

泣かないでなどと優しく泣かせてる

確実に増える万年青の株分ける

時々馬鹿にもなつて良い夫

花が散る付合う気のない花が散る

出雲市 板垣草丘

お菜より米だと弁当詰めてくれ

長靴で即戦力の心意気

子孕みのカニに出あつたワサビ谷

駅前の本屋を久しぶりせかす

兄弟の溝にはまつた妻同士

出雲市 園山多賀子

きれいな事湖の汚濁は救われぬ

気がつけば父の轍を踏んで無事

建前と本音の落差にある惑い

春の蝶誇大妄想せぬように

価値観の違いの話はきこえない

出雲市 吉岡きみえ

矢よりも速い暦を繰っている

葉芽花芽つけて十八娘が巣立つ

葱坊主みにくい主張花の下

別府か草津か家のお湯加減

あなたには三角むすび負けました

島根県 松本文子

一日の長さ病室の広さ

病院の白という彩忌まわしき

面会謝絶ドラマは終るこのように

二度童子わずかに母は女なり

あの世とこの世 負けてなるかと病母を抱く

出雲市 伊藤寿美

恍惚の老母と楽しい話する

毒もある友の薬がとても効き

限取りを落せばやさしい父の顔

癒ったら一緒に飲もうと書く手紙

戦中派ブレンド米は慣れている

出雲市 岸 桂子

利口になって強い風には逆らわぬ

根源は小さな石の波紋から

真実を証す言葉の強い語尾

舞いながら蝶は着地を考える

母見舞う道にこぶしの花盛り

出雲市 久谷 まこと

善人も仮面の予備をもっている

ポケットを出しぶっているわだかまり

蛇行した我が道悔いは残さな

今日の首尾ひとり聞いている影法師

支柱だけ頼りに出来る豆のツル

出雲市 島 祥庵

万葉の海鳴りを聞く磯嵐

晩学に残した石を積んでいる

猪口ほどの不満があつてうまい酒

糸電話切れて償い出来ぬ距離

枯野残照眠りが深い母の夢

出雲市 石倉 芙佐子

滔滔と流れる川を抱く出雲

八頭の大蛇火を吐く暴れ川

この川を西へと流す計を立て

朝霧にたゆとう斐伊は絵の中に

やがて何時か昔話になる小川

島根県 佐々木 鳳笙

文面のここはあるいは誘いかも

すすり泣きより厄介な黙秘権

満開のサクラへ届く肩車

言い訳はもう決めている縄のれん

垢ぬけた子も帰省して年回忌

島根県 藤原 鈴江

あの日から長し短し五十年

もう何を聞いても驚きはしない

ローンまたローンで置き場のないわが家

歳なればもう歳ですと言っておく

良し悪しを年輪のせいに切り抜ける

出雲市 板垣 夢酔

指先は目より鋭い勘を持ち

言いすぎて心に重い石を抱く

鏡すぐシミだシワだと騒ぎだす

D51に負けぬ親父の汽笛鳴る

溜息をくれる切ない月の暈

出雲市 竹治 ちかし

散髪を影も一緒にして帰る

無造作のしぐさに妻という重み

酒過ぎた分だけ馬鹿になってきた

大きめな方を子に遣る母で生き

どちらとも眼覚めて起きぬ春の床

出雲市 小白金 房子

藁屋根に昔ばなしがたんとある
草餅の香り仏間の灯に上げる
闇米で稼ぐ男のほおかぶり
くされ縁四十五年の土に生き
どわすれを笑う夫婦の置こたつ

出雲市 小玉 満江

新しい道路へ犬の落し物
来賓で卒業式へ久し振り
草笛は鳴らずタンポポ旅に出る
すばらしい夕日貴方も見てますか
つくしんば伸びて花子に見捨てられ

竹原市 森井 菁居

考えてみれば私が至らざり
ジャングルを出てジャングルが恐くなる
結論を焦るとろくなことはなし
妻や子が寝ついて弱音吐くとする
高下駄を脱いで我が家の灯に和む

呉市 横田 英詩

何が言いたい私の脳が騒がしい
青年よ主張はガラス張りがいい
あの娘の瞳ドレス纏うと輝いた
毎日頂く梅がたつぷり漬けてある
喪の家を出ると泣き止む貰い泣き

竹原市 時 広一路

賞味期限 人間様も有りそうな
野良猫が逃げ出すまでの睨めっこ
お互いの自慢話を横で聞く
瀬戸風いで素顔の海がやわらかい
風邪引かぬ僕を馬鹿だと言っておく

竹原市 岡本 清水

だまし舟つい誘われて悔い残し
ただ一途老いと若さに隔てなし
春祭お不動尊と観音さん
分校もめだかもない過疎の春
一期一会 夫婦争いしてならぬ

竹原市 岩本 笑子

花びらの雨からあふれ出る愛だ
ウサギにも亀にもなつて四十路坂
テールランプよ別れよ汝死ぬなかれ
お茶席のはらりはらりと春が散る
通過駅スピードぐらい落したら

竹原市 石原 淑子

不況風 埋蔵金を追いかける
巣立つ子に祈ることしか出来ぬ母
手さぐりのまんま人生待ったなし
花より団子良く食べ良く喋り
ふっきてそよかぜほほにここちよい

鳥取市 両川 洋々
合いかぎが秘密をしやべるから恐い

影武者が踊る何かがきつとある

外米と競うコメです汗がしみ

飢餓の子へ神も涙が止まるまい

バカヤロー俺に賄賂が通じるか

鳥取県 林 露 杖

露草の藍に宿った朝の星

一病を抱いて落花の中に佇つ

閑居して不善も為さずテレビみる

妻病んで日頃の些事に噛みつかれ

腹の立つベットグルメのコマ―シヤル

鳥取県 松 下 たつみ

無意識に木陰を歩く医者通い

うぬぼれにこの頃多い誤字脱字

ブレセント女の芯にふれてみる

百の闇ぬけて五月の潮が満ち

休耕田世に出るときが来た不作

鳥取県 土 橋 はるお

賽銭箱に米が欲しいと書いてある

婆さんが消火器米で買わされた

みやげには米がいちばんいいだろう

むずかしい名前の人はむずかしい

隣から借りたお米は外米だ

鳥取県 谷 口 次 男

騙されて総理大臣になっただけ

チューリップ ボケるでないと笑いかけ

坊さんがカラオケしたりストしたり

センセイや知事や総理がコメ拌む

ふるさとも与作が消えて高速道

鳥取県 江 原 とみお

列外で雲の去来を見えています

ぎっくり腰ぐらいじや花見断れぬ

事の次第は立ち飲み屋から起きる

執行猶予の傷口を舐めている

一悶着起きそうな風ふいてくる

鳥取市 岩 原 喬 水

客待ちの多い医者ほどよくはやる

お邪魔なら先に逝くワと妻が言う

一田のエラー銀行灯を消せぬ

襖越し姑の耳は起きている

親の癖子に習われてやりにくい

鳥取県 乾 隆 風

わたくしの貌へ鳥が首傾げ

おちよば口静かな蝶のお弁当

居酒屋へ迎えに行つて帰らない

沢庵を噛む音がする電話口

脳みその筈がゆるんで鎌を研ぐ

鳥取市 西原 艶子

冠雪の山の美しさには負ける
履歴書へ無職と書いて母でいる
万歩計海を眺めに行きたがる
さりげなく電話するよという別れ
過去は過去みんな許して従っていく

鳥取県 羽津川 公乃

歯を抜いて身体髪膚父母のこと
孫の話でやっと会話を保つて
ロボットの部品なんかにならないぞ
寡果てて話し相手が欲しくなる
難しい顔でユーモア句をひねる

鳥取県 山根 八重

愛なのか無口のままのすみれ草
ビー玉に勝った負けたの仲間割れ
春の陽に歩幅が合った君と僕
花好きの人間なので情がある
散りぎわのさくらよ笛はいい音だろう

鳥取市 武田 帆雀

知名度も表彰状も古くなり
塩と味噌あれば浪花の恋しぐれ
おぶう持って来ますやさかい京の宿
懷中時計元駅員と言う誇り
やさしい字で厳しいことを書く女

鳥取県 田村 きみ子

アンマ機で愛の疲れを取っている
ブロッコリーうまい美味いと喉仏
ささやかな幸せ琴を弾く時間
朝露を包んだ苺 唇に
脱け殻になっても恋をつづけよう

鳥取県 黒田 くに子

職安へ個性なくした顔でゆく
大正ロマン生きた笑顔がやわらかい
いい汗に男の顔がすてきな
置き去りにされそう笑顔まいておく
ユーターン嫂の笑顔にすくわれる

岡山市 川端 柳子

ほめられてあどんな顔どんなかお
世を甘くみすぎてつま先立っている
チャンスかも一期一会の風の彩
炎えてよし炎えぬ又よし春の雪
どこ縫うてきたのか車上の花吹雪

岡山市 嘉数 兆代賀

いい事がありそう駅へ来てしまいい
良い人だとみんなに好かれカネがない
尻尾振る夫をとしだなとみつめ
叱ってる老母にもあった同じ過去
ライバルの言葉をバカなかおで聞き

片隅で開き直っている積り

岡山市 矢内 寿恵子

OB会みんな一病息災で

老眼鏡かけて外して無為無策

貿易は黒字 家計簿は赤字

過疎の灯が消える明治がまた消える

岡山市 小林 妻子

足腰が動いて粗大ゴミが逃げ

あれども吞んでどこかが悪いのか

喝采は柩の中で聴けばよい

現身の脆さに坂を振り返る

孫に手を引かれた鬼と彼岸花

岡山市 井上 柳五郎

きざはしの昇り額く靖国社（東京にて戦友会）

馴染の名墓碑たしかめて泉岳寺

咲くことが花のいのちの生き方か

平均寿命よく生きたなあ戦友会

カタカナ語挑む老父の新語辞書

岡山市 荻野 鮫虎狼

一ランク落して土産買い揃え

花見酒僕の女も美しい

活きた金使う財布の紐固い

心経をおぼえてしまう不倅せ

犬だけが僕の味方の散歩道

真心に会うと打算が幕を引く

残り火を掻き回すから煙がられ

修練の量が構える仕切り線

ある所にはあると知らせる米泥棒

ゼネコンが終れば佐川が再出馬

岡山市 山本 玉恵

もえ尽きるまでを祈って絵ろうそく

人間の顔でしばらくかくれんば

猿芝居のページがまたも狂い出す

白旗を立てて安らぐ母の椅子

貧乏ゆすり得意の中の得意芸

岡山市 岩道 博友

一泊の旅人地酒の厚意受け

おだやかな言葉で草花蹴ってゆく

猛犬と書いてスピッツ飼っている

年金で塾の補充を送り込む

春の風 川原で焼肉まだ足らず

姫路市 大原 葉香

らぬき言葉失礼だとは思わない

ゼネコン汚職にぎにぎしてる時代劇

夜景美の底で悪魔がほくそえむ

伸びちぢみ輪ゴムの範囲で生きている

ハマチブリ 魚の世界にある序列

今治市 越智 一水

春一番 金は使えと吹いて来る

ひじ枕 女も見せる花疲れ

ウインドを妻とのぞくも春の宵

倅せをつかむと見えぬ矢がささり

貧乏を苦にせず風と光うけ

京都市 松川 芳子

散髪へ行く気にさせた春の道

似なくてもいいとばかり似て親子

若さとはミニもロングも様になり

嘘だとも言えずだまって聞いている

病院の前のポストはまだダルマ

神戸市 山口 美穂

チューリップうちは赤いのが並ぶ

やさしすぎる老母へ詫びたいことばかり

春の話をきこう芽柳がゆれる

春うらら老母もののこの庭に居る

メッキ剥けたわたしはきつと嫌われる

西条市 片上 明水

花を観に連れだつ友が減ってゆく

定休日だとは知らずに回り道

酒倉の匂をつけたままで駅

鐘順に叩いて仏具店を出る

町会の役は黙っていてもくれ

大阪市 板東 倫子

子を思う老母から届いたこしひかり

若者のくせに冷え症不眠症

粹も洒落も通じぬ人と暮してゐる

年寄りの冷や水でよし好奇心

どこへどう筋通すのか黙秘権

豊中市 吉田 あずき

音もなく花ふりかかる乳母車

目測はいつも自分に甘すぎる

妥協して胸のガラスの割れる音

挑戦をした残滓の中にいる

病院の自販機奈落へ落ちる音

広島県 田村 新造

シベリアで死なず数奇な流浪旅（奥安領逃亡記）

満蒙たそがれ赤い夕日がまだ落ちぬ

猫柳の陰で追手をやりすごし

道ばたの遺体はぐれた仲間たち

人影を見れば追手と脅えきり

静岡市 安本 晃授

年輪を刻む確かな筆の跡

嘘まこと使い分けての老いの旅

御機嫌がいいと味方に乗せられる

人間不信 今日 日は驢馬だけ信じよう

矢印の奥にコントが埋めてある

高知県 小澤幸泉

一点を見つめるだけで日が暮れる

移動待ち一人ふたりと午後の駅

黙々と流れるようにはこぶペン

青春の母の便りを読んでやり

話しても黙っていてもお茶になる

美禰市 安平次弘道

買言葉 忍の一字を見失い

地球自転ああ確実に減る命

シナリオに落丁きついジョークだな

罪の数と仮面の数が合う怖さ

方舟が沈むわたしが試される

広島県 藤解静風

二十貫あった昔が泣くあばら

身を揉んで泣いた昔の女ジメ細身

表札を大きい文字に書き替える

波風を立てぬ分だけ血がさわぐ

近頃はやらずの雨も降ってこぬ

吹田市 山本希久子

春を追い春に追われて北の旅

花の乱 今しかできぬことがあり

一週間 火曜日だけが空いている

若葉風失くしたものの大きさよ

そうだったかとぼけているが呆けていず

羽曳野市 田中透太

春愁や冬の微熱がまだ続く

沈丁花 寒い話はしたくない

襟足の綺麗な人と花の下

助手席の女は少し喋り過ぎ

紙コップ私も同じ使い捨て

今治市 野村京子

茹玉子つるりと剥けた仲なおり

あや取りの橋がもつれる戯画の中

喪の海でおんなは浮輪はなさない

森の中愛どこまでも深くなる

外したらひとり歩きをする仮面

寝屋川市 柴田英壬子

老人会の席でもめるイデオロギー

おろし金使い馴染んだ古いほう

靱帯を痛めたらしい花の席

六月に生まれバラの日涙の日

会者定離 牡丹くずれる庭に佇つ

京都市 山海友熙

春の旅 心支える詩を秘めて

花吹雪 哲学の道ゆくロマン

点心の膳に向うに牡丹の芽

ころも替え肘のまるさをそつと抱き

打ち明けて悩んでないという他人

西宮市 西口 いわゑ

春風の軽いお世辞にのせられる

しあわせな悩みを書いて来た手紙

その言葉四月馬鹿でもほっとする

春雨に濡れて夫婦で風邪をひき

花が散るドラマが一つ終るなり

高知市 北川 竹萌

ありがたい三度の飯の腹八分

舗装林道堪えて三つの落椿

今日の雨側溝急ぐ花筏

己が靴間違ひ帰る惚けはじめ

うれしくはないが薬が友になる

町田市 竹内 紫 鏑

万歩計 桜並木をはしごさせ

もと住んだ辺りは踏めぬ大通り

着ぶくれの姿 絵馬つる合格者

母となった元OLに行き合わず

書き込みも手垢も亡父に相違なし

宇部市 平田 実 男

月月火水木金金つちと生き

焼石へ水に似ている植樹祭

天が泣くここにも人の上に人

終って良かった拍手をアンコールと思い

美しくないのに棘のある女

大阪市 河井 庸 佑

小才利く男巧みに泳ぎ切る

愚痴理屈言って値打ちを下げるだけ

踏み台があるから登れたのを忘れ

対応のまずさが穴を深くする

地味にしてもやっぱり目立つ人

大阪市 本間 満津子

数えか満か生れ年月答えとく

予定日の無い命に悔いが無いように

記憶力抜群うかつにしゃべれない

言わせとき きっと自分で厭になる

知らん顔してたら噂もう消えた

大阪市 神夏 磯 典 子

幸せな方ばかりゆく竹とんぼ

残り時間いちにちいっぶん大切に

忙しい日猫のあくびに腹が立つ

千金の宵をつんざく救急車

合格の御礼は親が告げにゆく

大阪市 北 勝 美

付き添いに付き添いがいる老いの旅

幻覚は病気の所為かも夜のしじま

半分こそんな気持にある平和

半分に徹して心にあるゆとり

検察もてこずるバッジの黙秘権

大阪市 藤田 頂留子

梅雨空にこもる祈りの田植唄
物音を立てて一人のわび住い
握る手の温味に心とけてゆく
夜は明ける一時の迷いならさめる
転げこむ夢をみている宝くじ

大阪市 上田 柳影

花冷えや祇園 円山 先斗町
仕舞わずに良かった春の戻り寒
退院も近し桜も咲き始め
縁起よい靴はいてゆく淀 園田
職安の朝ゴム長に夢があり

大阪市 稲本 凡子

たかが風邪されどかせなり一か月
風邪熱に春だはるだと葉書くる
酒粕の酔いが回った貧乏性
忘れ上手捨て上手にはなれぬ老い
死ぬ日までおしゃれ心は失わず

大阪市 寺井 東雲

身を護る銃が社会の悲劇生む
鬼よりもたくましくなれ祝風
農相が毒味するほど訳がある
タイ米を食べても細くなつてこず
あと一人応援団に励まされ

大阪市 榎本 落児

九官鳥あなたあなたと呼びすぎる
フルムーン妻は居ねむりばかりして
駄菓子屋のおばさん年齢をとらはった
豆餅の豆に意地悪されている
じゃがいもの花にもきつと花言葉

大阪市 松尾 柳右子

帰り旅 現実感を呼ぶネオン
雨の朝うれしや雨具新調よ
宿ゆかた自慢話は花ざかり
老斑の手の甲さする終い風呂
バスツアー弾む外は銀世界

京都府 都倉 求芽

波紋は波紋 うず潮にはなれぬ
大海の真っ只中に見た太古
柁の頭 チョンときそうな花あかり
一日のばしで大型ゴミがまた一年
追い抜いた特急が訴えられている

富士宮市 渥美 弧秀

陽を受けて雪見酒する白い朝
窓は雪FM流れ独り酒
思いやる言葉が通う嫁姑
詩とピアノ ライフワークとなつて生き
わらべ歌弾いて故郷の風覗く

奈良県 長谷川 春 蘭

誰彼と居ても孤独の大試験

詰襟の固き初心で入学す

婚の荷の落着く居間に水仙花

花疲れとは快き家路だな

上る下る自在に京に燕来る

堺市 黒田 真砂

食べてみれば案外美味い輸入米

味にこだわりの高い米買い悔い残す

水温む絵具をといて明日の虹

いくつもの転機乗り越え六十路坂

失った愛の大きき知る鏡

奈良市 米田 恭昌

生一本いつもストレスためて

受験校一本に絞っていた驕り

やがて来る嫁にそなえて朝のパン

還暦に子から嬉しい旅三日

入社式 息子凜々しい太い眉

藤井寺市 中島 志洋

親切が過ぎて相手に疑われ

イヤリング隣の噂聞いている

満点と言わぬが我が家に過ぎた嫁

お世辞だと解ついても乗せられる

未だ女ゲートボールに好きな人

静岡県 蘭田 漠杏

電話ありほっとしている親心

屋根を見て主とくらしをおし計る

梅の花 三寒四温が未だ残る

「何も言ふな」議場の前で釘を差す

ぎこちない良妻賢母演じてる

尼崎市 田中 薫

河馬の重さから喜劇の幕が開く

生き恥を落とす真昼の横断歩道

朝市の目刺しの眼窩海向いて

ころろ重き日は住民票を確かめる

回り道をする自分を嫌い抜く

北九州市 梅田 宣司

なるほどの位置に展望台がある

よいとこに來たと留守番酒を出し

その辺りの事にはふれぬ仲間達

凜々しさはもう釣り合わぬほどに老い

袋小路曲れば出会う君と僕

富田林市 池森 子

五月雨は白い小指に降りしきる

花見団子が知ってる母の掌の温み

うっかりと素顔を見せた薔薇の棘

一針に殺意を抱いたのはむかし

春の噂は尻尾が切れたまま弾む

松山市 谷 真風

真実と真実融けて藍の青

小町なら食べてもみたい人の列

寝ていても心うきうき花便り

川柳をやめたら俺は消えるだろう

山寺の静寂素敵しし威し

河内長野市 井上喜醉

子の部屋とリズムが違う古時計

お世辞より本音を聞いて酒うまい

騒がれて素直な道に蹴つまずく

背中から笑顔の妻が靴すべり

噴煙を吐いても可愛い桜島

倉吉市 野中御前

蛇の目傘うれしい雨の音がする

ひとりいる部屋はとっても深い海

わたくしと同じ匂のする雨だ

鬱の日は花もカラスも同じ色

駱駝ぼこぼこはしらないことにした

阪南市 坂口公子

花ぶき花のじゅうたん金婚式

聞きなおすとやっぱりおかしかった己

濠の辺の芽ぶく柳ときめきと

無い袖も振ってみたくなる快挙

ためらわず急所を突いてくる鏡

東大阪市 崎山美子

ときどきは子供にかえるビール腹

ときどきは妻にもお世辞忘れない

満開の桜に思わず深呼吸

泥かぶる勇気もなくて流される

ときどきは腹八分目を思い出し

和泉市 西岡洛醉

妻の愚痴布団と干してある真昼

結論は明日に延ばした終電車

今日の憂さ酒盃の面に映ってる

善人の一步朝霜軽く踏む

すんなりと嘘が通った日の恐さ

吹田市 井上照子

笑うまい祖父の香残る草の屋根

全快を信じた夫の花吹雪

口止めの小さい罪に気が疲れ

風雲急 脳裡をよぎる防空壕

娘の肩を当てにしている寒い夜

守口市 森川まさお

たんぼの道に地蔵さんがいる

島の坂自分の足で歩かねば

一人旅電車が時刻通りくる

出遇いより別れが味な旅がある

ここからは詩人になるぞローカル線

寝屋川市 平松 かすみ

神戸市 木村 貴代子

博学も浅学も居て社会学
アドバイス 本音 建前ありがとう
ひとりだけ本音をくれる他人が居る
割り勘へ胃の無い人もまじってる
剪定でさえも心の痛むもの

西宮市 秋元 てる

声聞けぬ人と過した五十年
唯今と大声 一人暮しなり
風邪もよし息子夫婦がとんで来た
声に出して言わねば通じないこの世
ぼっくり寺 回数券が要る話

茨木市 堀 良江

降りたくなつた れんげ咲く無人駅
ツンツンとりらもキウイもあじさいも
春の汐に足浸してる朱の鳥居
親指姫すわっていそうチューリップ
嵐山若者こんなにおりますよ

川西市 松本 ただし

原色の好きな男の曼陀羅絵
春愁に火を吹きたがるフライパン
白旗を枕の下に敷く懺悔
振る旗を持たずにヤジる浮動票
外米が余ると出てくるコシヒカリ

大声で教えられてもすぐ忘れ
更年期 自分に甘くなつていく
甘からういかなごをたく春のうつ
恥を知る人はそのうち文化財
桜散る父と歩いた日のように

富田林市 片岡 智恵子

風船が萎む女の陰と陽
急カーブ小癪な影が追ってくる
ふかし湯の首は笑つてばかりいる
火の粉浴びライトもあびた素浪人
不都合と思うポケベル持たされる

松山市 宮尾 みのり

免罪符いつしか妻の手の内に
定番の散歩コースは花ざかり
百歳は意地でも生きてやるブラン
わだかまり解く一言が言い出せず
釘をさす立場わたしもさされてる

伊丹市 山崎 君子

宅急便 米とたけの子 母ごころ
花だよりコースを变える散歩みち
蔵の中昔と同じ蜘蛛がいる
あじさいは午後の色して待っている
午後三時今日もひとりのケーキ皿

堺市 柿花 紀美女

ぬくぬくと北の吹雪を見るテレビ

初出社 父がネクタイ締めてやり

妻の留守 犬と金魚に先ず餌を

さくら餅噂話がよくはずむ

投書欄私も言いたい事が載り

宝塚市 中田 純次

生きるコツ心おだやか腹八分

人間に鬼も仏も住んでいる

年金もやがて十年ありがたし

ちゃんちゃんこ亡母の残した温かさ

大車輪一寸不安な新空港

富山市 酒井 輝

大臣になると巧みな解る嘘

辞めたけりや何時でも辞めるいい身分

直ぐ轢かれそうで轢かれぬ街育ち

軌道たて直しひとの背ばかり見る

理に優るおんな炎え切る術知らず

堺市 中野 樺子

展示会はほしいと思う非売品

ふとん乾すこれが極楽陽のぬくみ

タイ米がピラフに美味と胡座かく

クラス会おしゃべり袋一年分

逆縁のつらさ泣け泣け泣けと耳の奥

枚方市 海老池 洋

旅の果て川は眠りに海に入る

去ればもう私を消している鏡

畑打てば先祖と通う土の唄

お前もかゼネコン様に踊らされ

鬼ころしという名の酒の酔い心地

豊中市 井上 直次

森繁の台本にない渋い咳

方言の味を煮詰めて囲炉裏端

上役が試しているぞホメ言葉

芽を摘んで教育ママの描く夢

近すぎて妻の好み分からない

堺市 近藤 豊子

卒業へ横一列のうつくしさ

横むきに横むきに咲くヒヤシンス

ヒヤシンスうすむらさきのその吐息

夜香蘭 高速道路の遠き音

アポロンの愛のかなしみヒヤシンス

吹田市 瀬戸 まさよ

古文書の紙魚と心中するあなた

生演奏この高ぶりも久し振り

ごみの日は主婦早々と化粧する

冬の風邪嘘やうそやと電話口

満ち足りたさくら毛虫のいじめあり

名古屋村 越村 枯梢

よいとまけも一つまいて陽が落ちる
死体発掘ドラマのように見てしまふ
昂りの日記のなかの速記文字
杖一本あれば事足る旅仕度

岸和田市 芳地 狸村

御座船にカメラかまえる瀬戸の海
人情に温もりがある新世界
他人には言えぬ化粧をしています
ひたむきになるからこわくなる素直

岡山県 二宗 吟平

過労から来たなと思う後のこと
大声を出せとは無理な遠い耳
一步引く倅が卒業まだ出来ぬ
憐れみの心にもうた温い席

箕面市 椎江 清芳

お願いをしたが神様話し中
城一つ築いて父は老い給う
金で買う味方落ち目になると消え
野心もう捨ててもう終点見えてきた

貝塚市 行天 千代

耳鳴りが私の頭かき乱す
若い日の昔なつかし利休下駄
娘の幸を願うて粗食に耐えた亡母
御命日あの日も桜咲いていた

吹田市 栗谷 春子

桜咲くそのためいきは羨望か
何もかも春の光に手をのぼす
筆談に明るい文字を探しつつ
花のした今日だけは皆しあわせに

和歌山市 山田 高夫

健康が大事と思う治療代
二番手は以下同文であしらわれ
ふるさとの景は時間の差を埋める
偏屈で頑固でどこかお人好し

守口市 結城 君子

地震かと思えば一軒建つらしい
ふるさとの駅長前歯抜けたまま
菩提寺の往復つくし取りながら
ほどほどの保険で居心地よい夫婦

和歌山市 田中 みね

豪快な妻のくしやみで夜が白む
海外へお隣さんのお留守番
結局は金の力による和解
淋しいな教育一家の不愛想

宝塚市 吉田 笑女

受け売りの言葉へ五色の色をぬり
今日もまた見過し出来ぬ花売場
花冷えにまたふり返す母の風邪
老人のおしゃべり嫁の愚痴話

鳥取市 春木圭一郎
美女ならば酒もタバコも許せそう

コードレス電話が風呂についてくる
ここの一番やっぱり妻に助けられ
お迎えが来たらしきと黄泉へ行く

鳥取県 さえき やえ

恵まれた天気ころも干しておく

神さまと約束がありがたいな日

笑顔でよってくると思えばまた無心

捨てきれぬなさがうづく春の宵

堺市 一瀬福一

競うても亀には亀の足がある

耳に穴あけて女はまだ飾る

かたくなに白を欲しがる冬帽子

この人にジョークが欲しい一目惚れ

羽咋市 三宅ろ亭

椿にも珍種あるのか一輪活け

山村の入学ひとり来賓は三人

分解の危機与野党ともに持ち

腰ひねり切れ味ためし竹を割る

仙台市 川村映輝

人生いろいろ親子も孫もいろいろ

大きな荷物積み残したまま辞任

食欲旺盛 外米でよしパンでよし

物忘れに拍車をかける春らんまん

鳥取市 美田旋風
喜びと悲しみくれる体重計

渡り鳥富める日本へ行きたがる

よその花眺めてまた菌食いしばる

近道をゆっくり歩き油断する

和泉市 岡井やすお

七月の功一週で欠いた殿

寄合った世帯一年とは持たず

首相レース民は暫く横に置き

野球には逆転サヨナラホームラン

寝屋川市 堀江光子

聞き役の方が一枚上らしい

目を閉じて見えるものあり夜の底

伝言板一行残る夜の駅

止り木の背それぞれに風まとい

(前月分) 七尾市 松高秀峰

広告の裏に本音が伏せてある

癌よりもいいわと透析ももう二年

一生は光もあれば影もある

充電に帰るふる里母が待つ

七尾市 松高秀峰

ゆっくりと煮込んだ母の味が好き

外米もなれて話題も消えてゆく

透析をすませて帰るポンコツ車

賞味期限切れて夫婦に彩が出る

池田市 岡本 吉太郎

人生とは壁乗り越えるごとく強し

老いた今 壁あつたやうで無かつたやう

古アパート出るに出入れず共に老い

陽気な割に財布のひもの固い妻

河内長野市

植村 喜代

長いこと忘れていた米櫃を覗き

遠過ぎる駅へ言い訳をする靴

お金では買えない物はなおほしい

けんかして母娘の絆深くする

岸和田市

田中 文時

来客の前で叱つて後で詫び

休日も六時に起す座敷犬

教養は無いがお互い良き伴侶

駅弁のお菜交換フルムーン

鳥取県

津村 八重子

立志伝読んで背すじをのしている

童謡がやんわり里にこだまする

母の日の朝も母さん早起きか

母さんの影はみじかくなるばかり

芦屋市

黒田 能子

泣き声を耳に残して孫が去ぬ

あの人の眼鏡の奥で許される

年と共に肩のあたりが母に似る

定年の競い忘れた朝の靴

豊中市 三宅 つえ子

初雪にはしゃぎ過ぎて笑われる

はるばると明石の蛸を持ち帰る

女三人はしゃぎ過ぎて貝になる

好奇心 氷雨の中を車椅子

豊中市

滝北 博史

ばくが傘持つて出た日は降らぬ雨

すくすくと育ち単車を買わされる

病院へ見舞いに行つてプロポーズ

新しいメガネをかけて投票所

豊中市

江口 明光

目に見えぬ信用だから担保とる

常識も団体旅行はちとしびれ

元気だけ取り柄の父に金が無い

経済が思想を変えた平和ボケ

和歌山市

玉置 当代

逢うて来た余韻ベダルも軽く漕ぐ

かと言つてひとり暮らしも出来ないし

顔中でりんご噛んでる老母達者

不況風わたしの椅子のない巢立ち

和歌山市

堀畑 靖子

ジェラシーのハート弾力性に欠け

元栓を締める噂の洩れぬよう

振り返る時間をくれる花時計

つい心許して見せた舞台裏

東京都 山口 新子

改札口抜けるとラーメン臭う地下
無彩色が好きで白黒つけました
朝帰りつぼみほつはつ黄なるか
去る人よ両掌に残る割れ茶碗

鳥取市 西村 黙光

子育ての出来ない母が増えて来た
名も知らぬ敵が心の隅に棲む
ペンの先 一人相撲がとても好き
枯れ木にもコネの花咲く天下り

鳥取県 西川 和子

村中を飛んで回ったいい話
床の間に明治がでんと置いてある
老齡化 看板一つずつ消える
腹帯を巻いて女を意識する

岡山県 江口 有一朗

よい話ばかりは聞けぬ耳飾り
一期一会の思いが足りぬ物忘れ
日々好日の中によい日と悪い日と
何時何かあっても不思議ない齡

大阪府 八十田 洞庵

一人旅古寺にある魚板打つ
税務署に嘘と真面目の顔の列
唇を噛んで女はまだ信じ
時折は逢わねば軌道外すかも

岡山県 池田 半仙

虫達に啓蟄させる土の温み
ひと色で団地と解る屋根瓦
用心な土竜抜け道作つとり
素人の鉢植え花芽つき安堵

大和郡山市 坊農 柳弘

塩贈る敵があるうち職を退く
寝化粧に手鏡そつと妻五十路
片思い酒は未練の誘い水
父の日に亡父のおしえを子に継

鳥取県 鈴木 公弘

田起こしの汗を信じる外はない
朝が来てイカ釣り船の大あくび
顔ぶれは同じ職場の芝ざくら
人恋うて道先まわり遠まわり

鳥取県 上田 俊路

逆風にハードル下げぬ一本気
一本気まだ逃げ水を追いつづけ
山男 雪の重みを着て還る
雨三日 山陰の旅らしくなる

大阪府 清水 利武

ようお越しハンナリの声聞く京都
天国から招待状はまだ来ない
タコやきで花見の娘よく笑う
スケジュールたくさん余る停年後

出雲市 富田 蘭水

光る鉄背広もいらぬ土と生き
テープ切る少年あしたを約束す
みがかれたリソゴと語る失意の日
独り酒だんだん天下手の中に

鳥取県 乾 喜与志

年金があるから遠慮なく候
不老長寿おくすり一合半で善い
悲しいことを忘れた涙腺が瘦せる
無常迅速おとうとまでも先に逝き

倉敷市 田 辺 灸 六

生きるため動いて食うか食われるか
開店休業 猫の頭を撫でている
散り際を惜しんで花見酒に酔う
年金の老後に少しある不安

鳥取県 幸 家 單 車

純米を買ったと妻の手柄顔
お世辞とも知らず本音をつい洩らす
めきめきとマグマが地球崩してる
タイ米のお陰チャー飯三度食う

藤井寺市 福 元 みのる

わびさびも分からぬままに年を食い
二代目が初代越すのは極至難
あくせくの書写を無心と褒めてくれ
嬉しい日だのに夜半にうなされる

西宮市 瀬 尾 六郎太

まためぐる春誘う炎 二月堂
リレハンメル SEE YOU NAGANO バトンされ
古女房 顔彩かれてボケ封じ
長梯子トゲを避けさけ柚子の里

大阪市 渡 部 さと美

あなたへの想いで下がる藤の花
ミニ公園も桜満開日本なり
新しい話題に変えて新茶のむ
カゼ三日桜三日の春が往く

吹田市 茂 見 よ志子

金婚へ後二年だと励まされ
古希の春 心へ誓ううす化粧
福祉ビジョン言うには安し机上論
FAXが着いたか電話かけてくる

倉吉市 最 上 和 枝

丸バツの二択に強いもやしっ子
母さんの霜やけの手に二重丸
休耕の畦を彩るいぬふぐり
旅の湯に油断の顔が浮いている

倉吉市 米 田 幸 子

風邪引いたお陰優しい手に触れる
上役に華を持たせりや風が風ぐ
愛してるなんて今更言えますか
会長の息がかかって威張らせる

安うなつてもまだ高いキタ

箕面市 岩津 ようじ

来世紀無理して覗くこともない

手酌でないと飲んだ気にならぬ酒

真子 白子 河豚さえメスは恐ろしい

茨木市 藤井 正雄

厳しさをどこかへ置いて孫を抱く

駅前で会った息子が誘う酒

一言を取り出す刑事煙草出す

スマートにノーと言つてる女文字

大阪市 清水 絹子

ひび割れても欠けてもそこに母の壺

塩壺をみだし部屋には四季の花

嫁入りからの家計の世話に五つ玉

天気予報なるほど今日は初デート

倉吉市 野口 節子

こだわりを捨てたらうまい飯の味

山の神の開き直りが恐ろしい

火が消えるまでは善人演じきる

音立てて脳細胞が消えて行く

和歌山市 北山 好笑

笑い皺増えて性格丸くなる

その時はその時という体当り

後ろにも目があるような妻の勘

薄化粧 今日の予定の顔になる

アデランス買うて見ようか戻り寒

広島市 森田 文

口数の少ない子です虫が好き

賛美歌にタクトはいらぬ神のみ子

ユニークな名所になったおもちゃ館

鳥取県 石倉 美恵子

イヤリング可愛く揺れて油断する

自由型で泳ぎなさいよ男でしよう

包みこむ笑顔で責めてくる女

お邪魔にはならない位置でみつめます

交野市 福崎 しげお

例えばの話で真実ついてくる

うさぎ小屋 花の手入れと犬の世話

義母卒寿 妻も頑張る万歩計

万歩計つけて天国 回り道

東大阪市 指宿 千枝子

人数をチェックしている幹事さん

父に似て手紙一本子は書かず

親父より地震の揺れが怖いと言う

おまわりも雀も居てた二重橋

岸和田市 三輪 通彦

同居して視野の違いを知らされる(娘夫婦らと同居)

肩書きが消えて言葉も丸くなる

褒め言葉ばかりで骨がもろくなる

終身雇用あてがはずれた不況風

和歌山県 西口忠雄

他人から娘より大事になった嫁

その訳はきかない早婚だってね

七三に座ればおかめも見違える

和歌山県 池永正雄

入りたくないのに開く自動ドア

夕日見りや此処はお国を何百里

鑿一本 名刀のごと宮大工

鳥取県 石尾かつ乃

新しい道にも馴染む白い杖

慰問する園児かわいい豆絞り

許そうか澄んだ空気に負けました

鳥取市 前田一枝

幸せが海より深い恩忘れ

古日記隠し文字さえ色あせる

明日行くと行って三日も来ない人

大阪府 町田達子

ご近所もアンテナ磨く春ですね

夙川へ一日を雲に誘われる

白菊と心供える亡母の忌に

大阪府 小糸昭子

雑炊の旨さ知ってるタイの米

細切りのキャベツ互いに凭れ合い

娘を送る駅のホームは長過ぎる

大会柳川崎尼

(前月分) 東大阪市 安永曉子

倒木に登った鴨の日向ぼこ

申告をすませ買物籠に桃の花

桃の節句 母は蛤買うて来る

東大阪市 安永曉子

風に乗り輪唱のよう桜咲く

かごめかごめ遊んだ声がまだ聞こえ

十七番ホール雲の峰へとんで逝き

とき 6月26日(日) 午前11時半開場

ところ サンシビック尼崎

(阪神尼崎駅南出口西へ200m)

会費 1000円

柳話 森中恵美子氏

兼題と選者(各題2句)

「橋」 佐藤純一選

「雨」 中野文擴選

「奪う」 森田栄一選

「ビール」 黒川紫香選

「眠る」 北川弘子選

「絵本」 小出智子選

「帽子」 田頭良子選

◎締切り午後1時半 投句拝辞

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(42)

橘 高 薫 風

4月号は99号で編集後記「編輯の窓」は路郎の筆、その一部を紹介する。

▼本誌の5月号は創刊壹百号に相当するので記念特集号として素晴らしいものを刊行したいと編集委員こどもと大車輪である。その内容についてはお楽しみということにしておく。

▼同時に祝賀と宣伝を兼ねて、五月四日の夜、朝日会館で「川柳の夕」を開催し、ここに大衆の視聴を集めて、本社が多年主張して来た川柳の社会化をより具体化させることにした。

先ず講演の方では井上剣花坊氏（東京）川上三太郎氏（東京）等が来援されることになっている。本社側で庄萬よし君や私などが熱弁をふるうことになっている。その他交渉中の人々もあるので素晴らしい「川柳の夕」が開催されることは今から想像に難くない。なお会館では余興に多くの時間を割き、長唄（東都の杵家弥七師並にその社中）、こども舞踊（山根舞踊研究所）、川柳劇（川柳座）等が公演されることになっている。新たに組織される川柳座は拙句「恋の畏あめ眼だろつか眼

だろうか」を演出することになっている。これらの催物は一川柳社の仕事としては荷が勝ちすぎているかも知れないが、天下にやつてやれない事はないという意気で立ちあがったのであるから、川柳の愛好者は我等の意気を壮とせられ、川柳愛好者は来り会して出来る限りの御援助を惜しまれないよう特にお願います。

▼又各地の同人及び社友で会館に於ける祝賀記念を好機として来阪される人々も多い。松本市の石曾根民郎君、松山市の三好計加君、滋賀県の平井蒼太君等からは既に来阪の報に接している。京阪神の同人社友は何れも委員として活躍しつつある。

▼三月の月は同人社友会をカナメ喫茶店で九日と十七日と二回開いた。九日の会合は百号記念号及び記念祝賀催物に関する委員選定の件、十七日の会合は祝賀委員及び編集委員の具体案に関する協議並びに決議であった。

路郎先生の宿病は余程軽快になったらしいが、葭乃先生をはじめ家族が感冒にかかって

高熱病臥に巻き込まれる。百号に関する準備の会合だけでなく、関東川柳家の関西訪問団の来阪も近づいたことで、受け入れの会合には、特に緑雨・山雨楼・琴人諸氏が路郎先生を助け大車輪の活躍をする。そのような中で楽しい出来事もあり、編集後記は続く。

▼三月二十八日から葭乃の経営で小さな喫茶店が開店される運びになっている。私は勢い家主であり資本家である。里十九君にそのことを話すと、「二階に住んでる家主がおますかいな、アハハハ」と景気よく笑う。そんな家主があるかないかの議論はサロン・キングでお茶でも啜りながらやって下さいと葭乃が早速商売氣を出す。そうそう「千客萬來みな来ると困る也」でポツポツ来て、ポツポツ儲けさせて貰うに限ると、僕が資本家らしい本音を吐く。

ここで関東川柳団歓迎會の様子を記すと、日時 四月三日午後一時、会場 南区中寺町芳雲寺、挨拶 麻生路郎 岸本水府 村田周魚、講演 阪井久良岐、兼題と選者 雑沓 酒 海苔 訛 橋 馴染 川上三太郎 前田雀郎 西島〇丸 梶元紋太 藤本福造 木村小太郎、歓迎晚餐会 午後六時から清水町の「北むら」にて、会費 二円 とある。

次号は輝く川柳雑誌百号記念特集号だ。

自選集

小西雄々

鬱ひとつさくらの下に置いてくる
人柄で上手に捌く百の論
屋根裏へ一度隠したコシヒカリ
懐の深さ炎のある芸みかく
心配をさせず翔びたつ鶴を折る

辻白溪子

ランドセルの影が大きい一年生
盗難車だけが見つかり逃げられる
町内の役引受ける暇はない
パチンコへ出掛ける暇はすぐつくる
紙コップ下戸にはジュース酌ぐ車内

野田素身郎

喫茶店集金途中の人もいる
喫茶店隅の二人はどんな仲
店内改装思い出消える喫茶店
妻とは一度も来たことのない喫茶店
喫茶店今夜はこれで別れよう

河内天笑

猫の額へナストマトキュウリの苗
コメ植えておくれと休耕田騒ぐ
サラリーマンも社長もカネに困ってる
あり余る人で悩みも桁違い
あの靴を履いたら帰り遅うなる

水粉千翁

ふるさとがありわたくしのさくら咲く
角砂糖誰に沈まん椿落つ
杯の数は裸になって浴び
裸でごめんなさいませ心付け
衿足の命はつれ毛たわむれる

児島与呂志

喋らない方が得だと昼の酒
冷汗をかいて善人言訳し
おまかせと腹にいちもつ母が立ち
六月の地蔵は風の噂だけ
赤線で抹消されていた戸籍

八木千代

紫陽花の間に匿しておくノート
湖が溢れノートになぐり書き
母の遺したノートを杖に坂を越す
駅の名 傘の名 古いノートは旅の証
昔のノートに焚火を消した痕がある

野村太茂津

引鉄は闇夜に霜の降る如く
てんでん手鞠刺すおばあちゃん
ほんとうに人を憎んだことがない
見出せぬほんとの愛の立地点
居合抜き独り陰湿斬るために

工藤甲吉

殿さまがお辞めになって春の乱
検事にも拷問がある法治国
待つて待つて待つて仕事を手につかず
疎まれているのを知らぬ自画自賛
アイウエオ順で度忘れ思い出し

金井文秋

邪慳には追わない場所にホームレス
投資のはなし断っている余命表
借り物のジョークでひとは笑わない
入歯では噛み潰せない蛸の味
目標がない訳でないマイペース

有働芳仙

逢いにゆく花に迷った花言葉
懐かしい母校のチャイム聞く帰郷
不公平な生命線を皆握り
核という守護符 地獄の切符かも
アイドルの人気へ記者の靴もちび

遠山可住

第二幕 晴耕雨読の章に入る
定年へわたしの趣味を売っておく
型框の隅でどうあがいてみても
落ちこぼれ路傍の石の温かさ
宝くじが当って死んだ仏さま

正本水客

沈丁花庭いっぱいの花をつけ
目も足も不自由 妻の目行きとどく
風呂上がりコーヒー冷えてるちさい幸
風呂わかすタイミング チャンネルをよる
病院のかえりを桜ちりつづく

小林由多香

七転びそんなに転んではおれぬ
幸せの中でホクロをいとおしむ
ふる里の空気はうまいなと思う
不覚にも酒席で本音出てしまい
横にしか歩けぬ蟹が思案する

松川 杜 的

せめて色紙 桜に替えて春を病む
病む友の句がじんわりと胸に来る
小遣いの減らぬ余生がふと淋し
年齢かいなこんなドラマに出る涙
仏様拝む^{てんぐ}掌洗います

大 矢 十 郎

憲法を変えて鉄砲撃ちたがり
PKO緑の貢献だつてある
妹にどこか似てるといふ手口
キスせよへ ほんとにしるハネムーン
鍵っ子のしつけ特価の列にいる

本 田 恵 二 朗

夢一つ捨て夢一つ拾いあげ
運のよい一日だった酒の味
時計をにらみにらみひ孫待っている
抱きついてくれるひ孫のご到着
破かれる覚悟の障子破かせる

恒 松 町 紅

春爛漫 鉄がひとりで弾み出す
ゴム長に拍車がかかるあばら骨
誤字誤用 目に入らない自己過信
人が逝く白木蓮が咲く季節
大学の孫へ後押しする年金

藤 井 明 朗

飽食になれてくらしに不足言う
艶福家一さわぎする癖を持ち
節約の話へ晩酌減らします
政局の数の論理が生きている
みなさまのお蔭四十五の詩の宴^(むらくも45年)

月 原 宵 明

ぼろぼろの旗が再起を待ちわびる
会に名を付けて桜へ揃う顔
一呼吸おいた笑いにある孤独
回り道ばかりで傘寿越していた
三日ほど病んで死んだらなと思ひ

波 多 野 五 楽 庵

鳥一羽河内音頭に浮かれ出す
冬ごもり この寂寥に寝そびれる
海には海の風の掟があるのです
ああわたしも感傷語の羅列
紫陽花を母に見せたい母はなし

藤 村 女

順番につばみが開く立ち葵
花菖蒲 雨は紫色に降る
そばの花 白く揺れると里心
しゃくなげの雫に濡れる寺の道
つらかった過去は語らぬ朱いばら

小出 智子

高すぎることに気付かぬ焼芋屋
言葉にすると老いがいよいよ深くなる
怠慢がうずくまってる壺の闇
かなり頑固なスリッパを揃え
わたくしの古い部分に雨が漏る

黒川 紫香

汗拭いて見た表札の名が違う
後家さんを笑わせながら酌ぐお酒
買い足しても金魚一匹だけ残る
先輩が駅へ新聞買いに来た
米寿だとまわりの人が言うけれど

西田 柳宏子

通り抜け花の笑顔が素晴らしい
万歩計との約束重荷になってくる
デカの靴 時効へ口惜し涙する
小説も四五冊入れた気儘旅
朝令暮改 旗振る人もまた変り

阿 萬 萬 的

沖縄ツア―基地の不満も言うガイド
青い海ここは平和な魚泳ぐ
デザートみなパイナップルというホテル
バスルームに少し戸惑う老夫婦
ひめゆりの塔 黙禱させてからガイド

高 杉 鬼 遊

葉ざくらもやがては忘れられる夏
看取るのも地獄 病むのも地獄なり
ガラス戸の守宮いっぴき愛すべし
お名前が浮んで来ないおつきあい
コメはまずいが五月の風に気がかわる

橘 高 薫 風

鯉のぼり備前美作風播磨
風のまちにて薫風からと書くいのち
霧山へ三角波のほしいまま(市浦鯉御殿 二句)
ラーメンに行者にんにくの名もよろし
算用師峠の杉と待つ木霊(みちのく松陰道)

ふれあいの祭典'94 川柳祭 作品募集規定

作 品 各題1句、合計1人3句

題と選者 1題5人共選

「明るい」助川助六・西村道也・大森一甲

伊佐次無成・春城武庫坊

「海峡」真殿舎句里・濱邊淳・森田栄一

来住タカ子・小笠原双城

「恩」原田北涯・安川一酔・赤井花城

河島いち子・遠山可住

2次選 去来川巨城・黒川紫香・ト部晴美

小松原爽介・藤本静港子

応募料 1000円(定額小為替)

締 切 9月10日(土)

応募先 明石市中崎1-51明石市役所内

ふれあいの祭典実行委員会

川柳太平記 (193)

川柳の群像

川口弘生

東野 大八

「先生の医院へお訪ねした折、卓上に石ころがおりてあり、何気なく見ると「俺に似よ俺に似るなと子进行い」という句が彫つてありましたので、先生これは俳句ですか」とお尋ねすると、「これは麻生路郎という方の有名な川柳です」と答えられたのです。これが私の川柳を始めるきっかけになりました。先生は後進の指導にあたっても、できるだけ句を直さぬように心掛けておられました。と申しますは、作句はその人の感性から生れるものであり、表現の乏しさの問題はさることながら、人それぞれに持ち味があるので、これを下手に直すと技巧だけが先走り、その人の感性が損なわれるだけでなく、その人自身も川柳は技巧本位だとカンちがいのするような心配がわく。だから、よし技巧はまずくと

も、一生懸命にうたい上げた句には、「いのちがある。だからそうした句はおのずと光るものがあるのだ、と仰いましたことを今も肝に銘じています」(吐田公一悼文)

本名、川口弘。大正14年4月9日大阪生れ。岡山医大卒。医学博士。大阪市旭区中宮で耳鼻咽喉科医開業。昭和62年2月14日没。遺句集に『しろきた』(昭和63年2月刊)がある。

「川口先生の御先祖は、大和郡山の藩主だった柳沢吉保の家老で、川口十太夫と申されたそうです。奈良医大で、耳鼻科の研究によつて博士号を取得されました折の医長が内海先生と申されて川柳に深い趣味を持たれておられたことから、先生も川柳への関心をもたれ、昭和33年頃の麻生路郎先生主宰の『川柳

雑誌』に句や文を寄稿されておられました。

その後、旭区で開業医になられた折、北川春巢先生との出会いから、先生肝入りの城北明朗会へ入会。50年暮、春巢先生の御逝去後は、同会を城北川柳会と名称を改められて、ずっと御逝去の62年まで初代会長でがんばられました。

先生ほど全国各地の柳社に投句された方はないと思う。その柳社の傾向をみつけ、城北同人の各自の個性に合わせ、この人はこへという、実に面倒見のよい先生でいられた。

亡くなられてからの奥様のお話によると、夜中にふと目を覚ますと、じつと川柳を考えて黙考されている姿はしばしばだった。昼間は御診察でお忙しいお体なのに、よくもあんなに熱心な句作ができるものかと、いままそのことが頭から離れません。

半分ずつ食べて夫婦の気が足りる 弘生
だんだんに妻の助言に頼る老い 〃
絶景に妻を連れざることを悔い 〃

非常な愛妻家であったことは、この句を見てもわかりましよう」(神夏磯典子悼文)

『川柳塔』の昭和57年9月刊の誌上に、同人特集として『私の古典鑑賞』というアンケートが載っている。その中の弘生の一文。

「なにさもうかくさん事と医者ハ云ひ

(前句・それ／＼なこと)」

岩波版俳風柳多留拾遺講において、吉田精一氏は、かくす事を恋わずらい、妊娠と独断をせず、病気のくり返し、あるいは梅毒と礎解しておられる。女を診たら妊娠を疑えとまで教えられ、また頻度の高いものを先ず疑う医者の性癖から考えると、妊娠のチャンスの有無、有ればその月日を知りたくて、いっしんに問いつめているのであろう。

しかし診てもらっている方は、有れば相手の有る事で、その時の状態も浮かんでこよう。又、これと明かした後のいろいろな影響や、周囲の人の立場も考えねばならず、これこそ、それぞれの事情のある事で、江戸時代の娘さんならずとも、はきはきした返答のし難いケースが多い。職業的な医者の感覚と、患者の情緒の醸し出す不調和を衝くこの句に教わる所は多い」

とある。この人となる席で懇談の折、この句にふれた筆者に、「柳多留などの江戸古典川柳から、医家関連の句と、その運座の記事をぜひ集めたい」ともらした日のことを思いうかべ、秀才タイプはこの人らしい感懐だと感銘させられたことを今も思い起す。

「子煩悩な先生は、三人のお嬢さんのこと

をいつも気にしておられたようで

適齡期たった一人にまだ会えず

嫁き遅れもう釣書も書馴れる

弘生

と詠んでおられました、その三人のお嬢さんも立派にかたづけられ、いいお孫さんもお出来になって、やっとこれからという時に病魔に侵されるところとなつた。奥様想いだった先生のお姿が句の上でも多々見られます」
(吐田公一悼文)

「耳鼻科医の春は鼻血の患者から 弘生

善人とみたか赤ちゃんやと笑み

役立って生きてるよの自負があり

或る日、子供さんがノドに骨をたてて、何軒かのお医者さんに断られて来、先生宅へ電話すると、お休みにもかわらず先生は快く診察所へお出でになり、ねんころな手当をうけたといううれしげな患者のお母さんの話をきくに、いかに先生らしいと思ひました。お父上を早く亡くされ、お齡を召したお母様を本当に大切になさった先生だった(本間満津子悼文)

大阪の阪神百貨店で、全国銘石展の即売会に出かけ、金生山の海百合や、岐阜の菊花石のものを幾つも買うほどの銘石趣味で、路郎の名句をそれらの石に書いたり、彫ったりするのが唯一の道楽であつたらしいことは、

前記のとおりである。

「逃げ出したインコも、尾が短くなれば生きたらるのでしょね。(逃げ出したインコが雀の群れで、尾も短く野生化して生きている話について)

以前、「改良ミカンにとれば受難の記」の句を作つて採つてくれなかつた経験があります。出目金とかランチュウの、人工的金魚を見ていると哀しい気がするのです。嫌です。タネなし西瓜やブドウにも抵抗を感じるので。人間が勝手に、手前の都合でそれぞれの持つて生れた性格なり体質を押しゆがめて、人間の嗜好に合わせるなどは、神の意に叛いた人間の得手勝手というものです。

これを書くだけでも、指が不自由になりました。喘息の発作もある時期には収まってくれるのですが、死んだのかと他病室の患者さんに言われたとき、われながらギョツとなります。死んだとみられてもまだ生きていたい。それが本音です」(筆者あて書簡・絶筆)

お別れの言葉帰真の葬清楚

弘生

今日も生く出口は見ないことにする

〃

▼次号は「富士野鞍馬」

柳籠裏三篇研究 (二十一〜二十二丁)

267 ほととぎす此染物はいつ出来る 五葉

岩田秀行・紀内恒久・西原 亮
瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人
八木敬一・七久保博

鈴木倉之助 故岡田 甫

265 めき糸を出して蜻蛉を母しばかり 仙賀

紀内 今ではこんな姿も見なくなつたが、小
学生の頃には、蜻蛉をつかまえて糸で腹のと
ころをしぼり、遊んだものだった。

西原 賛。めき糸は、しつけ糸の、あとで抜
いてためておいた糸の事であろうか。とすれ
ば、庶民のつましやかな生活詩として鑑賞
できるのだが。

青木 ぬき糸は、古着を解いて抜き取つた糸
である。しつけ糸は細くて弱いようです。針
箱の隅に丸めてある抜き糸の方が蜻蛉をしぼる
には適当だったと思います。

佐藤 礎稿賛。抜き糸については青木説に賛。

岩田 賛。詩のある句だ。

鈴木 賛。佳句。

岡田 同。

266 福右衛門なぞと市兵衛名をかへる 狸声

紀内 「市兵衛」は浅草歳の市の客または商
人の擬人名。ここでは客。

この歳の市で、大黒を盗むと、一年中の福
を得るといわれ、大黒盗みの句は多い。

句の福右衛門は「福を得た者」の擬人名で
市兵衛から福右衛門と名を変へることによつ
て大黒盗みを暗示している。

市兵衛といふ客初会きりて来す 富二 38

はくれたらゑの木の下と市兵衛い、

二〇 34

岩田 賛。つまらぬ句である。

鈴木・岡田 賛。

次第であらう。

青木 拾ではなくて単物の染直しの出来上が
るのは何日かと聞いているのでしよう。

八木 賛。ほととぎすが鳴くというのに「此
染物はいつ出来る」というのだから、私も夏
物の催促をしている所だと考えていました。

鈴木 賛。

そめのや月に十五度せつかれる

天三梅 1

こんやへハ一日置に同じ顔

明二義 4

岡田 「山ほととぎす初鰯」の季節は旧四月
(現在の五月)、これはホトトギスの啼き声

が聞かれ始めるころで、すぐ入梅。だから染
物がいよいよ遅れることを考慮に入れる必要
があります。

268 名高さは下駄とはつ、け柱也 雅情

西原 吉原豪遊伝中の伊達綱宗と紀伊国屋文左衛門。綱宗の伽羅の下駄と、はつつけ柱（礎柱の促音便）に身をしばり、嵐の中を紀州から江戸へみかん船をのりきった紀文は、共に著名である。

笠と下駄及門止名を残し 天一信 1

下駄笠につぎ材木きつこと 二三 38

大名が三人そして材木屋 安九礼 2

青木 「はつ、け柱」文左衛門は非。小田原役後、伊達政宗は秀吉に呼び出されたが、その時、金貼りの礎柱を作り、これを掲げて行列に先立たせ京都に入る。秀吉はこれを詰問したが、政宗は抗弁して屈伏しなかった。秀吉は、彼の胆力を愛で、それ以上の詰問をしなかったという。この史実を詠んだのが主題句です。

伊達な事はつつけ柱金でだミ 傍三 33

佐藤 青木さん、お見事です。

鈴木 青木氏ご明解。

岡田 同。

269 けんくわしたやつ初午に風を上 五松

西原 明和九年に、

初午にたこを上げるハすねたやつ 七 13

それから十五年ほど経て、主題句があらわれた。前者は「初午のたこ」に、後者は「けんかした子ども」に焦点があるが、先行句のやきなおしであらうし、句の体もむしろ不良である。

稲荷で太鼓もたたかず、たこをあげているのはけんかでもしたのであらうと。

八木 賛。本篇3オ二に、

初午にやうく風が二ツ三ツ

この句「やきなおし説」ではどう考えたらいですか。

鈴木 賛。八木さんの例句は、風をあげる時期をいった句、江戸では正月が盛んで、初午のころにはやと二つ三つだというのでしよう。

岡田 諸説のとおり。

270 百姓とかけとり及ヒ座当なり 洗路

西原 幕府が出した、武士の徳政令であらうか。これによって、一番損害を受けたのは、百姓と掛取り（商人）と貸金座当であらうから。それとも「なりたくないものはナニ？」に付けられた答でもあるか。

瀬川 「なりたくないもの」づくしか。

佐藤 御不勝手手の門前。

門前へみの市のたつ御不勝手 三八 16

御玄関に目あきのふらぬ御不勝手

安八松 5

闇夜に灯火やたら来ル御不如意 竜三 9

岩田 自説なし。浜田義一郎『江戸川柳辞典』には次の如く解する。「掛取も座頭も金を返せときびしく責め立てるもので、それと百姓と並列するのは異様だが、作られたのが天明六（一七八六）年五月で、ちようど各地で百姓一揆が起り、お膝元の関東でも方々でむしろ旗の騒ぎが頻発した時だから、幕府もこれに手こずっているのを婉曲によんだ時事吟と思われる」

鈴木 佐藤兄ご明解。なぜ百姓を出したかといえは、台所不如意には勝たれず、領地の百姓に重税をかけたため、百姓共が糞笠をきて門前に嘆願に押し寄せるのである。

内ハ火が降るに門前糞と笠 五〇 19

門前に案山子のならぶ御不勝手 五四 27

岡田 旗本の上のほうには所領が与えられていた。天明のキシンつづきで、領地の百姓が年貢の嘆願にくる。幕府はもちろん、当時の武家は貧困だったのである。所領を与えられている旗本は五千石以上ぐらいだから、外出には槍三本、供何人と決められていて、それらを食べさせて行かねばならぬ。

水煙抄

黒川紫香選

鳥取県 土橋睦子

添い遂げて見せると言ってさようなら
頑固にも笑ってしまふ母の顔
フイーリングの合った雌蕊に蜂が寄る
冗談がほんとうだからおもしろい
うしろから目かくしされた手を握む

静岡市 沢田きん

古日記こんな若さがあつたのか
愛犬が拗ねて動かぬ曲り角
気晴らしに彼とダンスを踊ろうか
追伸へお会いたいと書いてある
四季の庭 花はわたしの味方なり

宝塚市 永田 暁風

心不全ばかりが春の死亡欄
井戸覗く先祖の顔と会うために
ファースナー背開きにしてどうしよう
花が散る風がびたりと死ぬ中で
胸のホクロをまだ覚えてる老いである

摂津市 木下道子

八十の母と本気でけんかする
音立てて壊れるほどは積まぬ夢
ハッピーエンド望まぬ娘だから困る
あしたには過去となる日を大切に
車の知識だけは豊富などら息子

池田市 金崎峰子

ほんのりと葉の香うれいさくら餅
口下手が喋った後の自己嫌悪
ライバルとこちらは考えていない
電話から聞える声の若いこと
一杯のコーヒーで山ほどある話

吹田市 古川 喜美子

お気持はわかりますがとあしらわれ
かすみ草 分相応に競い咲く
善人の生涯煙のようだった
乾杯は釣れた魚が焼けてから
叶わない夢だが暫く抱いている

芦別市 斎藤 房子

寝返ったおとこに重い失語症
花ぐもり螢一途に身を焦がす
雪消えるその日を夫と賭けている
いちにちを刻むいのちのリズミカル
鯉ぐもり活気の浜よいまいずこ

熊本県 大川 幸子

水色のやさしい風を見失う
狙った餌外した事がない意欲
枯らさない貴方がくれた花言葉
母の道いつか歩いている私
医者変えてどうでも病名くくりつけ

熊本市 宇野 照代

唇がうれしいヒミツをつい洩らす
人の目につくところから草むしり
花びらの絨毯そろりそろり踏む
ウロウロとするから毛虫嫌われる
摺り大根だんだん辛くなって夏

熊本県 岩切 康子

草引けば土たっぷりとつかんで来
消しゴムで消しても白紙にはならぬ
ブレンド米 気付かれぬまま食事終え
盛皿の客待つところ艶やかに
甥と姪はるばると来てお手伝い

富山県 高島 五月

親友がまたひとり病む雪解風
芋がゆに活躍しました自在鉤
理想論がとっても好きな元校長
肥後守を研いでる老夫のまじめ顔
窓際に春一番が吹いて春

富山市 島 ひかる

カーテンを小さく揺らす風が好き
頂いた土鈴をそつと振ってみる
叱られたのか涙の跡がある寝顔
人間に生まれて弱さ知らされる
亡父の絵のまつり太鼓がまだ止まぬ

広島市 流 奈美子

波きらきら今青年の船が出る
すぐ側に凭れる大樹ある安堵
澄み切った音色はきつと亡母の鈴
泣き砂の嘆きを潮が抱いてゆく
初夏の山踏んで丸ごと解き放つ

尼崎市 児玉 歌子

雑音の中で度胸を据えている
気の利いた噂を配る春の風
急浮上隅に置けない女になる
ライバルを唸らせている深い読み
絵まんだら恋に溺れたことがある

尼崎市 田 辺 鹿 太

陰膳へせめて小出しのコシヒカリ

春風に脱いだり着たりおんな偏

窓際の靴も磨いて送り出す

生きざまを喜劇タツチにする短詩

あきらめと未練が交叉する鉄路

名古屋市 藤 井 高 子

衿足に隙は見せない百合の花

六月の雨しとしと聞き上手

一口乗った話にふりまわされている

猫の尾の世辞も暮しの彩のうち

ゆとりある笑いで白旗振っている

今治市 野 村 清 美

春がすみ娘のときめきを包み込む

残り火を消して遠おい旅に出る

シャボン玉空を慕うて映す虹

プランコに揺られて思慕を振り放す

組板の窪みが過去を知っている

旭川市 朝 倉 大 柏

歯ごたえのある奴だから叩いとく

趣味で名を知られ会社は課長補佐

何事もない日も日記ふくらます

起き上がるチャンス寝たまま考える

励ましの言葉をくれただけの人

田辺市 大 峠 可 動

人生譜 風の一句を挽歌とす

吹く笛はふるさとばかり花が咲く

姉妹集合 男に鞭を打ちたがる

右へ右へ時計の意地っ張り

人は武士 殿様総理なぜ逃げた

豊中市 石 川 勝

水汲みに行つて帰つてこぬドラマ

めぐり合い目刺しになつてた鰯

忌が明けて心開いた未亡人

青年に席譲られたむずがゆさ

美しい誤字だちよいと消しゴムを

藤井寺市 高 田 美代子

捨てた鉢から芽が出た春のミステリー

眼鏡拭くもつと綺麗に見たいから

芸の無い犬でいつでも空腹で

親切に白髪を抜いて叱られる

バックオーライ本当に陽が長くなり

静岡市 小 木 久 子

弁解がなお傷口を深くする

指切りの軽い約束ばかりする

大かたは女の自立離婚劇

今日あたり心待ちしている手紙

春場所のいつもの席に同じ顔

鳥取県 岩崎 みさ江

春光を貰うガラスの窓を拭く

偏食に添えるサラダのサクランボ

どの家も平和でしようか春灯

蛇行することも覚えた登り坂

富山市 鍋谷 富士子

根の深い訳があるから距離をおく

спанコール散りばめ女派手を着る

早耳がやんわり探り入れに来る

聞いて知る友にもあつた辛い過去

香川県 萬沢 翠

泣き疲れた小面がある春の部屋

死ぬほど好きで時々アカンペーをする

足どりはシヨパンもうすぐ逢えるから

春愁や むらさき色の日本海

兵庫県 森脇 和子

春の香が一足早く蛇口から

控え目な仕草育ちをほめられる

名曲を流して心洗われる

聞き上手豊かな話題持っている

尼崎市 森安 夢之助

ようやくに肩書きもらい都落ち

割り勘の立て替え消えてない手帳

僕の癖知りつくしてゐる古時計

駅弁の文化に土地の貌がある

尼崎市 的場 十四郎

ボロボロの手帳ときどき知恵を出す

田高に慌てもしないベレー帽

ポケットも長い不況ではころびる

幸せのくらし干してる団地窓

尼崎市 尾宮 弘治

軍帽の亡夫は老いず五十年

突然の客でも妻は慌てない

郵便の値上げ叱りつ河豚を食う

座右銘に師の句無断で借りている

尼崎市 野瀬 昌子

三月の陽気新車に買い替える

ワンカップ一ヶ貰うて花の下

白粥に菜の花漬の朝の膳

戦記読む亡父は若くて勇ましい

尼崎市 長浜 澄子

生かされてジグソーパズル埋めている

バラの痛さ知っているから口ごもる

浅はかな嘘 深爪をしてみよう

目標のために充電しておこう

久留米市 鶴久 百万両

花の絵に一途な思慕を打ちあける

スタートの乱れを鬼に喰われる

師匠眠る墓前で舞を披露する

花に浮かれる魔女を背かなかなど撃てぬ

西宮市 山本義子

緊張のいちにち足袋をぬぎすてゐる
現役と久しぶりに会うまぶしいな
植木市のおやじ講釈つけて売る
引き潮で小さい貝は空を知る

西宮市 菊池トミエ

貝割菜おんば日傘で育てられ
向い風胸の鼓動を呼び起こす
コーヒーの湯気しみじみと日曜日
棘のあるコートを脱いで蝶になる

西宮市 牧淵富喜子

向い風プラス志向の歌が出る
予期しないお土産だったさくら餅
鶏吞みして箸を揃える四月馬鹿
春愁に軽いレモンの浮くカップ

西宮市 古谷ひろ子

雨雲が道草の子を走らせる
サクラサイタな隣のピアノ弾んでる
ほころびを繕いあつて添いとげる
子育てを終った母の英語熱

和歌山市 古久保和子

時々居留守を使いたいお客
鬼の絵を恐い顔して描いている
一枚の切手で遠い旅に出す
行列をしても買いたい鯛焼き屋

高槻市 守先伸子

一等のテープを切る夢抱いている
NHKニュース読むアナの無表情
まだわたし燃えていますと落椿
涙腺のゆるみで老いを受け容れる

今治市 渡辺南奉

原稿で飯が食えないペンネーム
新聞を盾に小言を聞き流す
見渡せば幸せそうな顔ばかり
ゴキブリがもう動き出す春うらら

宿毛市 岡村千鳥

四面楚歌 泥舟だったと今気づく
あじさい街道 花とおしやべりして歩く
人生の節目小さなフルムーン
ペダル踏む五月の風が背に躍る

伊丹市 樫谷郁子

寝て居ても冬は静かに遠ざかる
一本の水仙吾が家に春を呼ぶ
合格を電子手紙で知らされる
祖母なりに受検に参加した誇り

河内長野市 大西文次

妻パーマかけて来たのに気付かない
賞め過ぎて三日続いた鍋料理
切り札を持っているから慌てない
お目当は門前町の柏餅

岡山市 中嶋 千恵子

今治市 越智 青園

一番をゆずり次点にいるゆとり
語り部も風化してゆくちぎれ雲
占いに踊っているのは妻の方
フルムーン映画のようにゆかぬ旅

松江市 松浦 登志子

さまぐれな風にうわさが飛んでいる
歴訪におしんのビデオ持参する
笑顔です私の魅力母ゆずり
気前よく魅力ふりまき底をつく

和歌山市 森口 恵子

周波数一致できずに逃げられる
生意気な芽が背のびして紅付ける
きつちりと靴をそろえて立ち止まる
ふり向けばさみしさつのから駆ける

香川県 辻上 よしみ

波をよけ逃げ込むとは母の胸
波立った過去は振りかえらずにゆく
防波堤になってくれた母は亡く
諦めが早いと言うが無責任

香川県 堤 くに子

寄付をするつもりはないが宝くじ
お見合の仲人だけが落ち着かぬ
温もりも逃げ道もある母の膝
お名前もお年もママが先答え

しだれ桜カーテンにして咲きほこる
年金で夫婦の歩幅やっとう合う
仲良しがたむろしている終着駅
麦作りやめて雲雀が揚がらない

今治市 塩路 よしみ

言い訳はよそうきれいな花が咲いている
何事もなかったような花の雨
故里が近くになると妻多弁
身の程を知って流れる川の淵

寝屋川市 後藤 黎之助

パンうどん 補正予算を組んでみる
憂さばらしまな板の音高くなり
電話ない手紙もこぬが桜咲く
新聞のチラシ不況と喧嘩する

寝屋川市 宮崎 菜月

芽柳がすだれとなって進む恋
同情の薬じわりときいてくる
夕方のへとへと靴で一寺訪う
未完の絵埋めゆく辞書が手放せぬ

寝屋川市 富山 ルイ子

とつおいつ考えている午前二時
神も仏も居ないと思う日が終る
花吹雪愛の行方を見してしまう
おぼつかぬ足元そつと手を添える

大阪市 江坂修史

リハビリの成果歩幅が早くなる
癌と言う文字が夜をねむらせぬ
亡母の待つ浄土へ友の急ぎ足（故史好さん）
病む身には逢いたい人のみな遠く

熊本市 北川一進

ジーパンのうしろ姿にある若さ
満開の桜一人で取るカメラ
本当の気持が見えるレジ係
分の悪い時は口調の荒い癖

島根県 槻谷仲子

七十路惚けられませぬ核家族
二人いて愚痴を丸める朝のお茶
毎朝のお経スラスラ病んでから
思慮一つかけて気まずい仲となり

西宮市 岡本道子

容赦ないお師匠さんの花鉢
十階に暮して天へ地へ遠い
築くため壊す男のシヨベルカー
一瞬の風へたんぽぽ孤に還る

和歌山市 森茜

ふる里に泊れと言うてくれる友
考えて黙して通話料嵩む

嘘ついてないからご飯よく食べる
鼻の医者 鼻かみながらカルテ書く

松山市 丹下美津子

山ふとところに育って山の無い不安
もう二度とくることは無いいろは坂
思ったより意外小さな眠り猫
日光の歴史を語る杉並木

兵庫県 酒井靖子

満開の桜今年も出合う幸
迷惑をかけぬつもりを鞭を打つ
松枯れて山は貧しくなるばかり
好きと書く紙が白くて気恥ずかし

島根県 武島ちよえ

新車です撫でてみたりさすったり
ああ夫婦風除けになり杖になり
叱られてもなお叱られても母の膝
呑みこんだ言葉に大きくむせ返り

鳥取県 橋谷静江

母さんの笑顔見たくて里へ行く
明日逢う約束をして受話器置く
うちよりも隣の屋根に日が当る
平和です我が家の屋根で遊ぶ鳩

鳥取県 奥谷彩子

筍飯炊いて仏と領けて食う
朝のジョギング捨て犬トコトコついて来る
絵具皿 明日を咲かせる夢を溶く
育児ノート少しずつ母らしくなる

枚方市 濱田良知

旅に出る服決めかねる空模様

定年の首売り歩く春嵐

店じまいセール何度やったら店たたむ

制服を着て人形の顔になる

枚方市 八田敏

会いたいと手紙よこして友が逝く

裏山の奥から宅地押し寄せる

孫が呼ぶ新幹線で会いにゆく

引出しのへそくりとうにばれていた

枚方市 森本節子

仏壇の鉦の音澄んで耳に入る(退院して)

この部屋に落着きましようお写真と(転宅して)

犬散歩天王山は川向う

湖に沿い行けどもつづく海津の桜(海津大崎にて)

貝塚市 池田寿美子

踏切がまた邪魔をする市場籠

ボタン一つはずして友と許し合う

味付に料理の良さと人間と

死ぬ前に畳を替えることにする

福岡市 井崎ミサ子

話題ならたんとあるのに出て来ない

良い知恵が終ったあとで湧いて来た

天気予報はずれてほしい日は当る

いい顔を探して今日も散歩する

米子市 鹿島 蘭

深呼吸するには味のない空気

赤を着てごらんない良い気分

日記帳だんだん愚痴が多くなり

米子市 足立 由美子

奥深い場所に宝がおいである

安堵した日から眠りが深くなる

すり切れたノートに知恵が詰めてある

西宮市 亀岡 哲子

芝植えて裸足で子等と水撒こう

どの子にも驚いてやる四月馬鹿

子沢山の母の日記は分厚くて

吹田市 馬 光 子

フト忘れフト思い出す五十路坂

貴重品用心しすぎ行方不明

言葉数少ない方が聞く説教

香川県 たかはし たみ

美人画にメガネをかけて話する

飛んできた火種つまんで消しちゃった

妻代理「チン」と返事のするレンジ

尼崎市 吉 永 伊三郎

頃は良し立場を明かす関が原

行平でことごと煮てるブレンド米

里帰り一人で戻る娘と荷物

奥さんに相談しました辞めました
尼崎市 湊 修 水

右左陣笠二輪車三輪車
後任にシビアな試練待っている

尼崎市 中 澤 向 西

故里が遠くになった足の骨
突然に嘘を承知の褒め言葉
なじみ客別に一品添えておく

尼崎市 軸 丸 勝 已

くのに墓地見晴らしもよく値も手頃
ふる里の道 信号もなくいつも青
待合室どの顔も皆哲学者

兵庫県 円 増 純 子

気安さは弱点みんなさげ出し
ライバルの弱点知っているゆとり
少年の送るサインが読みとれず

佐賀県 古 川 かずのり

奔放に生き残り時間気にとめぬ
合格の裏に思案の仕度金
空港に着いて茶漬が欲しくなる

熊本市 遠 山 夏 生

鯉幟 汚染の空と思われぬ
でき過ぎて女であるを惜しまれる
バスの来る方向ばかり見ては待つ

宇部市 中 村 三 良

スケジュール飛び入りばかり花の雨
今日のことで精一杯で疲れ切り
皿の絵に負けないようないい料理

柏 市 上 鈴 木 春 枝

妻の愚痴どこで相槌打ったやら
大切なお話ですと気を持たせ
お世辞から始まり終わる立ち話

鳴門市 八 木 芳 水

矢弾使い果たし人間らしくなる
下駄箱にまだ亡父がすむやせた下駄
都会にもなれて薄情にもなれる

静岡市 浅 子 まつゑ

ああ言えばこう言う子には疲れ果て
約束を思い出してる風呂の中
飽食の喉になじまぬ輸入米

枚方市 前 た も つ

棟上げをそつと覗いた雀二羽
初めての出会った海は亡母の膝
逆境でも男売ってる時の人

高槻市 芦 田 静 江

かけ違いボタンが叫ぶ春の服
地についた足で八千代の鶴が翔ぶ
藤井竹外 彼岸の墓に欲を盛る

八尾市 村上 ミツ子
くすり売り郷里の噂も置いてゆく

駅弁を百貨店から買ってくる
肩の凝り除いてくれたのはあなた

東京都 清原 悦子

お茶の間で語る私は母の顔
スケジュール通りにいかぬ家のこと
天気図を変えたい明日の旅仕度

静岡県 永倉 柳華

階段で手を貸す愛の車椅子
謎はまだ解けずお酒が冷えてくる
校庭の日傘まぶしい参観日

尼崎市 河津 正治

補聴器で風の便りを待ってます
倅せなムードに包むナレーション
都合にて符丁で済ます日記帳

尼崎市 向井 末貞一

神様も手違いのある縁結び
結局は頼れる者は家の嫁
だんだんと仕草の似て来る孫がいて

和歌山県 藤井 春子

職退いてきままと自由同居する
反省をしてから茶の間のみ出す
なんとなく弾み過ぎてる日の不安

和歌山県 和田 美寿子
物売りに断り上手も芸の内

老いの愚痴犬にも半分わけてやり
花のない街に住んで花粉症

十和田市 阿部 喜久江

母の顔見てホッとした里帰り
正座した晴着の足がしびれ出し
さりげない仕草人柄しのばせる

今治市 白石 サグ子

散り際も見てよと花びらはでに舞う
節くれた指ねぎらうてリング買う
ふと出来た暇にとまどう午後の雨

岡山県 土居 ひでの

スマイルを私の地図にして生きる
ネクタイの結びこぶにもある決意
インターホーンで開いたドアの命とり

鹿児島県 大山 舞鳥影

子と共に成長するかパパとママ
力より技に酔いたい相撲ファン
迷い子に叱られているパパとママ

今治市 渡邊 伊津志

大瑠璃に声かけている赤い花(個展)
澄み切った海が教える季節感
喋らないのに噂だけ波に乗る

熊本県 高野 宵草

歯みがけば今朝も元気だ水美味い

価値観の断層に落つ隠居部屋

新潟県 高野 不二

さりげない世辞で登った出世坂

一人歩く方が恥ずかし春の宵

猫の餌だけ買いに行く粗大ごみ

和歌山県 山口 三千子

年金は二た月 孫は毎日来

究極の選択をした反省記

つい孫と同じよな兎に視線向く

大宮市 新井 圭二

日が沈む子の住む国は夜が明ける(イギリス時差九時間)

予備校の有名講師は芸能人

子の為に清水舞台幾度とぶ

兵庫県 倉垣 恵美

満開の笑顔が並ぶ入学式

カラッと脱水しても冷戦まだつづき

外された梯子に何故か感謝する

神戸市 向井 泰子

後悔はしないと決めた紙吹雪

出来悪い子でも家では宝もの

明石大橋を夢見た亡父を恋う

美しい港の夜景消灯時

高松市 松本 翠

ルームライトにすると出てくる顔がある

あなたにはわかってほしい腹話術

あの人好きなスパイス少し入れ

大阪府 勢理客 トミ子

木の椅子の温もり無人駅の初夏

雑草に侵入されたバリケード

傘返す楽しみがあり菜種梅雨

香川県 堀田 茂穂

沈黙は金とわかって老いはじめ

パチンコから吹かれたように父帰る

ジャンケンをいつもげんこの負け嫌い

京都府 小林 英子

春風に入学式のはずむ文字

桜咲く寺に筆太喪のしるべ

涙つば溢れピエロが笑えない

沖縄県 杉谷 一栄

情熱を自分でアホやなと思う

独りでもうしろめたさのある昼寝

やせたからはけるスカートまだあった

寝屋川市 北岡 波留吉

村起しに一役買うと鯉のぼり

いきいきと一人旅する恐妻家

母を手本に激しい恋をして見たい

寢屋川市 土井英明

戻された税に足出る電車賃

問題の女史とは見えぬ市場籠

それぞれのリズムが狂う妻の風邪

寢屋川市 井上すみれ

里帰り栄枯盛衰の話から

犬は血統書つきと言うお引越し

一斉に桜が咲いて家にいる

寢屋川市 籠島恵子

タンポポが桜の下でおもうこと

同じ齢と思う桜が咲いている

見通しがついた内緒で高枕

東京都 小寺九

花吹雪終えて大学元どおり

春雨に相合傘がじやれている

栄転という都合良い追っ払い

岡山県 大石あすなろ

さまようてやっぱり帰る母の膝

帰る子を待って夜寒の灯をともし

鈍感を笑い合ってる老いふたり

綾部市 藤田芳郎

遅刻しておいて質問矢継ぎ早

一行詩 四季には四季の暮らし向き

時々は叩いて錆を落とし合う

奈良県 飯田昇

駅裏の屋台天下を丸呑みに

わだかまり沖のかもめに問うてみる

うすうすは知ってて妻の軽い咳

豊中市 田中道胤

要らぬ物捨てたらすっきり住めるのに

週休二日妻がバイトに逃げてゆく

古書店で思いもかけず出会う人

和歌山市 木村親路

反省を知らぬ男の喉仏

助手席の母が百キロ出せと言う

追い越したとたんにねずみとりに会い

広島県 森川抜智

ブルドッグ寿司屋のおやじによく似るとる

路郎師夫妻の写真と再会八十二歳

もみじ茶屋犬は私と顔なじみ

広島市 中村要

旗色が悪くなったらはぐらかす

影法師どうしが先に惚れた仲

禁煙をやめると湧いてくる元氣

広島市 元林光子

珍現象都会の母から米届く

ハワイよりエジプトが良いまだ達者

夢馳せる月の砂漠にピラミッド

岡山県 伏見すみれ
スニーカー僕には皮靴などいらぬ
計が続く三寒四温に耐えかねて

三面鏡の私どれも団子鼻

堺市 吉本菁風

職場でも家でも座る処がなし
大根が上に伸びてる耕運機
充電をせず窓際に追いやられ

岡山県 国米きくゑ

小走りに何時も動いた亡母の下駄
帯を解く今日一日の満足感
入選を祈って綴る十七字

岡南市 坂根流水

起訴されて毎日テレビにさらされる
年寄りのたわごと案外役に立ち
花に酔い木の芽の匂う闇に佇つ

米子市 服部朗子

ノート一冊 生き抜いて来た音がする
満たされた老母の笑顔抱いている
待ちうけし迎えてくれる里があり

羽曳野市 酒井一壺

ゆっくりと入っておれぬ壺の蛸
丁寧に使いつけた夫婦碗
その席に座る器でお人好し

大阪市 平井露芳
清水の舞台時々降りて見る
梅の木でないけど鶯鳴きに来る

老人会 私会長してまんねん

藤井寺市 楠昭子

医者よりも知識豊富な患者さん
また元の無邪気になって紙おむつ
だるまの目入れるにやはり金がいる

高槻市 執行稲子

“うるさい”の一語に尽きる親父どの
究極の空色が欲し春の画布
古里は星が降って満天の空

愛媛県 久保良子

人畜無害の夫でなぜかもの足りず
あっち向いてホイ鉄砲百合はよく拗ねる
そうですかそうでしたかと聞き上手

泉佐野市 稲葉洋

思い出の人ばかり増え備忘録
結局はお袋の味妻の味
年金の範囲で老いの旅日記

千葉県 大川一雄

老画家の買物カゴに乗せた犬
長電話まあ同じこと繰り返し
電柱に懸賞金出す小犬

鳥取県 権代康女

苦勞した人の言葉に角がない

円い目を描けばダルマが起き上がり

好い空氣吸っているから正直だ

兵庫県 西井つや子

健康で今年も花見が出来ました

あの人もこの人もいてまあいい輪

雨の日は雨の詩ありペンを持つ

岡山県 富坂志重

一坪の菜園に花の種ばかりまく

毒舌もお世辞も同じ耳で聞く

もう暮れるこんな楽しい今日なのに

静岡市 松下正枝

故郷はやはりいいなと駅に立つ

かあさんの留守はあかりが消えたよう

晩年の生き様を記す日記帳

姫路市 服部一典

人事異動 社宅の風から知らされる

雛祭り一番喜ぶお父さん

君だけが頼りと上司縄のれん

福岡県 本田忠男

独りにはひとりに囁く風がある

長旅の末に父母おわす里

夜の嵐ちった桜はぐちらない

流山市 神田治

ミス続くポニーテールが謝らぬ

マスコミの右向け右に慣らされる

関西の笑いが江戸に根を伸ばす

富田林市 欄智久

三寒四温その三寒に着ぶくれる

物怖じのせぬ柵の葉の面構え

沢庵の齒切れ良い音元氣です

兵庫県 北川とみ子

浄土まで主役をかつぐ縄をなう

椿ボトリとでもかなしい音がする

ふり向くと数珠くる亡母が背なになる

鳥取市 植田一京

飲み込んだ言葉を隠すお茶をのむ

炎え尽きて日記白紙の日がつづく

思い出を絵本のように出して見る

相生市 中塚礎石

年金の足らずへ妻はラッパ吹く

一人して身の上話の腹話術

案山子には文句が言えぬ米不作

八戸市 島田昭治

至らなさにこのごろ反省ばかりして

なすべきをせずに神だけ頼んでる

肩の荷がいつも降りないお人好し

青森県 諏訪明雄

義理欠いて人情の置場定まらず
損得を勘定に入れてボランティア
似た者が趣味を肴にまず一献

泉佐野市 大工静子

色別のバインダー被り連絡橋（関西空港）
歓声に応え寛平さん走る（泉州マラソン）
おでんぐつつ嫁ヨガに行く日なり

松江市 浦辺静江

今朝もまたパンを焼いてるダイエツト
幼い頃から貧乏は慣れっこで
クラス会はいしゃぐ話に年はなし

静岡市 大村正雄

鼻薬よく効き過ぎて鉄の窓
金持ちの儲かる仕掛け出来ている
先約があるのと少し気を揉ませ

鳥取県 小西五十鈴

心から本音の言える墓参する
おんな対おとこ火柱まで立てる
愛情のもつれに惰眠しておれず

松江市 安食友子

いたいけで箸が戸惑う貝割菜
相性もいい加減だね共白髪
吉と凶シューゲームさながらに

高槻市 庄野澄子

髪は染め皺は塗りこめ旅に出る
やさしさに出合えた旅に心足り
今日こそは言うぞと口紅塗りなおし

大阪市 三浦千津子

見えない鎖に繋がれほととかれ
朝夕の母の祈りは真剣だ
用心を重ねて置いてきばり食う

島根県 森茂美

畑を打つ人に道問う高級車
遭難の山に残雪消えやらす
就職船見送る母の島動く

米子市 小塩智加恵

山ひとつ越えたら空は日本晴れ
弱音吐く男はママの横に席
追う影に赤信号が割り込んだ

鳥取県 山内芳江

姑風吹いて波風少し立ち
ほら吹きデマを信じている夫婦
不景気に左右されない二度の職

静岡市 柳沢たま

花屋から好みの花を買ってくる
渋滞へ駅で待ってる娘を思う
満ち足りたその日 日記を埋めつくす

静岡市 増田扶美

落椿哀しきまでに色が冴え
隣にも分けて弾んだ旅土産

花びらのひねもすつづく浜の川

和泉市 加山よしお

定年で家族の距離をとり戻す

遺影まで勝ち気なままでいる社長

偲び草終えておんなは艶めきぬ

岡山県 福原悦子

気の強い顔に小さな泣きボクロ

細身だが大黒柱は黒光

雑魚でよし男のロマン生きている

唐津市 山門幸夫

春雨に傘は吹雪の花絢

二代目に梯子かけたり外したり

親離れた娘に送るこしひかり

唐津市 山門タミ

笹竹に絡んで生きる豆のつる

しみじみと単身赴任ばやく夫

海山はいいなビタミン満ち溢れ

島根県 松本聖子

胡蝶蘭気どって机の上に咲く

内地米の五キロぐらいに頭下げ

風よけになつてやる気で強く生き

鳥取市 中澤正恵

やがて来るここに幸あり涙あり

空港で広げて食べるにぎりめし

満開の桜に染まる笑顔出す

池田市 木村一笛

居酒屋はガンバと虎で盛り上がる

すったもんだすればするほど切羽詰まる

焼け落ちた戦跡に想い睨閉じ

大和郡山市 榊原雪心

体調は心配ないと酒がいう

母と娘の絆に父は入れない

肩書の陰に隠した気の弱さ

橿原市 西本保夫

先着順何名様を信用す

雑音の中でストーリー組み立てる

飽き性が小さい時からおてんばで

和歌山市 榎原公子

女もう女になった日を忘れ

一杯の美酒にはしゃいだのも私

末席でハンドル握る母の椅子

米子市 村田俊明

花でいる望みは捨てぬ薄化粧

汗をかき終えてみんな握手する

小商い日がな一日道聞かれ

堺市 桜井 莊次

頼杖をついた思案が舟を漕ぐ
母と娘がストレス流し合う電話

大阪市 中橋 恵美子

彼岸バス老人証で皆下りる

やっかいになります米を持つて来た

海南市 谷口 義男

無い袖を振れぬ相談持ち掛ける

忘却という逃げ道を言い立てる

大阪市 尾崎 黄紅

南無阿弥陀微罪ひとつを消しておく

完全看護いのち委せる外になし

高槻市 江原 秀夫

佳くて飲み悪くても飲む春おぼろ

決算を赤札でさばく火の車

唐津市 市丸 晴子

タイ米はあちらの大事な国産米

介錯を頼んだ夫ボケたふり

島根県 福岡 博利

どさくさにハガキ切手が上がったた

還暦に赤いマフラー買ってやり

大阪市 川原 章久

あなた色に染めた私をどうするの

年ですなあ耳学問に目勉強

姫路市 福島 姫女

仕事終えナース着替える派手な服

城の径どの道行くも臙月

田川市 松元 寿永

只酒で飲む盃に罌がある

旅疲れ癒やす茶の間の灯が温い

和歌山市 山根 恵美

又すわり直して聞いた愚痴いくつ

落ちこみを癒してくれる母の膝

寝屋川市 坂上 高栄

普通食皆平げた退院日

いい仲間三日会わねば久し振り

和歌山県 中後 清史

棘のあることに気付かずよく喋り

膝枕なんて昔をなつかしむ

兵庫県 玉田 三重

嫁もらい倅が投げる変化球

はいはいと素直になった二度の職

大阪市 中井 正秀

雨降りに洗濯してる独り者

平凡で満足しない親の見栄

姫路市 小井 里兆

春の気流どんどん昇る夢乗せて

春一番が私を巻いて駆ける

大阪市 星野四郎
町並みを目に焼き付けて老婆去る
甲斐性が無くて病氣はしておれぬ

箕面市 木村天弘

時代劇いつものロケに大覚寺
京料理添えて記念の寺社巡り

富田林市 山原昭水

ケン玉の名人もいる老人会

テレビドラマわが家に似てる笑えない

鳥取市 中西智恵子

同じ物食べても女長く生き

花冷えに炬達で夫と温いお茶

唐津市 岩崎實

彌宜の庭 白梅 白椿咲きつづけ

八分咲き公園整備も八分どこ

今治市 村上久美子

逆風に会うとフアイトが湧いてくる

来て食べて残りの米も持って去に

米子市 木村春枝

はぐれ鳥スベアキーが見つからぬ

半平太ぬれては行けぬ酸性雨

唐津市 野田旭恒

充電が過ぎて眠れぬ蛙の子

北帰行遅らし鶴は傷保養

島根県 岩田三和
峠茶屋へもと村民がたまり場に
めだか掬い岸から母の声で逃げ

八尾市 村上剛治

眉唾の話なかなか面白い
輪の中で心充電してもらう

和歌山県 村中悦男

墓参する丘一面に桜散る

畦道を兎等背の順に登校す

松江市 福岡芳枝

泣き止んで一つ大きくなった孫

高速路わたしに縁のない話

熊本県 増田一乗

手を振れば支持者が居たと頭下げ

通院の日課となつて早や十月

高槻市 乙倉武史

階段へ我が体力を試される

嬰鑠として八十の背の骨

河内長野市 水谷正子

笑いつつ言葉の刃物ちらつかす

小さな嘘抱いて女は蝶になる

香川県 高橋宅

萎む木を幹をゆすつてがんばれと

空聞きの踏切の音軋る風

唐津市	福島紀一	ころころと小犬となりの同居人
唐津市	浜本治幸	政治家のつけるけじめは黙秘権
唐津市	入江喜久亭	宴酣下手なカラオケ聞いて飲み 待ち人は来ず一日の無駄を悔い
大阪府	池田一男	頭さげ舌をペロリと平社員 均等法妻の態度がでくなり
静岡市	片平静代	知らないでよいこともある夫婦仲 知ることの多過ぎる世にもの忘れ
静岡市	三浦つね	霊園にお花と和む家族連れ 想い出は迷い子になった京の旅
藤井寺市	菊地繁男	笑っても泣いても回る腕時計 若い子は古着させてもよく似合う
大阪府	一本勇太	とろろ汁朝から精をつけて出る 航空ショー平和な国で楽しめます
		退屈な街で未完の絵を探す 包丁の錆の答えはすぐに出る

岡山市	山磨行子	釣り上げた魚に慈悲の涙見る
和歌山県	上岡正直	春風へいつまで踏めるこのペダル
八尾市	生嶋ますみ	柏手で福がくるなら思いきり 「歩」でも敵中入れば変身す
八尾市	平川幸枝	全身で演技をしてる新生児 人並の恋にゆれてる耳飾り
川西市	田中喜俊	息子の手前 夜遊び好きな猫叱る ムコ殿はやたら車に乗せたがり
吹田市	西岡豊	沈丁花 母の好んだ香りです タイ米をきらいながらも列に着く
鳥取市	杉本孝男	コンバクト何もなかった顔にする 一線を引いたらあかん硬くなる
八尾市	大内朝子	亡父母へ届く思いの鐘をつく 湯豆腐が今日の寒さを慰める
		オーイお茶 今日仲良くやってます 合格へ母娘ではずむマリになる

東大阪市 松山 隆
五線譜へ指が踊って孫夢中
盲導犬きつと優しい目をしてる

松江市 佐野木 みえ

魅力ある街へ若者のＵターン
花の雨ぬれたボンボリ淋しげに

島根県 菅田 かつ子

私だけただ可笑しくておかしくて
ああ四月踏まれ踏まれた雑草も

寝屋川市 太田 とし子

少年の腹は外米気にもせず
ポケットじゅう探して切符の御安泰

島根県 児玉 幸子

子供等は椿つないで首飾り
坂道でつまずいた石先に行く

寝屋川市 瀧本 八十八

み仏も欠伸でそんな花御堂
連鎖してあくび伝わる終電車

大阪市 乾 哲 静

雅号にも一字残した片思い
小さな旅を喜ぶ子等に泣かされる

泉佐野市 河原崎 札子

ふるさとのなまりいっしょに薬売り
おまわりは後で集印にまず並ぶ

春風に咲く順を繰る花暦
公園に友情結ぶ親子連れ

羽曳野市 徳山 みつこ

迷わずに買った赤札軽い悔い
政治冬眠ものみな芽吹く春なのに

兵庫県 安達 厚

温泉の朝湯に幸せかみしめる
冬の間に根を張りましたと草が伸び

静岡市 中西 雅

孫に託す夢小さくも咲くを待つ
祝鯛目の下八寸眼に涙

豊中市 月原 方郎

家計簿の例外妻の長電話
三度目の禁煙誓う弱い僕

岡山市 福原 辰江

宅配便開けば里の香があふれ
七転び八起きで守るこの田畑

島根県 安部 美恵女

ふる里の桜見たさの里帰り
春の謳歌へ逝くひとの噂聞く

島根県 三代 朝子

口ほどはませた事いう孫が来る
連休のプランひる寝ともいかず

吹田市 吉川 渉

長い川母住む里に続いてる
春一番国会掃除やとくれ

不況風鍋で上司に左遷聞く
音痴には音痴で通す意地がある

唐津市 山口 ふさ子
手間かけて金のかからぬ食事摂る
寒もどり花震えてる泣いている

唐津市 江川 青 琴
独り言つぶやいてみる愛犬に
櫛の歯がかかるみたいに友が逝き

鳥取市 津村 静 枝
さほどではないが笑顔は飛びつきり
路線変更小学生は列を組み

羽曳野市 西村 りつえ
お喋りな桜無口な柏餅
粗品くれ家計覗いたアンケート

鳥取市 谷口 侑 里
山家には山家の暮し樹を植える
晴耕雨読 隠居してから長く生き

鳥取県 藤山 弘 子
店員の笑顔にひかれまた買いに
老人ホーム笑顔たやさずボランティア

一本が妙薬なのか風邪知らず
出勤の流れに押され道迷い

鳥取市 近藤 秋 星
子供より親が待つてる子供の日
転勤の君を見送る言葉なし(宮下先生転勤)

羽曳野市 山本 たけし
しぶしぶの返事上司の歪む顔
アルバイト家計支えている不況

徳島県 安宅 美代子
つらい時隠れて泣いた樹が枯れる
幸せは檜山行きのバスがない

兵庫県 中野 とよ子
カニすきへただ食べること食べること
弱点をおさえてくれた肚の虫

大阪川柳の会

とき 6月2日(木) 午後5時開場
ところ サンケイビル本館3F322号室
(桜橋交差点西400m)
宿題 「梅雨」 選者当日発表
「滴り」 木野 由紀子 選
「野心」 板尾 岳人 選
「秘密」(連記) 磯野 いさむ 選
◎各題2句・午後6時半締切
会費 500円

路郎賞

候補作品中間発表

川柳塔賞

平成六年一月号～四月号

路郎賞候補作品

阿萬萬的

妥協してきれいな嘘を又つくる 辻川 慶子
花には花の時計があつて日が暮れる

年ごとに友が宝になつて来る 山本希久子
良妻賢母と言つた敵が待っている 原 さよ子

人間の理性が線を引ききたがる 門谷たす子
脛の傷かばつと前へ進めない 本間満津子
ロボットの良いな頭痛の種がない 一瀬福一
蝶々の放浪癖に似て遊ぶ 寺沢みどり
目を入れた達磨手足が欲しくなる

おしゃべりも女多忙のうちに 入 春城武庫坊
生きてゐる限りがらくたよくたまる 高橋千万里

傷一つかくして温い人間味 青戸 田鶴
中塚 遊峰

枯葉一枚流れる川のあるかぎり 岩本 笑子
わけ言えというから嘘を考える 矢野 佳雲
老いたれど小骨ぐらいの意地はある

横田 英詩

野村 太茂津

男です正義の二字を抱いて死ぬ 両川 洋々
妥協する度に指紋が消えてゆく 三宅 保州
刃こぼれは人のところを切つたから

安藤寿美子

煮え滾る鍋です蓋を持て余す 小寺 花峯
イントロが長くて愛が萎みだす 福本 英子
グラスの中のたわむれなのだこの浮世 西口いわゑ
にんげんとしてのあなたに惚れている

氷のような君の横顔見えています 宮口 克子
木枯らしは弱いところを知つていた 奥田みつ子
書きやすい読みやすい名をつけてやる 江原とみお

西口 忠雄

使わぬが殺し文句は持っている 田中 透太
便乗で挙げる貧しき右の手よ 江口 度
男泣きする拳骨もあるだろう 小林 妻子
につこりと構えられては手が出ない

深読みをし過ぎて橋が渡れない 楊井 二南
園山多賀子

西田 柳宏子

ほおすきをならせば母を想い出す 阿部 進
お隣という親しきで子を叱る 高杉 千歩
酸欠の街で欠伸をつつされる 山本希久子
かくれんば探せば鬼は塾の中 丁坪サワ子
卒業式レモンの味のまま別れ 林野 魁光
柚子刻む香りにまいる母の背な 吉岡きみえ
細腕は一円玉を大切に 山根 八重
お見舞にまごころこめた嘘を言う 新家完司
お巡りさんの吹く笛ろくな事はない

夢がまだあるから呆ける暇がない 土橋はるお
耐えようと誓う靴ひもきつく締め 原さよ子
孵化場はうらうらうらら春離よ 西原艶子
字余りも字足らずもある主婦の日々 斉藤 島

三寒で霜やけ四温でむず痒い 西出 楓楽
進んでる時計持つてる母の朝 岸本豊平次
江口 明光

黒川 紫香

妻がいたら今頃ボケていただろう 弘津柳慶
ラーメンを濃い味にする雪景色 大橋 政良

父の下駄揃え大晦日を閉じる 川上より子
さがして居ます一緒に沈没出来る人

床屋から風邪ひきそうな顔で出る 天正 千梢

哲学はわからないまま生きている 吉岡きみえ
立読みの残りを買った気の弱さ 坪田紅葉

嫁さんをもろたら宝物にする 島崎富志子
二番目をねらえと無理な知恵をつ 土橋はるお

古里は達者なうちに帰るもの 高杉 千歩
橋詰の交番で聞いたこ焼き屋 工藤 吟笑

さみしさは外灯ひとつ消えている 森田 文
長旅の終りにやさし母の郷 本間満津子

季の移ろいを追うていて歳をとり 菱田満秋
歩いてても歩いてもひとりの夜明け 田中 薫

唯物も唯心も無し唯昼寝 萩野鮫虎狼
山頭火歩き放哉座す秋よ 越智 一水

面従は得意腹背をお得意 岩津ようじ
流して涙が嘘をもて余す 石飛 水煙

寂しくて取り纏るひと間違える 舟渡 杏花
年ごとに友が宝になつてくる 原 さよ子

柏汁や余生はあるがまがよい 森川まさお
八十歳おもちやのほしいほどのどか

いか釣りの漁火亡夫と見ています 栗谷 春子
佐治千加子

脱皮して脱皮してなお蛇である 木村貴代子
サロンパス貼ってPKOへ出る 西浦 小鹿

長旅の終りにやさし母の郷 本間満津子
耳鳴りの中から掬う春の音 堀江 芳子

落日や今日もわたしを積み残し 越村 枯梢
鈴蘭の丘逃亡の群れつつく 田村 新造

川柳塔賞候補作品

玉置 重人
こんがり魚が焼ける安定期 牧淵富喜子
スパイスの効いた言葉に魅る 池田寿美子

以心伝心おんなじとこにサロンパス 渡辺 南奉
残すもの何も無いので良く眠る 木村 春枝

山よりも大きい夫の背の温み 杉山 精子
お祈りがながくて肉が焼け過ぎる 森田 文

裸婦像と同じポーズを取ってみる 木下道子
子を思う母で傍聴席にいらる 児玉 歌子

図書館へ行って欠伸をして帰る 大西 文次
リラックスできる眼鏡が家にある 足立由美子

穂高仰いだ眼でバーゲンを選っている 萬沢 翠
値上がりのハガキへたと字を埋める 福田 悦子

やる気だな螺旋階段駆け登る 森安夢之助
犬の病院私の病院先ずさがす 森本 節子

初耳の顔して母の話聞く 岩崎みさ江

宮 口 笛 生
窓の灯がみな幸せと限らない 小木 久子
女の群へ少し油断をして這入る 永田 曉風

母の周りの空気はいつも澄んでいる 木下 道子
顎を出す者などいいない蟻の列 山本 すみ

つむじ風思わぬ種を置いてゆく 牧淵富貴子
ウインドにもう映らない虚栄心 高畑 五月

逢えた日は仏ごころの顔になる 沢田 きん
良く目立つボタンをつけて淋しがり 長浜 澄子

紅絹製のなきけよ昭和史をおもつ 藤井高子
直感のイエスで後悔ばかりする 的場十四郎

かけ違いのボタンで終るああ夫婦 越智青園
諦めるために大根スパッと切る 三浦千津子

神も仏も薬をくれない時がある 朝倉 大柏
子育てにはめる言葉を惜しまない 植田一京

良妻のレッテル羽目をはずせない 大川幸子

郵便の来ない日があり昼寝する 高野 不二

眼の前のあなたは遠い遠い人 萬沢 翠
物蹴って困る我が家のJリーグ 中西智恵子

時刻表 桜が散つてからのこと 池田寿美子
横を向く人につられて横を見る 森田 文

仏様がくしゃみをする と連が咲く 松岡遼雲
電線のほどよいたるみ皮下脂肪 山口 新子

年金で補正予算もない暮し 菱田 満秋

髪切ったくらいで水雨降り止まず 岡本道子
裏切りはなかった ななかまどの赤さ

花の名を誰がつけたか福寿草 藤井 高子
ふん切りがつかずに助走ばかりする 柳沢 たま

椅子が一つ壁に向って置いてある 木村 春枝
明日生きるパンを一番先に買う 永田 曉風
ふと亡父とエスカレーターで擦れ違ふ 牧淵富喜子

小出 智子

金魚売りも風船売りも四苦八苦 原 章峰
移り来て隣の猫に世辞を言う 菊池トミエ
穂高仰いだ眼でバーゲンを選っている 萬沢 翠

年寄りが逢いたいなんて言えるかい 永田 曉風
どうしても思い出せない傘がある

どうしても思い出せない傘がある 牧淵富喜子
良く目立つボタンをつけて淋しがり 長浜 澄子

昭和一桁デコボコ道に慣れている 高田美代子
赤い実に群がる鳥よお前もか 岡本 道子
幸せな家をつばめが知っている 渡辺 南幸
六法踏んでさて誰も来ぬ阿呆らしさ 中村 三良

やわらかに冬の陽 辛さなど伏せて 森 茜

時刻表 桜が散ってからのこと 池田寿美子
おみくじを何度引いても吉の寺 古久保和子
想い出のどこまで消せるインク消し 山口 新子

止まっているのもある時計屋の時計 高野不二
裏切りはなかった ななかまどの赤さ

板尾 岳人

花の波浴びて私も花になる 藤井 高子
一隅のバラ枯れている虚脱感 流 奈美子

雲一つない青空を描いておく 牧淵富美子
楮書から草書が好きになる紳士 足立由美子

疑えば海の碧さも空の蒼さも 島 ひかる
夫婦愛炎も風も壺の中 永田 曉風

触れないでおこう私と同じ傷 大峠 可動
裏門はいつでも空けて待っている 長浜 澄子

時を追う女の膝が萎えてゆく 西田 次
動揺をしかと見ぬいた水鏡 岡本 道子

地に還る掟の中の人生譜 野村 清美
透き通る春の小川に恋を消す 江城 修史

いたずらな風に時どき騙される 土橋 睦子
哲学をひとつ固持する自尊心 沢田 さん

哲学者をひとつ固持する自尊心 永澤 裕子

▼削除 ■5月号■(水煙抄) 54ページ

上段17行目・木村親路さんの作品1句目
踏切りを無事に渡って来た毛虫

は、本人の申し出により削除いたします。

(編集部)

川柳塔社常任理事会(4月28日)

▽武庫坊氏から800号記念行事関係の最終的な収支状況を報告。

▽正坊氏から誌寿古希記念合同句集の応募状況と製本仕様などについて提案。

▽諷云児氏から勉強会の選者決定(林瑞枝・奥田みつ子・前川千津子)について報告。

川柳塔社用箋

従来の「川柳塔用箋」(200円)と別に、200字詰原稿用紙・100枚綴ができました。各地柳壇はじめ本社への投稿にご利用ください(1冊350円)

尼崎市文芸祭 川柳募集

募集作品 雑詠1人2句
募集締切 6月14日(当日消印有効)
規定 未発表作品に限る。応募用紙または官製葉書の右半分に作品、左半分に住所・氏名明記

応募資格 特に関わない(無料)

応募先 尼崎市東七松町1-23-1
尼崎市国際文化室・文芸祭係

秀句鑑賞

同人吟 玉置 重人

—5月号から

毎月の『川柳塔』で皆さんの句を拝見する

たびに、いつも「うまいなあ」と自分の無力を思い知らされる。そんなときは、川柳を始めた頃の古いノートを開いてみるのだが、そこには色褪せた字で

むつかしいものと思つた五七五

川柳縦横斜裏表

この道は俺ますたゆまず歩くべしなどのことが、我流の作句心得として書きとめてある。川柳なんて単なる趣味やのに、そんなに身を入れんでもと、もう一人の私にささやかれる。そんなときは、たいがい作句がままならぬが、怠け心の起きている時だ。

なるほどここでスバツと川柳をやめ、推理小説でも読めばよっぽど楽かも知れない。しかし、それでは今までしてきたのは何だったのか、やめたらしまいやと自分を叱咤して、句帳をポケットに入れていたのだが、もともと怠け癖の抜けない私は、今後ともつまらぬ葛藤を繰り返しながら、川柳さんのご機嫌を伺いながら歩いて行くことであらう。

寄り添えば胸の谷間に鈴が鳴る

木本 朱夏

秀句鑑賞の第一句にます巻頭のこの句を選んだ。近頃の川柳人口はとみに女性が増え、ともすれば男性は押されがちな感否めないが、こんなに見事に女心を表現されると、男にはどうにもならぬもどかしさを感じさせられる。それにしても、鈴が鳴るとは言い得て妙で、鳴らした人も鳴る人も、明るい夢がいつばいで人生まさにバラ色である。よりいっそう輝く女を魅せてほしいものである。

マル優がふえて預ける金がない

田中正坊

福祉の行き届いたありがたい国で、定められた年齢になると、マル優はあるわ、医療費は只やと結構なことである（保険料が只ならなおありがたいが）。しかし、先立つものがないと、マル優の枠がなんぼ増えても無用の長物で、腹立たしいだけだ。この句、貧乏くさいところが少しもなく、句に託して高齢者行の貧困をうまく衝いている。

アルバイト既定の時間すぎた顔

高橋 千万里

いつものことながら、作者の鋭い観察眼には脱帽させられる。それにしても、アルバイト・パート・フリーターと呼び名は変わっても時間給なんぼの若者の何と多いことか。昔人間の私には、ちゃんと社会保険の完備した職についたらと、つまらぬ老婆心が湧いてくる。因にこんなアルバイトに限って、時間給が少しでもよい仕事へ変ってしまつのである。

いい女と家内思つた頃もあり

矢野 佳雲

夫婦箸の塗りも剥けてくると、妻の座もどつしりとして、フロ・メシ・ネルなどは昔の遺物で、男たるものだんだんおとなしくなつてきて関白風を吹かした頃を思い出すが、この句の過去形の裏に、現在のむつまじい夫婦像がくつきりと浮かんでくる。

チャンスには強いが妻に弱すぎる

奥田 みつ子

何ともつらやましいような句で、幸せな奥様族の姿が浮かんでくる。平成の世ともなれば、これが新しい夫婦像かも知れぬ。夫たるもののひたすら妻を愛し、仕事に突っ走って行く。そんな夫の気持が痛いほどよく分かる妻もまた、一途に夫を愛しているのである。

生き下手で引き算ばかり考える

川 島 颯云児

生き方の上手下手は、客観的な第三者の目であつて、当事者はその時その時の波に揉まれ、精いっぱい生きてゐるのではなからうかと、ふと考えさせられた。堅実に周到に事をまとめ上げてゆく作者の気配りが、引き算の中に凝縮されている。

前略とさも忙しい振りをする

大 橋 政 良

前略どころか、いきなり本文に入ってくるメール類が多いが、折角、久しぶりに書く手紙なら、季節のあいさつから近況報告など、達筆で綿々と綴つてくれた方が読みごたえがある。携帯電話やファックスなどのスピードアップのきょうこの頃、前略の手紙でもよしとすべきかも知れない。忙しい振りをする男どもに、何となく共感を覚える。

物差しをかえるとみんな対等で

牛 尾 緑 良

人間とは弱いもので、ともすれば長い物には巻かれよ、泣く子と地頭には勝てぬ式になりやすいものだが、川柳の物差しはありがたいため、句会の席では肩書きもなく、平等に話ができるところがよい。ただし、自らなる長幼の序を忘れてならぬのは当然である。

生きている理由を答えられますか

三 宅 保 州

思わず、「答えられません」と答えて、警策で喝を入れられた感じがした。昨日・今日・明日と、リズムの崩れない暮らしを大事にしているのだが、生きがい、生きざまなど、いろいろと考えさせられる。さて、生きている理由ともなると、明確に答えられない。修行の足りなさ、至らなさを感ぜさせられた。

すかたんをするから憎めないお人

榎 山 隆

出だしの「すかたん」が効いている。広辞苑によると、すかたんとはあてのはずれること、だまされること、間違い、見当違いなどが出ているが、どの語を持つてきても句にはならない。真面目一筋の上司では、息苦しくて仕方がない。間違いもあり、失敗もあつた話の分かる人には、自然に人望も集まる。

医者よりも頼りにしてるサロンパス

松 川 芳 子

ちよつと肩が凝つた重たい感じがする。さりとて医者へ行くのも大層だし、手近な貼り薬でしのぐこともままある。医者よりも頼りという表現がいかに川柳らしいが、

折角の美人に惜しいサロンパス

にならぬよう、くれぐれも句にはご用心を。

雲を眺めて忘れ上手になつてきた

松 本 文 子

ついこの間までは、入道雲にこたえられないもどかしさを感じていたのだが、忘れられることも大事だと思ふ齡になつてきた。いろいろと変化する雲は、さまざまな顔を見せてくれる。そんな雲を眺めながら、つまらぬことは上手に忘れる生きざまがすばらしい。

窓ぎわの席に胃薬置いてある

松 下 たつみ

窓ぎわの席にたまるストレスは、当事者のみぞ知るで、第三者には姥捨山ぐらいにしか見ない人が多いが、いったん事あるときは、窓ぎわ族のキャリアがピンチを救うかも知れない。ここは一番、開き直つて靴紐を締め直してほしい。同じ窓ぎわ族として作者にエールを送りたい。胃薬がこの句を引き立てた。

みんなお出で母の句のあるうちに

黒 田 くに子

だんだん老いてはきたが、子と思う母の気持が切々と胸に痛い。郷関を出た子らは子らで、折りにふれ時にふれて、母の乳房が恋しくなるのだが、暮らしの枷がきつて帰るのも思つてまかせない。子どもたるもの、いくつになつても、母への想いが消えるはずがない。この句、母の句が効果抜群である。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 5月号から

藤 解 静 風

落城のはなし聞いているにぎり飯

島 ひかる

城跡の花の下で母の作ってくれたにぎり飯を食べながら、この城にまつわる栄枯盛衰の父の話に、子供達はじっと聞き入っている。落城という哀しい出来事を歳月という空間が見事に消して深い句に仕立ててくれました。誰か何処かでボクの名前を消している

永 田 暁 風

私も時々こんな錯覚にとらわれるのです。ボクの名を消したがっているのは市役所の戸籍係か、地獄の間魔さんか、いや隣で何食わぬ顔して座っている仏さんかも知れないと嫌いになった理由のひみつにあこの線

山 口 新 子

そう言えば男の品性はアゴに出るとか。が、それはどこでも一緒、ホクロひとつもイヤなものはいやなんです。

しかし、アバタもえくぼという言葉だってあるんですから、そのうちにまた…。

夫婦です他人行儀にしています

萬 沢 翠

そうです。夫婦は他人であることを先ず銘記すべきです。ことに定年を迎えた男性はこの心構えが必要です。原点の他人に戻り、そこから一つひとつ積み上げてゆく努力(?)をするからこそ肝要と存じます。

思惑がからみ言葉の端濁る

藤 井 高 子

人間は正直なものでしてね。思惑や野心がからむと言葉の何処かに出るんですね。

走り出すから追いかけてみたくなる

大 川 幸 子

それは動物の本能とでも申しましょうか。犬も人間もそうです。そこで発想の転換を試みては。逃げるのをやめ、立ち止って振り返ってみたらどうでしょう。追って来た方がびっくり仰天、飛び上がったariして…。

すぐ顔に出る正直で損ばかり

渡 辺 南 奉

損ばかりでもありませんよ。それが今日の貴方への信頼なり信用の基になっているのですから。実は、いまさら方向転換されるとこちらも困るんです。

都合のつかないこともある隣りの位置

森 安 夢之助

思わずにつこり。「隣の位置」が決っています。「ではこちらでもう一度再検討します」と相手は引き下がるほかないでしょう。とりあえず今日は日本の米を研ぐ

高 田 美代子

日本米も残り少なくなつたし、ブレンド米は不安だし、まあいいか、今日はやっぱり日本米にしとこうつと。「とりあえず」に主婦の気持の瞬間の揺れをみる。

手を隠す欲しいものの無いように

岡 本 道 子

実は欲しくて欲しくてならないのです。手を隠すことによって、その想いを一層増幅してみせてくれました。

おき傘が雨降りの日に戻される

森 茜

雨が降ってきた。いま返せばまたこの傘で助かる人もあるに違いない。善意には善意で応えねば。ほのほのとして気持ちのいい句。

喜びは言葉にリボンかけて言う

菊 池 トミエ

「言葉にリボンかける」とはすばらしい発見。このよろこびは多分、人さまに贈る慶びであろう。

闘病の記

田中透太

闘病のベッドに柳誌届けられ

三月二十五日、五十五日振りに入院生活から解放された私は、妻の入れてくれたお茶でくつろぎ、退院の実感を味わった。そして、机の上の見舞の手紙と句報を読んだ後、庭に出た。さんしゅの樹には黄色、木瓜の樹には赤と白の花が咲き、盆栽の楓や姫リンゴも、地植の牡丹や芍薬や雪柳も新芽を吹き出し、すっかり春の庭になっていた。

一月初め体調を崩し、楽しみにしていた八〇〇号記念大会も欠席、検査待ちの日々をもしかという不安の中で過していたが、一月二十四日大腸にポリープがあることがわかり、摘出のため二月一日入院した。ところが、摘出の最中に激痛が起り中止した。原因は腸の癒着で開腹手術をすることになった。それから手術までの一週間「検査漬け」の日が続き、脳、胸、腹、それに前立腺の検査までして

れたが、腸以外には異常は見られなかった。

三度目の切腹覚悟は出来ている

私は三十数年前、腹膜と十二指腸潰瘍で二度切腹した。今度の手術も万全だと信じてはいたが、やはり万一の事を考え柳友の小池しげおさんに葬儀についての書き置きをした。

家は代々浄土宗であるが、信仰心のない私は死に方は自分で決められないとすれば、葬儀ぐらゐは自分で決めたいと思った。最近、有名人の中には「生前葬」のようなことが行われているが、私の場合、ささやかでも「川柳葬」にしてほしいと。祭壇を花と川柳の色紙や短冊で飾り、お経のかわりに句の披露の中で訣れの旅立ちをしたいと。そのことを手術前にしげおさんに話したところ、「透太はん、そんなことを考えてるうちは大丈夫や。まだまだ死ぬへんで」と笑い話になった。

手術は無事に終わったが、癒着は予想以上にひどかった。口と腹と尿に管を入れてICUで四日間過ごし、五日目に一般病室に移った。口の管は前日に取られていたのでその日から点滴と流動食になり、早速、歩くようにといわれたが、尿管が取れるまではと断わった。管が取れ、抜糸も終り、おむつをしていたものの順調に回復。二月末には退院出来ると喜んでいたら、二週間後に発熱し排便の

コントロールが効かなくなった。実は大腸だけでなく直腸にもメスが入られ、もう少しのところまで「人工肛門」になるところだったと聞かされた。そんなことで退院が大幅に遅れたが、三月に入って外出できるようになり外の空気に触れて作句意欲も出てきた。

カミソリを心に抱いて冬を越す

戻り寒冬の微熱がまた続く

術後の初めての句で、これを句箋に書いてベッドの上の棚に張り出したところ、翌日回診の院長が見て、「えらい恐い川柳やなあ。けど川柳を作るまで元気になった。よう頑張った」と励ましてくれた。その院長の言葉に氣を良くし、作句に弾みがついた。

ドクターの髭が大きく見えてくる

良薬は心美人のナースから

沈丁花寒い話はしたくない

煩惱や命のスペア欲しくなる

襟足の綺麗な人と花の下

病室で春の暦をあたためる

退院の時には三十句を越し、川柳の「暖簾」が出来ていた。

今度の入院は、全く不意打ちの出来事である。この禍を福にするためにも、その糧として川柳を作り続けていきたい。

回り道した分春を楽しもう

銀河系

河内天笑選

和歌山市 古久保 和子

おばさんと呼ばれあつさり振り向いた

ワープロの手紙へ返事簡条書

社長には入社式だけお会いた

羽曳野市 芦田 絢子

体型を保つ苦勞は内緒です

禁断の恋ブレイキが利きませぬ

陽炎の立つ駅別れた日のまんま

今治市 矢野 佳雲

恋という一字に越える百の橋

尾を振って生きる男を笑えるか

海南市 三宅 保州

反省を綴ると私小説になる

肝心のときには居ない駐在所

唐津市 山門 タミ

金婚後一年の医者通い

居て嬉し居てわずらわし老い二人

吹田市 山本 希久子

何もかも似過ぎてウマが合いません

春をひとつ私にくれた娘の便り

鳥取県 鈴木 公弘

日本酒の水割りを飲む日が来るぞ

新人の大きな胸が気にかかる

西宮市 西口 いわゑ

菜の花と蝶のくちづけ見ていたり

落日へ無の一時を頂きぬ

米子市 林 荒介

風の夜は悪に磨きをかけている

仏壇の奥にいるのが本物だ

八戸市 島田 昭治

誠実に生きたつもりも悔い少し

適当に出来ぬを他人馬鹿とみる

大阪市 榊 本路児

藪の中でぐっすりねむっている私

雪こんこ鱈ずしを食う一人旅

名古屋市中区 藤井 高子

水の味変えて地球が病んでいる

鬼瓦 決算前の顔である

大阪市 一本 勇太

下り坂萎えた反旗を胸に抱く

砂時計くるり上手な物忘れ

静岡市 小木 久子

お若いと言われ素直にありがとう

楽しいことすぐお裾分けしたくなる

香川県 成重 放任

救急の助けやつぱり隣組

戸が開かぬ隣の老婆へ声をかけ

青森市 工藤 甲吉

民主主義もいいがどうする銃社会

添いとげてきて倦怠期痴話喧嘩

八尾市 山下 美津留

向い風しっかり眉をかいて出る

首切りのリストに僕の名があつた

倉敷市 田辺 炎六

金持ちの不安は知らぬまま老いる

胡蝶蘭貧しい彩は嫌いです

米子市 鹿島 蘭

桜散る下に万葉人となり

危険の札 今日私の私につけておく

広島市 中村 要

禁煙に禁酒がついて退院し

心にもない良心が出て困る

唐津市 久保 正剣

往時茫々あいつは生きているだろうか

親同士すったもんだがありました

出雲市 竹治 ちかし

子の帰省リズムが狂う妻と僕

香川県 新川 マサエ

主役にはなれない花も悔いはなし

弘前市 佐治 千加子

几帳面過ぎてときには無視される

米子市 中井 ゆき

焼肉のけむり棚引く桜山

大阪市 町田 達子

舶来の花にも慣れた仏さま

和歌山市 森 口 恵 子
がなければ人数分に見てくれる
米子市

木 村 春 枝

ツーカーの返事が少しずれ出した
尼崎市 春 城 年 代

呆けるはずないとまいにち言い聞かす
綾部市 藤 田 芳 郎

神様の他所見もチャンスだと思っ
河内長野市 水 谷 正 子

ぼちぼちがさっぱりわやになる不況
島取県 江 原 と み お

裏山のうぐいす歌詞をまちがえる
広島県 田 村 新 造

自分史にすこしほかした恋人よ
松江市 松 浦 登 志 子

のせられてバクバク口をあけていた
倉吉市 米 田 幸 子

お向いの窓に灯が点らない
島取県 新 家 完 司

間を置いて冷たい手紙読み返す
枚方市 前 た も つ

あの人に電話するので歯を磨く
和歌山市 山 田 高 夫

老婆心ながらと槍を向けてくる
枚方市 海 老 池 洋

自惚れを捨てると僕の顔がない
八尾市 村 上 ミ ツ 子

夫には味方の顔をみせておく

八尾市 村 上 剛 治
古傷を見せ合っているふきだまり
横浜市 菱 田 満 秋

落日のそれから僕に影がない
堺 市 高 橋 千 万 子

音もなく今人間がかかる罌
米子市 澤 田 千 春

呑みこんだ言葉が動くので困る
砂川市 大 橋 政 良

一呼吸このまま馬鹿を通す肚
西宮市 奥 田 み つ 子

悩むだけ悩めと友の目が笑う
和歌山市 玉 置 当 代

優しすぎる貴方に噂つきまとう
弘前市 村 田 善 保

パンのみに生くるに非ず 空の蒼
米子市 林 瑞 枝

日曆を捲り忘れて矢の如し
今治市 越 智 一 水

日々多忙日々好日と受けとめる
島取市 植 田 一 京

師と仰ぐ座右の銘が古くなり
寝屋川市 岸 野 あ や め

おしやれの極意はさりげなくさりげなく
寝屋川市 堀 江 光 子

二次会で通院中の医者に逢い
米子市 金 山 夕 子

女に弱い男に弱い話

兵庫県 遠 山 可 住
頼りない部下が得心ばかりする
香川県 川 崎 ひ かり

手ごたえがないからジョークにしておこう
今治市 塩 路 よ し み

花万朵燃える心をひたかくす
旭川市 朝 倉 大 柏

隙だらけ隙に仕掛けられた罌がある
米子市 青 戸 田 鶴

にぎりめし一つで虫がおさまった
京都市 都 倉 求 芽

カタカタと絵馬が約束破ってる
今治市 渡 辺 南 奉

一呼吸入れると怒り消えていた
米子市 小 西 雄 々

夜ざくらへ反骨の旗折りたたむ
茨木市 藤 井 正 雄

責任が自由の裏に貼ってある
和歌山市 桜 井 千 秀

勢いが余って火の粉浴びている
兵庫県 玉 田 三 重

若い芽が伸びて家風を変えたがる
唐津市 岩 崎 實

ぐらついた心をしめる記事に逢い
島取県 土 橋 は る お

追いついてみたら男の人だった
和歌山市 細 川 稚 代

先生のようにはいかぬ節まわし

唐津市 山口 ふさ子
やられたらやり返してゐるだけのこと

岸和田市 田中 文時
先ず楽に走り憂いは先延ばし

姫路市 小井 里兆
五月晴れ火の見櫓に鯉のぼり

藤井寺市 中島 志洋
欲の皮上手な嘘に乗せられる

和歌山市 田中 みね
強すぎる個性が徒となる訣れ

岸和田市 古野 ひで
童顔のピッチャー応援したくなる

弘前市 一戸 ツネ
現し世の淫みに落ちた失語症

倉吉市 奥谷 弘朗
山歩き飯食うところは決めてある

鳥取県 さえき やえ
久しぶり肥をかついだ人に会う

東京都 清原 悦子
老母にもまだ手鏡は離せない

高知県 赤川 菊野
味のある言葉やっぱり苦勞人

倉吉市 野口 節子
あの人の笑顔にあえばくずれそう

和泉市 西岡 洛醉
ぐっすりと眠る若さが欲しい年

姫路市 大原 葉香
かぞえ齡ままだまだ昔生きている

河内長野市 植村 喜代
寝ついたら家族しかないこと忘れ

唐津市 浜本 久仁於
紹介が済めば胡坐にもどる膝

岡山県 富坂 志重
カタカナに迷う私の老眼鏡

池田市 岡本 吉太郎
日記にも書けない話持って逝く

弘前市 岡本 花匠
花りんご期待無尽の二町五畝

寝屋川市 太田 とし子
スマートな自己紹介で顔を売り

泉佐野市 河原崎 礼子
お見舞は湯治めぐりの本にする

熊本県 高野 宵草
価値観の違いを子等に諭される

吹田市 吉川 渉
明日の夢静かに語る酒が好き

米子市 村田 俊明
一人逝く旅を見送る風花よ

島根県 岩田 三和
日本の木だけで作る村大工

鳥取県 村崎 きみ子
孫という友だちが居て若返る

鳥取県 土橋 睦子
理屈抜き男の意地を通させる

米子市 光井 玲子
小説を地で行く友に喝采を

藤井寺市 高田 美代子
鶯の子が鷹に育つた不仕合せ

米子市 白根 ふみ
白髪染め止めて自分をとり戻す

泉佐野市 稲葉 洋
潮焼けの素顔に刻む時化と風

大阪市 藤田 頂留子
良し悪しも自己中心の喧嘩ごま

鳥取県 奥谷 彩子
春燦燦 屋根いっぱいフトン敷く

神戸市 向井 泰子
点滴といっしょ明るい面会所

鳥取県 乾 喜与志
米舂過ぎてもお祭りに血がおどる

兵庫県 酒井 靖子
別棟に住んで気楽な城にする

倉吉市 最上 和枝
片足で立って老化を測ってる

豊中市 田中正坊
強がり言うてはみたが妻の留守

鳥取市 近藤 秋星
金のない話はすまい春だから

茨木市 堀 良江
花散らぬうちにおまいりたい寺

羽曳野市 酒井 一壺
鶯が気を許してる内の庭

吹田市 栗谷 春子
花の寺だけのこ重き帰道

羽曳野市 徳山 みつこ
散る桜残る桜もあだ桜
守口市 結城 君子

アネモネの茎のねじれの優しさよ
松原市 小池 しげお

植木屋の缺切りたい枝ばかり
香川県 山地 マツエ

紋白蝶幼き恋をふと思う
鹿児島県 大山 舞鳥影

季節風のお土産なのか迷い蝶
宇部市 中村 三良

やさしい水泡確かめてから鳥の寄り
唐津市 田口 虹汀

日替りの花が支えているベッド
今治市 月原 宵明

下積みは昼から花を観る準備
和歌山市 福本 英子

花吹雪陣取り役の背広にも
大阪市 神夏磯 典子

他人の輪に誘い込まれた花の下
静岡県 藺田 蓼沓

顔に虫が這っても起きぬ花の下
鳥取県 石谷 美恵子

鬼も蛇も花の下では恐くない
五所河原市 斉藤 島

蕾に送られて花に迎えられ
唐津市 山口 高明

名も告げぬ電話むすめへ取り次がぬ

大阪府 寺井 東雲
花粉症 犬もマスクを掛けている
岸和田市 三輪 通彦

年金が値上げラッシュに泣かされる
唐津市 仁部 四郎

丸腰で謀反しに行く投票所
大阪府 尾崎 黄紅

敬老であれ軽老であれ生きている
笑面市 椎江 清芳

生き残る知恵ないままに都去り
静岡市 柳沢 たま

暖衣飽食こわい病気がはやり出し
寝屋川市 平松 かすみ

鬼の面隠し通したグリコ犯
羽曳野市 吉川 寿美

政治やの思惑からむ水面下
出雲市 久谷 まこと

薬袋みんな持つてくるクラス会
京都市 松川 杜的

向う三軒どっち向いてもお年寄り
和歌山市 楠見 章子

多数決小さな声を掻つ攫つ
宝塚市 丸山 よし津

ポテトチップの軽さで育つ子の未来
大阪府 川原 章久

混んできて先が見えない老いの坂
仙台市 川村 映輝

ピストルを持たねば護身できぬ国

川西市 松本 ただし
駆け引きがこんがらかった八頭立て
大阪府 本間 満津子

痛いところ根ほり葉ほりのインタビュ
和歌山市 青枝 鉄治

昇進をあきらめ休暇フルに取り
熊本市 遠山 夏生

投票の義務を果しにゆく白票
大阪府 中橋 恵美子

柵席の値踏みをしてる大相撲
唐津市 山門 幸夫

親離れしてもお米の宅急便
静岡市 沢田 きん

米不足応援しますパンの耳
阪南市 深日 白光子

この歳になってタイ米食う破目に
鳥取市 西原 艶子

飯粒へ国籍問わぬ主婦の知恵
米子市 茂理 高代

亡母に盛るブレンド米の誤聞かす
岡山県 小林 妻子

珍しい米が落ちたと胃が騒ぐ
唐津市 浜本 治幸

輸入米さわけさわけと闇業者

この欄への投句は、必ず川柳塔用箋に三句を書き、毎月15日までに到着するよう、川柳塔社事務所へお送りください。(河内天笑)

首香のむ 八木千代選

首という首を大事に洗っている

米子市 政岡日枝子

「首根っ子」「足首」「手首」「人形の首」「花の首」「徳利の首」と胴をつなぐ細い部分、高等動植物のみがもつ基本器官、その大切さから転じて生き死にかかわる多くの熟語がうまれていきます。共鳴させられたのは「首という首」の強烈な指摘です。人生の後半にさしかかって作者は我が首を洗うばかりでなく、手にも足にも心を配り、思いを掛けてやらねば与えられた命を使いこなすことは出来ないと書いています。語り口は鋭く、「首」という厳しい言葉を重ねていながら、大きく見渡せる目と懺悔に似た重みとがひしひしと伝わってきます。

月満ちる何と見事な自己管理

鳥根県 松本 文子

「満つれば欠ける」口癖のように呟いていらつした先生を思い出しています。若い頃、私はその方に不味流の茶事を習っていたのでした。呪文めいた口調に何やらしじみ述懐がこめられていて、それからずっと人生観として心の底に根づきました。万象すべて摂理に違ひありませんが、地球の衛星である月の満ち欠け、昔から詠まれ続けている現象を「見事な自己管理」と自分の言葉で書き切ったあたりのみごとき。次に満ちるためにも欠けてゆくという自己抑制の厳しい月が何とも哀れで、たいていは情感に溺れがちになるところをびたり止めた仕立て、この座五の決め手には参りました。

一二の腕に蚕這わせて道遠し

いくたびの桜よこの身老けにけり

大阪府 北川 弘子
八尾市 高橋 夕花

生きてゆく限り山とは向き合おう
影と同じ重さで肩が冷えてくる
狂気つみ重ねてさくら満開に
こだわりを急に消したのもさくら
一流の下っ端になることにしよう
雨はもう雪に変身せぬという
傾けてみてもこぼれるものがない
人形に性質が出来疎まれる
川下にきのうの罪が浮いている
ファックスの紙白じろと無言なり
ことここに至り葉桜と問答
私という安全バイを抱いている
七人の敵八人でもよい花の下
山は晴れて今日を約束してくれる
小さい嘘なのに唇ひび割れる
春の絵にピンクあふれているも哀
なさけとや おとおんなの鈴繁し
生き残り賭けて一差し舞っておく
消えたくて等身大の袋縫う
針山の鬱は陽気のせいでしょううか
嘘一つそれから石を抱いたまま
名人のひとりよがりに冷える朝
躍り出る隠れ桜の変奏曲
考えがついたか落ちる雨傘
理屈はいらんこの椅子とても暖かい

米子市	青戸	田鶴
堺市	板野	美子
和歌山市	木本	朱夏
西宮市	牧瀬富喜子	
大阪市	西出	楓楽
米子市	中井	ゆき
鳥取市	西原	艶子
西宮市	西口いわゑ	
宝塚市	丸山よし津	
鳥取市	植田	一京
和歌山市	田中	輝子
堺市	横田マリ子	
八尾市	宮西	弥生
米子市	寺沢みどり	
和歌山市	福本	英子
和歌山市	森	茜
名古屋	藤井	高子
和歌山市	桜井	千秀
西宮市	奥田みつ子	
大阪市	津守	柳伸
和歌山市	榎原	公子
吹田市	栗谷	春子
米子市	金山	夕子
熊本市	永田	俊子
和歌山市	木村	初子

裏おもての隙間にいたい今の鬱

この風を涼しと思うときが来る

体力を失うときが恐ろしい

本気では叱ってくれぬ風の街

聖書の中で幾度転んだことだろう

明日があるから別に慌てることはない

散るさくら女は根気よく生きる

一滴のしみ静かな波がある

ありがとうありがとう暦めくつて

その壁の向こうは夢の開拓地

甘えてばかりタンポポの黄色にも

深爪の罪 爪切りになすりつけ

坪庭の椿乏しい影落とす

はやく妥協しないと花が散ってゆく

振り幅の端で足跡埋めてゆく

針塚のうしろに寒さ溜まりゆく

深いところで亡父が私をささえている

マニキュアの淡々として小癩だよ

爪剪りも楽しみにする老いの孤独

暇ではないがじつと見るわらびの芽

仮縫いのままで嫁いだ娘を案じ

残された私は何をすればいい

舞台から降りて私に戻る部屋

夫とは何にも競うことがない

何時見ても笑顔の足りぬ鏡持つ

寝屋川市 籠島 恵子

茨木市 堀 良江

米子市 鹿島 繭

岡山県 矢内寿美子

羽曳野市 吉川 寿美

米子市 林 瑞枝

西宮市 岡本 道子

和歌山市 古久保和子

大阪市 神夏磯典子

和歌山市 宮口 克子

兵庫県 倉垣 恵美

米子市 石垣 花子

尼崎市 春城 年代

鳥取県 さえきやえ

和歌山県 小倉 アサ

京都市 山海 友照

米子市 新 正子

松江市 安食 友子

倉吉市 淡路ゆり子

米子市 茂理 高代

岡山県 山本 玉恵

和歌山市 森口 恵子

和歌山市 堀畑 靖子

芦屋市 黒田 能子

米子市 木村 春枝

べた風が不安で石を投げてみる

足踏みをしている遮断機の向こう

約束を反故にはしない花標

今何を信じたらい風の声

問題はそうした君の言葉じり

すがりつく御手が千本安堵する

軒下の花も私も咲いている

わが米櫃に忍び込んだるインディカ種

出る幕はないけどそっと見守ろう

春の月つがなきやと見回られ

ロンドンの匙がきらりと掬う味

喜劇です満期保険が涙ほど

カットカット一人芝居は絵にならぬ

必要とされているらし年の功

エッセイを玉虫色に包もうか

庭石に掛けて春待つ尾てい骨

孫に縫う晴れ着仕合せ呼ぶように

暮らしの手赤いマニキュア浮いている

幸せを鬼にも少しお裾分け

満願成就へ西から晴れてくる

とりあえずは幸せ米を持つている

凡人で悟りに遠い蟬り

小心の胸に大志を温める

今治市 野村 京子

米子市 澤田 千春

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 玉置 当代

和歌山市 田中 みね

西宮市 秋元 てる

大阪市 鈴木 節子

寝屋川市 岸野あやめ

米子市 光井 玲子

寝屋川市 宮崎 菜月

弘前市 佐治千加子

大阪市 日阪 秋子

羽曳野市 芦田 絢子

米子市 白根 ふみ

貝塚市 池田寿美子

青森県 福士 トキ

富田林市 片岡智恵子

東京都 山口 新子

八尾市 村上ミツ子

大阪市 三浦千津子

鳥取県 権代 康女

和歌山市 山根 恵美

米子市 永井三津子

投句先 〒683 米子市花園町14-8

八木 千代

膝

叔山 隆選



お膝元に誇る世界の白鷺城
膝詰め詰問微笑みにかわされる
付き合えず膝と膝との自己主張
膝小僧かかえてロダン居眠りか
膝崩すまではいい酒だったのに
地蔵様の膝へ差出す嘆願書
久闊に膝を交えて酌み交わす
大仏の膝に煩惱小さすぎ
膝までもこうべをたれる夢の稲
耳寄りな話に膝がにじり寄る
不器用な膝でころんではかりいる
端座した男の膝に燃えるもの
低くした膝から話す思いやり
乗り出した膝核心を突いてくる
膝を折ることは知らない有頂天
野心家の膝はひとまず折っておく
ケンケンをもつ忘れてる膝小僧
父の膝 今日も動く朝を出る
父の膝も母の膝も病もち
膝抱いて解けぬバズルへ小半日
よちよちとあぐらへ座る宝物
膝小僧にいつもすり傷あった頃

サワ子 歌ったね膝を揃えて雛の宵
恭昌 愛枯れて女に泣ける膝がない
章久 搦手の膝から老いが攻めて来る
黎之助 九十の葬式陽気なあぐらかき
清史 ふるさとが恋しくなつた膝小僧
シマ子 膝抱いて遠い海鳴り聞いている
多賀子 膝いかでですか花便りに寄せて
勇太 仕合せの坂が登れぬ枯れた膝
東雲 住
諷云児 定年のこれから妻と膝栗毛
狸村 膝正し掛け軸を見る奥書院
有一朗 膝少し崩せば母も女なり
雅城 花に問ひ膝を崩さず返事待つ
良知 かかえたりたたいたたり膝 人生譜
鉄治 人
希久子 ふるさとに着く 山笑う膝笑う
杜的 地
洛醉 煩惱は膝に畳んでいたけれど
日枝子 天
勝美 正座して丸き心の膝頭
重人 軸
倫子 大あぐら仏のように孫を置き

彩子 英子 正雄 典子 志重 義美 達子 美代子 寿美 泰子 可住 富喜子 みつこ 博友 保州 正坊 久仁於 雄々 洋 島 螢 大原 葉香

梯子

西田柳宏子選



梯子車の届かぬ階に住み慣れる
幸せへ黙々と継ぐ段梯子
厄年の梯子は妻に支えられ
母の持つ梯子手頃で使いよい
目惚れですする登る縄梯子
逃げ道にひよいと梯子が置いてある
外される梯子と知らず登りつめ
大屋根に梅雨の梯子がかけてある
ライバルの梯子はしゃんと立っている
ライバルのかけた梯子が高く見え
煤払いみ仏に詫びている梯子
縄梯子しがみつくから揺れやまず
帆船に世界見渡す縄梯子
四面楚歌ついに梯子も外される
リストラで消えた年功梯子段
奈落から男が掴む縄梯子
落ちるなよ下は地獄の縄梯子
改革のはしごが揺れて落ちてきた
脚立にものはしご高所恐怖症
ロングスカートで上る梯子はスマートに
エリーートの梯子が特別席にある
豆の蔓夢を探しに行く梯子

武史 洋 英王子 公子 美代子 日枝子 凡々子 南奉 悦男 俊子 満秋 勝美 美一 晋 久仁於 伊津志 喜寿志 隆 夕子 可住 美代子

信じてはいても揺れてる縄梯子
嘘のない梯子と思うから登る
天国へ行く梯子なら昇ろうか
現代子出世の梯子のぼらない
梯子車をあざけっているビル火災
梯子酒タクシー呼んだまで覚え
段梯子どうやら息子反抗期
吊りばしこまだ使ってる故郷の家
お隣へ行った梯子が帰らない
梯子車が届かずへりの縄梯子
使わない梯子ギシギシ音がする
巢立つ子に届かなくなる縄梯子
梯子には登れぬ犬が吠えている
瀬戸際で友が情けの縄梯子
親子梯子掛けたり外したり

何処へ行くのか蟻が梯子を上る
登ることだけ考えている梯子
梯子から落ちてきたのは棟梁だ
段梯子こころげ落ちるはト書きなり
転動でいつか外されてた梯子
人
入れ歯まで忘れて帰る梯子酒
地
ドレミファのような下宿の段梯子
天
梯子段袴の裾を二度も踏む
軸
堕ちてから梯子朽ちてたなど悔む
月原 宵明

艶子 高代 恭昌 智恵 鉄治 義美 時弘 柳五郎 正子 朴竜 黎之助 サワ子 とし子 剛治 幸夫 杜的 保州 次男 泰子 正坊 愛論 明水

はしやぐ

川上より子選



はしやぎ疲れてぐっすり眠るおもちゃ箱
喪に帰る車と知らず子がはしやぎ
妻が見ているとは知らぬ野球拳
はしやぎから声がわりした隣の子
はしやいでるうちに虚しくなるピエロ
はしやぐのは大だけ私の旅帰り
単純にはしやぐわたしのいいところ
フルムーンのブランきかせてからの妻
嫁はんがはしやぐとアレーキが効かぬ
はしやぎ過ぎだと叱られる退院日
指切りげんまんババとの約束がはしやぐ
青春をはしやぎ過ぎたか癌細胞
はしやぎ過ぎわたしの影を見失う
満点へはしやいで帰るランドセル
昇進の内示にはしやぐ湯が溢れ
自身よりもはしやぐ出迎え金メダル
はしやぐ子に借家が少し狭すぎる
若い子に聞かれ上りついはしやぐ
ああ女 指輪一つがはしやがせる
はしやいだ後が急に淋しい寮歌祭
外来をおいしく炊けた日はしやぎ
すばらしい出逢いにはしやぐイヤリング

諷云児 白光子 清史 遊峰 恵子 高榮 夕子 晋 是るお シマ子 寿美 螢 多賀子 艶子 正剣 天弘 有一郎 英一 公子 俊子 鉄治 良子

誰彼に父になったと触れ歩き
大本営発表はしやいだことがある
ライトアップ文化遺産の城はしやぐ
はしやいでるが友の左遷を気にしてる
父さんではしやぐと何か有りそうで
やめたやめたとはしやいでるのは次の椅子
上役が帰って花見本番に
君の手におちてはしやぐ毯である
よくはしやぐ雑魚の話題へ耳向ける
六十の手習い不器用な血がはしやぐ
はしやいでる妻へ真実言いそびれ
フライパンの中ではしやいでいた私
はしやぐ子も沈む日もある受験の子
四月馬鹿はしやぐ傘寿のクラス会
妖精がはしやぐ深夜の花明り

大柏 正坊 葉香 たもつ 洛醉 みつこ やすお 寿恵子 雄々 可住 あずき 正子 勝己 サワ子 希久子 英子 四郎 久仁於 恵美 ちかし 芳郎 榎山隆

初歩教室

題一破る

吉岡美房

今回も3句ずつ85名の投句を頂いた内60句は障子・襖を破るというものでした。何回も言うようですが、出来るだけ広い視野で物を見て、新しい着想のものを句にするようにして頂きたいと思えます。

それでは添削句から発表します。

破つても公約だけは湧く選挙
破れぬ気が言い放題の選挙戦
破れない婦唱夫随で今日も無事
(鉄壁の婦唱夫随が破れない)
破損する手記をつないで見る古典
(古文書の破れ補い知る歴史)
伝統を破らず続けてただ思ふ
(伝統を破る勇気が生き残り)
古シーツ ビービー破りて雑巾縫う
(古シーツ ビービー破るサスペンス)
ジーンズの脛を破ってファッション
(ジーンズを破る個性のファッション)

真ん中に横紙破りいる不安
(真ん中へ横紙破り来て座り)
校則を破ってみたい反抗期
(校則を破って背伸びした昔)
門限を破り朝食とばされる
(門限を破り大人を主張する)
約束を破り言い訳庇い合う
(門限を破る言い訳庇い合い)
パバらしく門限決めて守られぬ
(門限を一番先に破るパバ)
時間かけ書いた手紙は破らない
(何枚も破り出せない手紙書く)
春風が破れた夢を包み込み
(春風に破れた恋を労られ)
くやしくて夜中に紙を破つてる
(悔しくて手紙破って眠られず)
強がりの男破れて青春譜
(繕えぬ恋に破れたのは男)
指切りを破って逃げた春の宵
(指切りを破った人と思う春)
気まま娘の愛の破たんていまひとり
(翔びすぎて愛の破綻を繰り返す)
思い切り泣いて秘蔵の文破る
(思い切り泣いたら手紙破れそつ)
離婚届破ったあとの平行線
(戻らない離婚届けを破つても)

結婚を決めたあなたにある誤算
(恋人の頃の約束みな破り)
降参だ孫に破れたへば将棋
(降参と孫に破れておく将棋)
インテリを破る凡人多数決
(少数を破る衆愚の多数決)
不景気を流行色で破つたる
(不景気を派手な服で打ち破る)
領袖の破れかぶれの嵐くる
(次期総理破れかぶれの立候補)
和平に時間かけ破るのは一瞬
(當々と築く平和がすぐ破れ)
禁破り土足で車上り込む
(禁破り神を恐れぬ暴走車)
破るのが好きで法則無視をする
(破られる為に食管法がある)
葉の破れ無農薬だと胸を張り
(無農薬証提につけた葉の破れ)
夢破る殿の政治も金まみれ
(清潔なイメージ破る殿と金)
約束を破つて来ない深い訳
(約束を破る善ない人を持つ)
破るかも知れぬ誓詞を朗ろつと
(あのかきはあのかき誓詞破られる)
破りたい衝動起す女文字
(夫宛破りたくなる女文字)

堪忍袋破いてならぬ嫁姑

(破れない堪忍袋嫁姑)

約束は破るためにある悲しまず

(破られるものと約束諦める)

張り替えた障子子供に破られる

(成長の高さで障子破られる)

明障子破る紅葉の手をなでる

(俺の孫障子もみじの手で破る)

よく遊ぶ児等に襖の破りあと

(孫婦り襖破った跡見付け)

懐しい障子の穴も父も亡く

(叱られた障子の穴も父も無し)

ジnkスを破る勇気を褒めてやる

(ジnkスを破る若さに期待する)

退職届破る社長の人間味

(励まして辞職願いを破り捨て)

硬い殻破って出よう新天地

(きつと壁破る根性持つている)

明け方の静けさ破る救急車

(静かさを破り近所に救急車)

幸せを詰めた袋の底が破れてた

(幸せを詰めた袋が破れそう)

沈黙を破った時の父が好き

(決断へ父が沈黙破るとき)

交渉が破れてからの胸算用

(交渉の破る破らぬ金次第)

行子

泰子

一雄

俊一

春風

宅

孝男

清美

郁子

辰男

彩子

しのぶ

一壺

恋破れ思い出のあとなぞつて

(初恋の破れもなぞるクラス会)

破れても履きよい靴で捨てられぬ

(履き慣れた靴破れても捨て切れず)

破顔一笑何事もなく納められ

(破顔一笑ボスの自信に救われる)

日本新破る選手も首位じゃない

(日本新破って通じない世界)

伝統を破る時代の風が吹く

(伝統を破りなじめぬ風が吹く)

禁煙の誓い三日で破ってる

(すぐ破る禁煙宣言ばかりする)

会えたのに憎い目覚し夢破る

(春眠を時計如きに破られる)

着想・表現ともに立派な句

太平の夢を破った米不足

贈り物破れば中味袖の下

破れ障子に切紙を貼った母の部屋

限界に堪忍袋破れそう

背かれた写真だけと破られず

破つて貰った文が破れない

まだ未練あつて破れぬはずれ籤

殿様の夢が破れた剣ヶ峰

約束を破った指が痛み出す

ポケットに破り忘れた花名刺

約束を破った罰が高くなり

嘉子

弘子

ミツオ

康子

義男

武春

りつえ

黎之助

三重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

志重

決断と破れかぶれは紙一重

校則を破って娘脱皮する

うっかりと破ったメモを縫い合わせる

幾度も破って捨てた恋ごころ

日めくりを無為に破った日を重ね

四季の景破るに惜しいカレンダー

約束を破って試す好きな人

雪の朝破約の人を許せそう

聞きあきた演技見破る我悲し

ジーンズを破ってカッコイイという

破れ太鼓捨てて息子と手をつなぐ

破られることも覚悟のラブレター

夢破れ落花の中に佇ちつくす

這えば立て立てば障子を破られる

門限を破る負い目の戸が軋む

萌える春舗装を破る根の力

仕来りを破る法事のフルコース

初恋に破れてからが美しい

人生に破れ西陽に道を聞く

私の句

指切りを破り時効が見付からぬ

金権を破る百年河清待つ

題「虫」

6月15日締切(8月号発表)

宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

義子

君枝

大静子

今章子

半量

侑里

たもつ

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

高栄

春城

毎月25日締切・30句以内厳守 編集部

サークル檸檬

小林 一夫 報

春の一日洗濯をして終る
春の満月 満ちているのはお前だけ
うかうかと春の魔法にのせられる
顔色がとてもいいねと春の嘘
頂上に立つたら春は一直線
人形のどれも笑いて春の雷
紋白蝶追って送った日の遠く
きれいごとと並べきれいに生きられぬ
握手した温もりそつと持ち帰る
言葉を削り続けて魚は海へ還る
そして神様も嘘をつきますように
雀の子歩けば誰かに出会えるよ
咲くままに散るままにあり私の桜
花びらがひらひら誰の手に落ちる
笑い袋をふくらすことが先決だ
写経して不生不滅の風まとう

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報
またしても壁にぶつかるとのさま 修 水

いいヒントもらい悩みが解けてゆく
四島を氷に閉ざし遅い春
春風に吹かれピカソの目が動く
テトラポットに優しかった春の海
春うら妻の電話はいつつ終る
五百羅漢眠そう土筆のびてるよ
歩いても歩いても母先にいる
家中が沸く初孫の一步二歩
今日の分足して万歩の表を書く
歩いても走っても追いつけぬ夢
にこやかに頭を下げて行く散歩
人形が歩く唯それだけで面白い
ポケットのレターと歩く御堂筋
煩惱と平行線を歩く ぼく
視野にある内は内儀さんして歩く
煩惱を背負って歩くいつも雨
よく見えるメガネで世間見て歩く
雨の日は昼寝の夢で楽しもう
対岸の烽火に迷う貧乏きこころ
両肩の荷物をひとつずつ放す
傍観者でいたいガラスのマリア様
日脚伸びお地蔵さんは首がない
俵せはローンの中に少しあり
悪い事耳が遠いと首を振り
亀になれ亀になろうと耐えている
栄転の背中が青く炎えている
誰も笑ってくれないピエロの告白
しらをきる心の隅に鬼が居る
何時来るか分からぬ恋におしやれる

正 治 まさお 武庫坊 すみ 勇次郎 萬 昌 園 歩 行 隆 キク子 メ 女 紫 香 伊 三 郎 正 一 歌 子 芳 子 諷 云 児 美 江 子 澄 子 年 代 道 子 鹿 太 吉 太 郎 智 栄 子 正 坊 よしお 白 漢 子 涉

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

馬鹿になることも覚えた朝の靴
定年と知らず目覚し鳴っている
敵視する蟻が一匹そばに居る
ダイエットしなくちや駄目と言う鏡
後ろからついて行くのに怪我をする
酔うほどに魅せるホクロの左横
マブタには優しく笑う師の笑顔
海苔の香を自家産米が引き立たせ
孫二人走れば古家も活気づき
一言が耳に残って寝られない
都合よく借りたお金はすぐ忘れ
一筆を取られてケリの付く浮気
趣味一つ休む淋しさ老いに酷
年たてば昔の物はクズとなり
エプロンを夫に貸したバースデー
おっぱこの恩師の席が埋まらない
着ぶくれたコタツ生活有難や
プロポーズされた話は秘めておく

川柳クラブわたの花 片上 英一報

木偶の眉動いて春が動きだす
眉一つ動かず笑うあじけなさ
眉のない顔を想像できますか
眉に霜 作務衣の僧の竹ぼうき
風邪声の電話へ母は眉をよせ
眉を書き釣り合い取れた顔になる
眉一つ動かぬヨガへ汗をかき

ひかり あきら マサエ 吟 笑 放 任 小 なみ子 文 仙 ちカエ いさむ 正 雪 マツエ ふ み 治 延 くに子 かおり 迷 貫 白 柳 子

シマ子 晩子 千枝子 春子 幸 枝 トシエ 明子

一人暮らし眉をひそめる事もなく
眉睡の話なかなか面白い

柳眉さか立たて顔だがたまらない

白内障直してあの世近く見え

成績表見て眼をつぶる母の顔

細川の流れあやつる影の人

もう一月も桜花らんまん駅のピラ

横向いてそしらぬ顔の阿弥陀さま

借りた傘を切つてすぐに干す

同居してほんのすこしをささへ合

死のふちをさまよい我欲消えてゆく

幸せを鬼にも少しお裾分け

改革のボタンなかなか作動せず

ボタンひとつはずすとしやべりやすくなり

初孫の名付けに祖父の生き字引

再就職ブライド捨てている名刺

リバイバル歌手の名前が出てこない

口座名妻と私が入れ替る

花曇り花には早い昼の酒

川柳後案吟社

従野 健一報

蟹の泡言いたいことがたんとある

自問して答えの出ない旅つづく

面白い話はA面だけの事

春を待つ畑の肥料も値上げされ

リストラが中晩年を切り捨てる

合格がわが家に春を連れて来る

あとひと押しどつして出来ぬ影法師

限りなく素顔になつてゆく余生

道子

剛治

英一

友甫

雅恵

龍

泰成

弘直

花子

正子

ミツ子

しのぶ

一風

初子

ますみ

君江

美津留

鬼遊

草風

拓治

美智子

博友

哲郎

秋月

道博

酒量減り鉢も縮み戦友会
濃い化粧老いて女を捨て切れず

臆病なねずみの声が高過ぎる

役者がそろいシナリオのない悲劇

首ほどに軽きものなし不況風

良い予感ありそう扉そつと開け

戦友が眠る谷間に辛夷咲く

日向ぼつこ観葉植物も私も

幸せの番はきつと明日だろう

二次会の帰りに丸い月に逢う

目立たない石で一生涯とする

鬼平のテレビに父の指定席

川柳東大阪

森下

愛論報

氷のうを干して母の目が赤い

落ち椿いてた氷の上で哭く

母さんが最後の最後見て回り

遠回り梅が見頃と聞いたら

まな板コツコツ妻の一日回り出す

細々と生きて自慢の調理台

清貧が自慢で子等に見捨てられ

自慢した手前後へは退けぬ羽目

花自慢素直に聞いて貰う苗

円満の秘訣 倅の嫁自慢

ほんやりとした里なまりローカル線

ほんやりとテレビ見ている休肝日

ほんやりはお互い様でいい夫婦

ローカル線ほんやり西陽浴びて旅

青い目の鬼が英語で攻めて来る

柳五郎

青銅

正秀

桃風

吉則

佐加恵

金吾

邦季

幸子

健一

鮫虎狼

照路

孤舟

真柳

柳安子

恒明

信治

文子

信博

庸佑

勝美

太一

隆

春男

恭昌

愛論

不況風手持ちぶさたと鬼が泣く
無理をした鬼が過労死してしまふ

晩年は一氣に枯れる鬼だろう

岩美川柳会

羽津川公乃報

人情にもろく出たが内緒がね

内緒だと話した事を人に聞き

内緒金留守に数えて生きている

嵐呼びそつて内緒は伏せておく

それぞれが内緒で捨てたゴミの山

空き腹に内緒の酒が顔に出る

木枯らしが吹いて内緒も守られる

内緒にはもつとしておれぬ岩田帯

信じ合う二人に内緒通じない

夫に内緒満期の証書持っている

佳句地十選 (5月号から)

田 辺 灸

六

風下に立つて世間を嘆き分ける

お薬を変えてみましょ試験台

肩の荷を卒業式に置いてくる

その中にさばるのいる蛸の足

一番に月が認めてくれた仲

本物の愛を築いて行く老後

どう懺悔しても白紙に戻れない

コップ酒あふれる程に注ぐ屋台

今に見ろ晩成型と言う構え

ちよつとだけ後ろ向いてあげましょ

頂留子

文秋

湖風

照女

希久代

美代子

忠良

芳江

孝男

正恵

美恵子

嘉津江

睦子

求芽

直次

雅子

しげお

吐来

和子

楓楽

東雲

美智子

美代子

春一番内緒話をみな話す

内緒だがチョコを上げたい人が居る

内緒話がひとり歩きをして困る

内緒して困った独活が芽を出した

若返る菜内緒で吞んで見る

外米を内緒で混ぜて食べさせる

鶯と母の内緒を聞いちゃった

溝口川柳会

小西 雄々報

酒一合睡眠薬に飲んでいる

オブラートへ包む薬が喉こさぬ

胃薬を飲んで課長の愚痴を聞き

薬より注射が好きなお医者様

薬漬け高価な漢方だけは効き

神仏と薬ささえに生きている

薬より自然に癒える日を待とう

農薬の怖さ知ってる虫の精

飽食へ胃薬いつも持ち歩く

岸和田川柳会

田中 文時報

同室のよしみ他人の域を越え

内輪もめおとなりさんにみな知られ

他人井何ともうまい名付親

遠回りしても赤提灯くぐる

大らかで提灯持ちを頼まれる

赤提灯風にゆらゆら僕を呼ぶ

年金で小さな提灯ともして

提灯の明かりで飲み屋のツケを読み

赤提灯猪口に話題を乗せる米

大漁

公乃

きみ子

喜与志

単車

はるお

螢

久子

康女

静江

弘子

正光

豊枝

鈴枝

智恵子

雄々

年金の枠で月並み収支表

月並みな言葉で賞める披露宴

月並みな暮して今日は茶漬食べ

月並みな顔も演技で受けている

月並みな言葉しか出ぬ癌見舞

叱られて嫌々ながらする手入れ

時効でも神の手入れはきつと有る

手入れ行き届いて京の尼の寺

同居して嫁の料理で若がえる

同居して財布と食事別居する

三世代同居で守っている老舗

愛想ない同居人だが続いている

違和感に気付き同居を辞退する

お互いのなやみ分かつている同居

川柳高知

川竹

初孫の誕生知らずエアメール

破られた愛の便りを握りしめ

幸せになつていきますと風便り

約束を手帳の中へ置き忘れ

約束を孫が覚えていた不覚

蓄えがあると思つていたおコメ

米ビツの底がこれほど浅いとは

米の量だんだん増えて回復期

お疲れの様子車窓の高軒

主婦となる刻エプロンの蝶結び

一筋を通した父の丸い背な

舞台裏知つて感動せぬ挙式

洋

京

けい子

甚一

天笑

朝一

一斉

通彦

萬的

昭二

鹿太郎

ひで

ダン吉

二南

狸村

松風報

菊野

幸泉

千恵子

さき

幸風

佳風

功風

圭風

さち

春枝

竹萌

孝雄

往復切符子の優しさを抱いて発つ

難聴の母へ便りを書いている

川柳ささやま社

酒井 靖子報

介護する嫁へ素直になつてゆく

悲しみを山ほど積んだ流し難

春つららあなたもわたしも隙ばかり

公園のベンチにストレス置いて来る

あの言葉心の隅に抱きつづけ

戸の軋む敷居も温いわが住家

好きという字が運命の右左

どん底を語らぬ父の背なが好き

家柄が何さやっぱり好きな人

この胸に好きの一言ある弱み

いい方へ転んで仲よう親子住み

距離置いて住んでいるから掌が温い

好きですとはつきり言える若さだな

小吉でよし幸せの湯があふれ

好きと書く紙が白くて気恥ずかし

三幸川柳教室

三宅 保州報

ご無事かい決まり文句でくる電話

ダイヤモンドヘッド任地も無事らしい

馬鹿なこと言い合い無事を確かめる

無事生まれ贅沢を言う目鼻立ち

恙無く役を果たした軽い靴

何人の無事を願つた百度石

どちらへもまあまあまと顔を立て

三本の矢で越えて来た不況風

千鳥

松風

純子

とよ子

恵美

ふゆ子

つや子

素水

貞子

とみ子

市三

八重子

ヒサ子

和子

富美

可住

靖子

道子

茜子

靖子

町子

みね

和子

章子

孝子

読み浅い猿はぼろりと本音出す
 弁護士に預けた遺書にある本音
 やすやすと本音は吐かぬ巳の女
 人間のはかは本音で生きている
 本音にも嘘の鎧を着せている
 峰打ちの本音知らずに来た迂闊
 通帳が秘かに本音知っている
 金のある方へ転んでゆく本音
 もう愛が芽生えています幼稚園
 欠いた芽へすまぬ済まぬと詫びてやり
 芽が吹いて花の正体読めてくる
 いつか出るきつと出て来る大器の芽
 歩み寄り拒んでチャンス逃げてゆく
 逃げるのを止めて男の顔になる
 業を負う女に逃げる場所がない
 逃げ場などいらぬ轍の跡がある
 追う人も逃げてくれよと折つてる
 父さんの鬼 赤提灯へ逃げてゆく
 頂点の孤独逃げてなくなつてくる
 話すたび逃けた魚の寸が伸び
 逃げるよりひる寝選んだ籠の鳥

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

かなめ 三千子 恵美 親路 武春 由梨 信子 百合子 保州 桂香 千秀 よし子 恵子 公子 高夫 初子 美寿子 美智子 当代 信子 正雄 寿子 鉄治 笑 三男 佐代子 裕美

白魚の指に約束光つてる
 やりくりで満腹させる温い膳
 本棚の本に満腹して眠る
 満腹になったか毬が弾み出す
 正論を守り通している孤独
 身を守る笑顔の奥に刺がある
 飼い主を守つて拍手かっさう
 夫近つて子等のやさしい傘の下
 嫁ぐ荷へ一つ持たせた守り札
 守られて今日も不足のない暮らし
 身を守る術を知つて猫の爪
 只守る生家に凜と鬼瓦
 守り疲れて城に男が居なくなる
 終章の幕引く時は晴だらう
 煙幕を張つて急場を凌がせる
 旅を食べ風情味わう幕の内
 幕切れはハッピーエンドとはゆかぬ
 他人様は内輪の幕を開けたがる
 出る幕でないかと夫を引つ込める
 赤裸々に生きてスツキリ幕を引く
 また元の二人になつて幕が開き
 人生的一幕ごとく踏む大地
 終幕の夢と希望は花吹雪

川柳塔唐津支部 久保 正剣報

さち子 高夫 英子 和子 保州 正博 章子 千寿子 輝子 君枝 三枝子 紀美女 栄美子 柳宏子 二南 吞天 武春 豊太 忠雄 めぐみ 翠子 綾子 克子 ちよ ふさ子 喜久亭 青琴

医者通い待合室は社交場
 のんびりの老妻鍋をよく焦し
 イデオロギー変りしせぬが右を向き
 年輪を重ねて父の丸い膝
 月天心眼しぬ街の伽をする
 水島は眠れや城下松浦濁
 政変へ丸腰だからよくしなう
 行く先で好い友に遭う将棋盤
 城跡に佇てば間道に鎧武者
 小鳴きに春もそこだよ腰伸ばし
 沿道に咲いて菜の花春を呼ぶ
 三代も我が家に続く婿養子
 唐津くんち腹の虫まではしやいだす
 アイアムソーリ疑惑の風に散る桜

南大阪川柳会 金井 文秋報

治幸 紀一 義美 久仁於 晴子 四郎 虹汀 旭恒 幸夫 高明 朴竜 正剣 信治 楓楽 庸佑 寿美 英一 重人 恒明 志華子 秋子 東雲 萬的 柳宏子 智子

シュールベルト花にお水をやするように
張りのある呼名嬉しいフルネーム
お神楽の祈り気高い紅椿
無理ないことだまって自分責めておく
気高さが冷たい人にされている
日の丸を気高きものと見る右翼
榮養のバランス嫁が狂わせる
リストラにやつと脱サラ決めました
裾野から見る富士山の気高さよ
引越が転機で自転車習い出す
転機さあればボンコツ動き出す
子を責める言葉吞み込む喉仏
転機かも二人に戻る設計図
あの意見転機に僕の今日がある
榮養に過不足があり娘の食事
榮養のビタミン愛が不足気味

ほたる川柳同好会

井上

直次報

柳伸 柳美 勝太郎 憲太郎 頂留子 凡子 文秋 冬葉 直子 真砂 咲 三男 シメ子 トミ子 岩信 清水 文江

誓い破った口紅だけ美しい
友情の狭間で揺れる誓約書
友情を指で誓った若い頃
反古にした誓いの束が攻めてくる
明日からと誓う言葉に明日はなし
春萌えて誓う言葉もついういし
頂上への望み捨てず老いの意地
見合だが望みかなった老夫婦
望みから来てやつたのに浮気する
生き過ぎて妻は他人の顔をする
失恋で死ぬの生きるの若いこと
高いビル多くて仁徳園り果て
高層で誰にも会わぬ日が三日

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

喜美子 昭子 敵子 保子 洋子 紫水 吉太郎 正安 しずえ 明光 博史 馬洗 幸子

はめ言葉バネに弾んだ児の進歩
ボタン一つ掛け間違えた日のけんか
妻の歩に合わずと世間よく見える
けんかして知った相手の泣き所
けんかして妻が背中をかがいている
合格が決まれば後は親がかり
合格の峠を越えて一休み
足踏みも走りもせずには我が歩み
徒歩五分信じたチラシ恨みます
合格を声のはずみで聞きわけ
お互いに半歩譲って家族の和
過去となる今日の一步を強く踏む
痴話喧嘩犬も尻尾を巻いている
ケンカして別れた彼女に後を追
不合格みんな私のせいじゃない
攻める歩の一手これもかこれでもか

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

綾子 春子 アサ 悦男 愛子 千鶴子 英子 重徳 正義 正義 正子 保子 和子 精子 正直 忠雄 与呂志

雨垂れに錦を飾ること誓う
新婚の誓い嘘ではないけれど
天に誓ってやっぱり悪い事してた
指切りをしたことだけは覚えてる
良心が今日の誓いを果たす汗
神前に誓った愛のはずだった
寝たきりでいからもっと長生きを
誓約書無理を承知でサインさせ
誓われた神も迷惑してるだろ
生死を誓った戦友は雲に消ゆ
永遠の誓いも空し離婚率

薫風 眞郎 螢柳 純次 福次 直次 方郎 祥司 竹二 清史

蟻の穴つづいてからの後始末
一言に気分そこねた足の裏
出まかせが意外な方へ進み出し
出まかせに咲いてまわりを驚かせ
今朝もまた気分が良くてハイヒール
出まかせと判つていても騙される
火種持つ女から少し遠ざかる
結いたての髪に寝るのが惜しくなり
七人の前で出まかせ出てしま
七%の出まかせ風と共に去り
急かれてもそんな気分になれぬ

川柳岩出

小倉アサ報

神一郎

朝の空僕の体調握つてる
おだやかな心で見れば青い空
沈む日にエネルギーシユにもえる空
若者に五月の空が炎えている
燃えている新人じつと空を見る
ひっそりと咲いて威厳の山桜
花咲いて人は情けを取りもどし
花だより聞いてたように咲いて散り
一刷毛の雲が飛鳥を春にする
あの雲の彼方に亡母が住む浄土
寝転べば流れる雲に塔ゆれる

柳宏子 朝子 ますみ 夕花 美幸 たもつ 頂留子 祥一 弘直 春堂 勝美

嫉妬する私を笑う白い雲

異人館の雲は羊とたわむれる

ゆつたりと雲こそせと生きる僕

もう時効だからくわしく聞きたいの

グリコ事件時効本人だけが知る

天網恢恢居所知れた明日時効

お宮入り捜査はつづくちびた靴

いくたびの時効で描いた夫婦の絵

盲点の中心を撰る端末機

中心がとれていのかピサの塔

気配りをする中心で輪が堅い

中心にいるリーダーの物分かり

中心になる旦那様たよりない

何となく中心となる紅一点

バラが中心私はかすみ草でいい

中心に結納飾り美酒に酔う

川柳塔鹿野みか月

土橋

いとおしく勿忘草の種を播く

押し花の勿忘草の遠い過去

純情な勿忘草で濡れている

年老いて勿忘草が好きになり

勿忘草に幼い恋を誓わせる

想い出は淡き恋よ勿忘草

堂々と音痴がお経上げている

ふる里でわたし見ている母の石

金かけぬ星占いがよく当り

合格の夢を机に山と盛る

転んでも起こさぬ孫へ愛の鞭

一風
元紀

洋

和子

かつみ

春子

隆

年人

泰

信博

欣之

柳伸

東雲

三男

シマ子

美津留

蟹報

富久江

みさ子

信江

汲香

みさ江

節子

喜与志

明美

孝男

野草

弘子

星一つもらって人殺しを習う
名も知らぬ人に呼ばれてはつとする
名水で育つ蛙もまた蛙

名の由来聞いて見直す花に出る

遺品から違うネームの服が出る

神頼み名前はしかと申し上げ

法螺吹いて回る名人にもなれず

負け犬に頼んで捨てた名を捜す

いい名前だ校長さんに褒められた

自由になりたいブランコきつこく

丸まるとおれに似たかい三毛の猫

鳥歌い花咲く丸い風が吹く

前向きは自由に動く腕二本

軸を巻くああ法要もすみました

母さんの舌に巻かれている父だ

糸車母の思ひ出巻き戻す

太巻きにおいしい味を巻いてます

寿司に巻く自給自足のコシヒカリ

入学式前夜の髪を巻いている

琥珀色の渦巻きに立つ仏さま

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

思いなししか山おどりだす立春に

山菜料理宿の女将も採りに出る

夕映えて雪の大山豪快だ

熊除けのラジオ忘れず山下る

無我夢中山の非情に気が付かぬ

母が住む山は青葉のあのあたり

雑学の雑木山から陽が昇る

隆風

菊乃

実満

かつ乃

睦子

くに子

はるお

盛桜

孔美子

三千代

八重子

きみ子

諷人

武子

芙美

富恵

智恵子

保子

石花菜

螢

ふみ

八重子

朗子

天雀

玲子

高代

瑞枝

山彦にあずけた亡父と亡母の声
山の氣をもらって今日も生きのびる

山彦は返らず狼煙上がりもせず

山が動いてゆつくり老後考える

甘く見た山にいつべ返しくう

山の山私も他人も変わるだろう

ふる里の山に甘えを積みすぎる

高い山登りたいけどのぼれない

山姥と言われてもいいここに住む

ふるさとを山を眺めてよく眠る

山の迷路で男は男らしくなる

私に登れぬ山が多すぎる

ふる里の山なら今も絵が描ける

跡継ぎがじつと眺める父の山

地図にない山が出てくるので怖い

はびきの市民川柳会

櫻本

吐來報

足早も春の歩幅で花棧敷

円満と勝手に決める近所の目

日向ぼし七人の敵既になく

ガードマン第二の人生父元氣

四捨五入すること多し六十路坂

うす色の服出してみる今朝の空

春雨も一つの傘によりそえば

雨上がり傘が荷物となる勝手

各駅停車乗って来たのは春の風

忙中閑アートの約束すぐ出来る

靴音で夫の帰り待つミコー

赤ちゃんを見せに帰って来るそう

富美子

寿々子

花子

てい子

亜弥

晶子

春枝

夕子

蘭

ゆき

日枝子

恵子

荒介

保子

千代

りつえ

かつみ

昇

繁男

吐來

ひろ子

シマ子

夏秋

悦子

敏

厚子

智子

一言を貰つて弾む帰り道

神の死角で事件が絶え間なく起きる

美しく老いた辞典さがして

暗がりですりッパ探す足の先

十べんも探した箱に入つてた

喧嘩した夫婦が探す非常口

リウツク背に民話探しの旅に出る

お多福に似合う帽子を探してる

キャンセルをする気で顔を立てておく

六感を信じキャンセルした切符

おしゃべりな雨より無口な雪が好き

出稼ぎを家族で送る今朝の雪

大阪に雪が積もった社会面

雪積もり我が家が少しましに見え

北国の苦勞も知らず雪見酒

赤二つ残して消えた雪兎

雪まつり壊すに惜しい雪の城

京都塔の会

松川

杜的報

点々の車窓のあかりローカル線

点滴の落ちるリズムに妥協する

点々と釣舟が浮く春の海

点々とシミが出来てもまだ元氣

單身赴任暮しのシミが点々と

菜の花畑の淡いちづけ忘れな

敬老証片手に野菜提げて降り

言葉まずしく胃袋は吹き晒し

外米も同じように吹きこぼれ

絢子

美代子

敦子

一壺

扶美代

キミ子

たけし

志洋

みつこ

晋

昭子

泰子

聡

重人

辰子

和風

るり子

利武

栄

百合子

紫香

一閑

求芽

礫

豊次

薫

白溪子

ピッコロを吹く少年と空の蒼

届かない男の笛を吹きつづけ

菜の花の向う極楽かも知れぬ

等分に愛を夫にもベットにも

等分に減つてはくれぬ靴の底

苦と楽を等分にして仲がよい

夫婦箸苦勞の味を分かち合う

二人だけ夜は白菜でも炊こ

また法螺を吹いているなど真に受けず

法曲げぬ巡査の笛が呼んでいる

山頂の風がお疲れさんと吹く

ホラ吹いた時か宙に浮いた足

親不孝しても遺産は等分に

淋しさと背中合わせの気楽な夜

バブ入れて一人住いの湯があふれ

午後の陽へテレフォンカードよく喋る

男から女を引くと零になる

福祉税消えて大臣軽く見え

赤富士に会いたくて旅おわらない

点々と泪の跡が友の遺書

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

口笛を吹いて男のむ涙

朝帰り夫に投げた塩がない

賽銭箱のぞいて見たい好奇心

助手席にスラリと伸びた脚を乗せ

里人はやさし乗れよと車とめ

あの鳥も揺れる小枝に愛残し

横波をうけて沈んだ僕の夢

正坊

真柳

杜的

芳子

萬的

風云児

福女

庸佑

宗悟

飛鳥

ただし

倫子

てる

笑女

達子

年代

武庫坊

水客

圭坊

ゆるがない妻が頼りで春のどか

リハールゆれてはならぬ本番だ

卒業へ横一列のうつくしき

横にいただけで安らぐ母という

人気がない所で花見車椅子

吹きつけたカラーリンスで若返る

吹きだまり風にのれぬか舞い戻る

打吹川柳会

奥谷

あそばんと味のある句が出来んと言っ

上得意押売無下に断われず

中立と言っていないが敵に塩

城という心安さに手足伸び

怒って笑って議事堂の猿芝居

怒るのは正義の発露かもしれぬ

子を育てボロボロになる母の城

花時計の針は怒りを知りません

札束にもろい女の城が落ち

お城からのろしが上がるまで待とう

陽光にうとうとしくなる窓辺

子沢山彩鮮やかに風にゆれ

カラフルに姑の城を嫁が変え

炎える眼で男は明日の夢を追う

年金が子測はるかに下まわり

城中の意見揃わぬ永田町

年金でどうにか城を支え合う

母さんが怒ると眉ががりあがる

怒ったら待つてましたと出ていった

螢

正晴

暁子

豊子

光子

シマ子

能子

あずき

弘朗報

信子

善政

松盛

寿満子

小生

八太郎

喬水

仙岳

佳女

喜与志

ひさ子

野草

早苗

獭杓

柳風

妻子

雄々

幸子

節子

庶民にははるかに遠い億の金
怒ったあかんと医者に言われとる
陽光が足りなくて今米不足
父さんが城と決めてる風呂の中
内堀も石垣もない母の城
理想とははるかに遠い人と添い
陽光だ僕を丸あらいにしよつ
節約とケチの違いを教えられ

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

新社員一際高い靴の音
吟行の花莖産暫しペンの音
菜の花が咲いて開幕する通路
開幕を待ってたように鳩が飛ぶ
新記録出るたび拍手開幕戦
開幕のテープ顔役切りたがり
米櫃を満たして主婦のもつゆとり
カリフォルニアフレンドなんて言えぬ祖母
趣味一つ第二の人生幕が開く

川柳塔みちのく

小寺 花叢報

行間に小さな鼓動埋めてある
焼けぼっくいが仲よく食べる冷奴
にこり酒飲めば古傷うずき出す
開発の山すきずきと痛む土
ペテン師は焦げた臭いを嗅いでくる
姿見から焦げる匂の帯を締め
円満な石になるまで擦れあう
温厚な人でしたねと通夜の席

博 丈
碧 水
勝 見
玲 子
よしえ
御 前
とみお
弘 朗

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

リュック背に鈴もはしやぐ日曜日
古希過ぎて日曜ばかり日向ボコ
鬼の面外す日曜参観日
教会に好きな娘が来る日曜日
揚げ底の土産にくれた干し蝶
コシヒカリ人気呼んでる長い列
札束の人氣政治が揺れ動く
人氣者陰でささえた妻がいる
鯉のぼり揚げて人氣の孫を抱く
人氣校に入れなくても可愛い子
小波の一つ一つに陽が光る
そよ風にハミングのせて孫がくる
木蓮が咲き尼寺を春にする
カップの底に女は咎を流しこむ
ワンカップ転がし地下の隅で寝る

川柳塔とつとり

武田 帆雀報

現代っ子口から先に生れてる
現代っ子宇宙ツアーを夢に見る
野球やめサッカードに凝る現代っ子

井 蛙
黙 人
千加子
和香子
隆 樹
一 花
花 峯

い わ お
末貞一
歌 子
薫
六 浦
向 西
正 治
昌 子
十四郎
弘 治
ま さ
修 水
鹿 太
澄 子
紫 香

現代っ子日月火水壘へゆき
現代っ子らしくはつきり主張する
団塊の世に幅きかせる現代っ子
現代っ子伊達達の薄着で風邪を引く
テレビゲーム止めて少年壘へゆく
一本氣社長と喧嘩首となる
父と子も一本氣からよくもめる
一本氣風の強さは受けて立つ
一本氣逆転の夢捨て切れず
一本氣ときどき神に叱られる
一本氣古いのれんに染みている
刺抜けばバラから消える一本氣
鮮やかに葉が決まった一本氣
ふるさとではのぼのの思ひやりの顔
はのぼのと患者同士の思ひやり
はのぼのと誘うムードの縄のれん
はのぼの思ひ在りし日の好敵手
目が覚めてはのぼの今日もいい気分
はのぼのと大人の恋をあたためる
新家庭はのぼの匂う台所
躓いた石にはのぼのする温み

川柳塔まっえ吟社

恒松 町紅報

肌合いに惚れて一人娘嫁に出す
若くない肌丁寧に磨いてる
肌脱いでこの身ひとつの置きどころ
ひと肌を脱いだ男の責任感
肌寒い話が続く冬の街
大木の肌は静かに語り出す

静 生
孝 男
新 風
輪 多朗
由多香
揚 芝
余志身
一 京
山 人
千 秋
艶 子
帆 枝子
帆 雀
孝 由
喬 水
崇
俊 路
友 夫
圭一郎
一 枝
螢

米 子
静 江
螢
房 子
満 江
知恵子

アルバムで変色してる淡い恋
そこまでの春に逆らう淡い雪

口笛に郷愁淡い恋だった

淡い愛あなたになつく鶴を折る

淡紅色にうつかりと気を許す

平凡な顔が魅力という女房

魅力まだ強いロープとして残す

外見で分らぬ魅力そなえてる

赤い灯の魅力に負けた男達

魅力まだ残したままの花魁

昇る陽より沈む夕陽にある魅力

折詰をついて愚痴を言っている

折詰を開くとポケットベルが鳴る

折詰に外国米も同居する

折詰の中取りどりの春の彩

折詰に冷凍えびを飾り立て

折詰の残りで幹事吞み直し

落日へ悔いを残した今日の無駄

無駄足を踏んで人生面白い

無駄話女の博学習で上げ

無駄金が馬券となつて舞い上がる

無駄な事承知でしているお節介

無駄のない几帳面さにくたびれる

城北川柳会

吐田

公一報

陽だまりで太公望はのびやかに
紋切りの祝詞続いて欠伸噛み
下手な絵も色付け次第よみがえる

行子 秀夫 久留美

アキエ

清志

早苗

清子

雄々

太泡

茂美

たつみ

邦代

妻子

長吉

寿美子

桂丸

桂子

畔

みえ

静恵

鳳笙

義良

多賀子

芳枝

友子

長三

町紅

叮紅

祝詞では言えぬ願いを絵馬に吊る

熱燭に日毎のうさを忘れさす

落ちこぼれの靴光つて春の日に

太陽は皆平等に暖かい

残雪が時に牙剥き親不幸

幼な日の子の童話は靴が鳴る

ふりむけば心残りが手をふられ

のびやかな足は世界を目指してる

のびやかな中流意識へ空つ風

あなたから貰う酸素で生きてます

さびし父敬遠した身に残る悔い

お難さまピンクの靴を履かせたい

靖国の神へ祝詞の鎮魂歌

畏みかしこみ虫のよいこと申し上げ

春ですぬ噂も一人歩きする

真つ白い心で祝詞読み直す

面影は年をとらない亡父の忌

父の打つ釘は急所を衝いている

決心をつけて踵は返さない

川柳大阪

川端

一步報

一歩ずつ自分の足で五十年

川柳で酒にありつけ千鳥足

通勤で鍛えた足が歩幅決め

囲碁盤の主役映える名脇星

定年の父に家族の金メダル

一度だけチャンスをくれと神だのみ

恵まれたチャンスに少し金が要る

さあチャンスまずは老眼鏡を拭く

史風

八重

静子

ふみ

政子

登美子

頂留子

典子

ただし

昭子

あい子

トヨ子

倫子

満津子

達子

柳影

一枝

白峰

公一

チャンスには滅法強い友に賭け

泥舟にチャンスとばかり乗っている

山葵効く父のかみなり思い出す

無位無冠金で買えない趣味一つ

貫禄は一駒動くだけの金

金づるはないが友達なら多い

迷子札出歩く父にそとつつけ

泣く迷子慰める子も共に泣き

迷子には届いて来ない母の声

色違つりボンが一人バスツアー

迷子にはなるまいステキな友がいる

孫の目が輝く迷子の犬抱いて

祭笛迷子の親を責めている

かけめぐる足技すごいJリーガー

体形は二の次 愛で結ばれる

体形に鏡も溜息洩らしてる

ビール腹なるのに元手かかてる

体形が仁王に似てた最盛期

もつといいチャンスがあった妻の愚痴

ソクラテスに似た体形のお人好し

花誘う友あり心の情を知る

花誘うさん迷子と同じ目の高さ

いずも川柳会

園山多賀子報

花言葉とても綺麗に誘われる

凡夫たち誘って奈良の仏たち

誘われて春の帽子を買ひ替える

誘惑にのって揺らいだ過去もある

夕闇の匂が誘う好きな虫

柳弘

敏

青道

鉄心

比呂志

金太

河南子

亮太

笑風

本蔭棒

まつお

しげお

重人

醉照

司

末坊

川童

美津留

希久志

恵美子

与呂志

一步

青湖

鳳笙

昭二

篤子

まこと

お互いが悪友となる誘い水
 小さな泡消して昔を話し出す
 石けんの泡と仲よくする日課
 泡の底からよじ登る再生紙
 泡立ちが決め手になったお茶の席
 煩惱へ百万陀羅の回し数珠
 万札も数え夫婦の旅仕度
 告白の出来ぬ未知数だつてある
 握手する中に見えない敵の数
 妻だけは味方の数に入れておく
 数に弱い男みんなに好かれてる
 遮断機が一つの隅にある
 喜びも孫の数だけ茶の話題
 肩書が少し不足な脳細胞
 不足など言えて平和な国に住む
 不足なく暮れて楽しい夕ごはん
 不足でも戦時僥へば耐えられる
 不足など二人は愛で埋めてます
 飽食の日本を叱る米不足
 贅沢な不足が言えて平和呆け
 水面下計画成つて浮上する
 計画はあなたまかせについていく
 計画は小刻み老いの里程表
 百姓の計画自然と手をつなぎ
 計画が陽の目を見ないまま眠る

富 柳 会

池

森子報

秀子 秀子 秀子 秀子 秀子 秀子 秀子 秀子 秀子 秀子
 れいじ 明朗 明朗 明朗 明朗 明朗 明朗 明朗 明朗 明朗
 主詩朗 明子 祥庵 房子 多賀子 芳枝 寿美 律子 佳子 満江 正朗 芳子 清子 蘭水 ちかし 昌枝 きみえ 草丘 ちえ しま子 水煙

夫婦やさかい償いなんどやめとこや
 マスコミは直ぐ大騒ぎする針の穴
 刺りたての頭がつづく京の朝
 まだ青いお尻の孫に夢を見る
 捨て切れぬ恋もほどほど鼻毛ぬく
 尽くてもまだまだ尽くす母無償
 針箱の針の仲間も失業中
 針千本飲む約束で悩んでる
 老眼で針はさびしく錆びている
 忍の字が越える男の針の山
 ピカドンで無辜を殺した償いは
 針小棒大あらぬ噂に迷惑す
 針の穴覗けば向う広いこと
 ほどほどの彩で仕上がる終の絵図
 ほどほどと言うほどほどがむつかしい
 ひとつと疲れてほどほどになる歩幅
 一族の輪でほどほどに父の唄
 六法全書ほどほどの文字撰つている
 両手ひろげて青空に旅立つ
 ほどほどの線に私をおいてある
 琴線を揺すって青い海になる

堺川柳会

河内

月子報

宗一 恒雄 悦子 敦子 昭子 花子 昭水 トシェ 和樹 智久 絹子 文次 美代子 欣之 維久子 花梢 森子 博子 与呂志 寿美 晋 文時 勇太

幸せを書く鉛筆が折れやすい
 黒揚羽ひらりいきさつはぐらかす
 鉛筆で書くとき信じて貰えない
 知らぬ芽が顔を出している庭の隅
 鉛筆でカラの頭を掻いている
 成せば成る芽の出ることをうたがわず
 注文取りかねる娘が居てさくら咲く
 いきさつが分かり苦虫かみつぶす
 ややこしい時にこのこ来た忌中
 鉛筆を耳にはさんだ職人で
 ねばるだけねばつた後に悔いはなし
 立て掛けたほづきが聞いている話
 鉛筆を削る手先を笑っている
 着順を赤鉛筆が決めている
 リストラのいきさつ絡む春の乱
 鉛筆も合格祈願させられる
 ちよつびりの殺意エンピツ尖らせる
 わたしには実に素直な鉛筆だ
 友と手をつないで粘り強くなる
 ねばつて今だに借金返さない
 斜線引く赤エンピツにある悲哀
 自分史の傷鉛筆が滑らない
 三人に説明されてよく迷い
 ねばつても母は賛成してくれぬ

翠 洋 会

渡部さと美報

志華子 真砂 光子 寿恵子 美代子 昭子 紀美女 しげお 頂留子 金三郎 二南 福一 勝晴 春蘭 美子 狸村 彰 摩耶 菜々 小雪 文 かりん 東雲 千万子 一三三 天笑 月子

短冊が風にゆられて花を賞め
 変りばえしないよ妻の美容院
 潮の変り目やりたいことはやってみる
 湯けむりに匂いたつ叔母まだ独り
 冷やかな絹に触れます初夏の味
 スカーフをそっとかけた裸婦像に
 握らせる咄嗟のころ裸銭
 裸木も春の心はちゃんと知り
 流転星霜裸の般若が增え
 灰皿の裸婦四方から火攻めにす
 見栄すこし張って冠婚葬祭へ
 迷惑をかけまい世間に様をつけ
 無器用で世間の波に浮き沈み
 世間体気にもとめない二度の職
 世間には似た人がいる梅田駅
 改めて世間を知った老い一人
 世間からウチの噂も聞いてくる
 葉桜になって世間はもう忘れ
 応接に弾けぬピアノがデンとい
 初恋はピアノシモのまま終わる

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

東雲 鬼遊 宏子 ひろ子 綾子 登志子 さと美 宣司 佳秋 英一 正雄 絹子 久峰 正坊 照子 楓楽 希久子 叔子 みつ子 義子 道胤 香子 正坊 ルイ子 たず子 正とし

入学早々もうアルバイト捜してる
 ニュース告げる首相やっぱ人間か
 疲れたと素直に告げる嫁が好き
 真実を告げてその後の重い日々
 行先を告げず来たのは神の森
 すらすらと告白月の所為だろう
 夕ざくろ神のお告げがありそつな
 軽い罪犯して煙草吸い終る
 桜の下に座ると私軽くなる
 裸の身の軽さでさがす着地点
 初な恋軽くして置く塩胡椒
 謎かけの電話に軽い芝居する
 軽率に漏らした言葉風を呼ぶ
 人の死を軽い噂の中で聞く
 ひらひらと迷わず土にかえる花
 満開の桜へ思う事もなし
 総理辞任聞く外米をときながら
 空想を一杯咲かせてる花屋
 無理矢理に吞まされている花筵
 大切に生きて今年の桜見る
 茶を入れて遠慮の要らぬ愚痴を言
 旅から帰りにたこやきを買っておく
 吐きだしたい愚痴を蛇口で止めておく

川柳藤井寺

高田美代子報

萬的 春蘭 ひろ子 まさお 透太 澄子 いわゑ 太茂津 智子 トミエ 武庫坊 よし津 富喜子 房子 絹子 夜船 鹿太 キク子 白溪子 能子 諷云児 利武 美代子 晋 射月芳

ゆっくりと近づいてくる適齡期
 人生八十ゆっくり生きることにする
 往事渺茫ゆっくりまわす走馬灯
 ゆっくりと歩むで虫宿はある
 春の陽だまり亀になるのも悪くなし
 古い話をゆっくり許す春の川
 女ゆっくり思想の森で爪を塗る
 沢山のおめでとうが咲く弥生
 三才に抜けたと集まるオール3
 三味線が鳴ってる家と教えられ
 駆けつけの三杯飲んで遅刻詫び
 三晩目はお茶漬けにしたグルメ旅
 かしわ手をつ追加の欲もある
 三人目やつと風のむ鯉のぼり
 我が家ではにこりともせぬ三枚目
 釈迦の掌で三文オペラ演じてる
 三人も要らぬ二人で姦しい
 米争い地蔵はだまって見つめてる
 葛井寺力士織りが春を告げ
 追伸にコメ送ったと親心
 金婚式いろいろあったなあお前
 春の海ときどき青をおどらせる

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

敦子 悦子 一屯 三郎 和子 しのぶ 三夫 初枝 宗一 昭江 吸男 繁代 扶代 和樹 キミ子 志洋 六点 美房 恒雄 史郎 智久 淑子 一閑 恵美子 庸佑 しげお

まなつらの家路に柿の実熟れている
舊して家路だらだら坂となる

たんまには家路のコースかえてみる
不況風 父の家路を早くする

父の樹が少し空いた電話が見当らぬ
父の見えるところで幻を捨てる

我が子へは損を承知で投資する
損をした事は覚えてゐる鳥

顔で損してるが美声持っている
損をして得を取れない影法師

目刺し焼く匂に消えた沈丁花
肌を刺す風が冷たい下り坂

刺した蚊が血だらけになる平手打ち
正面を向いてくるなら刺されよう

弁解はすればするほどむなしくて
ケンカする相手のいない不倖せ

ラッキースェブン春の釣書に息が合う
醜いが我慢俺には過ぎた妻

アドレス帳な線を引く友が逝き
般若経となえてもする胸さわぎ

お世辞とは知りつつ舌に乗せられる
仏飯ぐらいはせめて内地米

倉吉川柳会

谷口

次男報

絵心を鉛筆に託し下絵書く
流行に負けず鉛筆愛される
鉛筆の芯がするどい入試の日
人間と鉛筆深いかかり合い

独歩 寿朗 碧子
(附) 康子

急用らしい鉛筆の走りがき

エンピツをなめなめ書いた母の文
鉛筆もテストの責めを負われる

鉛筆を削れぬ子供今ばかり
杭抜くと鉛筆形の杭である

鉛筆で句箋は書けと壁に貼る
鉛筆を削り揃えて初出社

部長より演歌は下手に歌うべし
演歌好きな牛が牛舎で目を細め

負けた日はボトルと演歌あればいい
演歌聞くとたに逢いたい人思ふ

味噌汁の中から産まれ出る演歌
病みつきの野菜ジュースを飲んでる凶康

札束の餌に高官操られ
余り餌海のさかなにまいてやる

豊中もくせい川柳会 (前月分) 田中正坊報

かたづけと案内広い僕の部屋
かたづけ魔ちらかし魔とて夫婦なり

かたづけけるなと乱雑な子供部屋
ぼつくり寺に医者か娘をかたづけ

お祈りを忘れてる陽気な豚
向き不向き他人の知った事じゃない

横向いて噂素通りさせている
振り向くとそこに女の肩パッド

バスガイド滑らか過ぎて客眠る
滑らかな言葉で誘う京女

滑らかに喋ると本当らしくなり

御前

石花菜

康志

サカエ

苦句

かつみ

和枝

秋女

よしえ

秀峰

柳風

雄々

日枝子

秋人

寿満湖

紫香

一笛

滑らかな顔にニギビのある若さ

手漉き和紙 古筆の跡も滑らかに
酔醒の胃に滑らかに筆の跡の水

ホワイトデーの財布が軽過ぎる
結果だけ見ての評価に血が噴く

春の宵そひてはかとなく沈丁花
幸せと母を漬す冬の夜

お彼岸が命日幸せなお母さん
お彼岸です電車に年寄り多いこと

じいちゃんばあちゃんに叱られる

豊中もくせい川柳会 田中正坊報

掛けられた謎が解けない曇り空
青空へ冬の絵みんなんんな焼く

焼きむすび母の言葉が残る味
焼き直した心を秘めた墨衣

焼け太りばかりが並ぶ火事の跡
燃えつきた女の顔がくもってる

仁丹の看板跡にビルが建つ
看板をおろしてから軽い春

めしただけある看板でよくはやり
いのち焼き尽くさんと枯野を走る

システムを動かす人が社長です
システムにかかわりはない寅次郎

渦潮も心の渦もはげし春
野に山に桜吹雪の中チーズ

曇天の桜の色にある重さ
裏切らぬ約束のある花の苗

いつもより遅い子を持つ豆ごはん

福一代

登代子

女

圭坊

悟郎

知香子

つえ子

杜的

萬的

正坊

ただし

しげお

武庫坊

悟郎

福一

森子

紫香

一笛

博史

正坊

本社 五月句会

五月六日(金)午後五時半

メンスファツションセンター

〆八十八夜の別れ霜と言われるとおり、季節外れの冷え込みの中、五月句会は九十三名の出席で定刻どおりに開かれた。

「おはなし」は阿萬萬的氏。八百号記念の関連行事も無事終り、川柳塔の先人たちを偲んでみよつという趣向。昭和三十四年五月に発刊された若本多久志氏編集による合同句集『親ごころ 子ごころ』に収められている数十句が紹介された。これには親子の心情を詠んだ句ばかり集められている。

やさしい言葉で表現されたそれらの句は、読み上げられるたびに聴く者の心に響いた。その作者は、ほとんどが鬼籍に入った人で、懐かしく思い出した出席者も多かった。

初出席は亀岡哲士さん(西宮市)玉置当代さん(和歌山市)小林一閑氏(高槻市)。

月間賞は平松かすみさん(寝屋川市)に輝く。

(司会—東雲)(受付—たず子・房子)

(記名—ダン吉・月子)(清記—楓楽)

席題「敷く」 河井庸佑選

れんげ畠 花を敷いてる春かすみ
河川敷 一面春のカーペット

ハンカチを敷いたやさしさ今はない
へそくりを敷いて寝てのおばあさん
幸せは妻に敷かれて母達者

一日を無事に過ぎた布団敷く
夕暮れ海へ線路が敷いてある
花ごさ敷いて五歳がママになる

父が敷くレールに欲をかけて見る
応接間 敷物ばかり見て詫げる
正直に生きるレールを敷くおやじ

敷かれてるようで敷いてる処世術
頂点に針のむしろが敷いてある
妥協するたびにお尻に敷かれてる

座布団を敷いてゆつくり愚痴を聞く
口髭の手前はあるが敷かれてる
自己主張 敷いたレールを走らない

背水の陣 敷いた二浪の窓あかり
敷石が揺れる法相口がすぎ
母さんがレールを敷いてばかりいる

寝押しするズボンを敷いた青春譜
れんげ菜の花 休耕田が飢えてる
敷布団 過保護なママが賢こすぎ

父の敷くレールで不況にもめげず
鉄道を敷いたが過疎の赤字線
草敷いて寝る贅沢な星が降る

父子二代の道敷いてある北の海

尻に敷く妻に今でも惚れている
敷きつめた札束の上寝てみたい

ハンカチを敷くただそれだけうれしくて
座ぶとん一枚敷けば私の世界なり

抜擢の椅子 針のむしろが敷いてある
太陽に愛をもらった布団敷く
花びらを敷いて見てよう今日の雲

下敷きになってあなたを光らせる
五感濡らす音符こころの中に敷く

人 定位置に老母の座布団ある安堵
後輩たちを敷いた背伸びを悔いている

地 子に孫に残すレールを敷いている
天 子に孫に残すレールを敷いている

軸 レール敷く噂がひとり歩きする
兼題「洗い」 田中 薫選

忘れ得ぬ洗いせりふの笠智衆
洗いお茶もつ見抜かれている計りごと

ネクタイが洗い年上の女かも知れぬ
ネクタイの洗さは妻の好みです

洗い顔して呼鈴を押さないで
一里塚 洗い顔して立っている

げてものへ洗々箸が寄って行く
こだわりがあつて返事を言い洗る

笛生

雅文

武庫坊

希久子

たず子

太茂津

菅生

庸佑

天弘

美代子

正子

文子

螢

花梢

花梢

雅文

雅文

雅文

雅文

雅文

雅文

雅文

強打者が深いヒットに苦笑する
脇役の淡さがドラマ引立てる

五十年 愛の線の深い色
森繁の知床旅情なら聞こう

椅子取りも上手で深い身のこなし
淡皮が一枚むけて恋終わる

淡皮がむけたら治る五月病
受信料一度も払ったことがない

二枚目と言われて深い背広着る
それから男もお茶も淡好み

淡い誰か笑うていようと
淡い顔 言いたいことがあるらしい

先生と呼ばれて深い顔をする
大ジョッキ淡い話はなしにする

脇役の深い演技が物を言う
青リンゴ チョッピリ淡い恋に酔う

予期しない淡い返事が来たポスト
かあさんの魔法 淡柿甘くなる

淡味の効いた話と花はしなやかに
淡い茶に年寄り扱いをされた

淡いのが一人はなしの腰を折る
境界線で淡い男が甦る

コーヒはブラックスーツの似合う彼と
生いたちを話すと淡い顔になる

銭の音 淡淡ながら承知する
伎芸天 淡い男と立つ晩春

山こえて淡い男になってきた
淡抜けて鮎は金魚になりました

むかしむかし語れば淡いつるし柿

路 児

路 児

保 太

歌 子

朱 夏

三 男

風 雲

利 武

房 子

笛 生

道 胤

白 溪

い ち

美 津

風 雲

英 子

森 子

重 人

歌 子

寿 子

た 子

美 代

希 子

弥 生

天 笑

希 子

か 子

貧乏神と淡い話をしてあげる

五月の暗がり 一語を書き流る

兼題「戸 籍」 小池 しげお 選

一プラス一で戸籍は始まりぬ

籍抜いてからの女が若返り

子離れの戸籍抄本送ってくれ

子等みんな戸籍を持って出て行つた

本籍は道路 大阪生れ六代目

横文字で読める名前にする戸籍

戸籍上 光源氏は夫です

核家族 無縁仏になる戸籍

戸籍から一人が嫁ぐ虹の橋

戸籍から抜きたい妻が側にいる

偏見の筈 戸籍で立ち止まる

本当の顔が戸籍に書いてある

線二本引けば他人になる戸籍

戸籍には無い子に託する遺言書

戸籍抄本 妻という字が跳ねている

ご先祖は侍だった戸籍出る

格式にこだわりの持っている戸籍

わたしの知らない認知届を見たショック

何遍も戸籍汚してきた孤独

戸籍上の妻でなくてもいいのです

修羅越えて元の二人になる戸籍

りんごにもりんごの戸籍あって春

戸籍眺めると何処かで硝子が割れる

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

葉

次の世も同じ戸籍でいる二人
遺産分け戸籍通りと限らない

入籍を迫る女の岩田帯

目に見えぬ戸籍 愛憎伏せている

頼りない人だが戸籍筆頭者

新戸籍 戸主と載つて自覚の日

抹消の戸籍に深い訳があり

喘息がところどころにある戸籍

あの秘密 戸籍の中に生きている

戸籍簿本 自慢するほど野暮でない

終章も戸籍も白く汚すまい

膳本を眺めて絆確かめる

佳

戸籍簿にきつと余命がのつている

父母の座が揺れて戸籍の子に響く

美しい女性が戸籍簿をゆする

戸籍には美人かどうかわからない

もつと子を生めと叫んでいる戸籍

軸

戸籍にはないが何でもしてくれる

兼題「リング」

田中正坊選

一対一でリングの上の騙しあい

荒れた手に劣リング嵌めてやる

イヤリング穴まで開けることはない

イヤリング遠い記憶の中で揺れる

プロレスのリングの外が殺気立ち

思い出の多いリングを去る勇者

リングから下りるとパパの目に戻り

哲 夫

三 男

風 雲

澄 子

庸 佑

正 雄

金 太

楓 楽

友 照

太 茂

一 風

恭 昌

美 房

章 久

森 子

武 庫

度

し げ

お

螢

里 兆

満 津

子

岳 人

吸 江

利 武

か 子

か 子

か 子

か 子

か 子

か 子

か 子

猿多居リングサイドで見えています
イミテーションのリングが妻の宝物
リングより指ぬきの合う太い指
笑いこける女の指輪よく光る
リング燦然ノラになり切れない指に
愛憎をリングのなかに封じこめ
リングはめたあの一瞬のはてり顔
思い出がいっぱい詰めてあるリング
掌中の玉を奪いに来たリング
鏡台に形見の指輪置いてある
自己主張する大きめのイヤリング
イヤリング小耳にはさむいい話
嘘いくつ淋しく聞いたイヤリング
イエスノーまだ揺れているイヤリング
口よりも物を言ってるイヤリング
イヤリング別ればなしに揺れている
平凡に仕事をこなすイヤリング
イヤリング男の嘘を聞きわけける
イヤリング揺れる女の軽い嘘
火遊びの味を覚えたイヤリング
的になる予感 輪から抜けて出る
輪の中で是非主義に徹し切る
知恵の輪はとけたが謎はまだ残る
のびるからいたずらしくなるゴム輪

佳

安物の指輪あの頃若かった
人差し指のリングに春が来て止まる
俺はまだ馬鹿にしているタバコの輪
傷ついたリングとひとりの川渡る

鬼遊 三男 房の 萬的 楓楽 義子 章久 柳伸 寿美 正博 当代 稚代 勇太 庸佑 狸村 隆 紫香 志洋 萬的 風云児 花梢 ルイ子 路児 しげお 路児 森子 しげお たず子

いくさする女 大きなイヤリング
人 エンゲージリング里の母には見えてない
地 リングはずして一人の刻を朱に染める
天 マリッジリング外し輝くのは女
軸 一番ひまな指にはまつているリング
兼題「かなり」 河内天笑選
かなりあると見え銀行が借りに来る
橋渡し僕にはかなり荷が重い
かなり気になるこの頃妻の物忘れ
やっぱりね噂はかなり以前から
大阪のばちばち可成り儲けてる
かなり無理したな脱皮が早すぎる
あの話かなり酔ってたことにする
けちになりはったかなり儲けているようだ
回診でかなりの無理を指摘され
百円を積むに春闘かなりもめ
過労死を思ふかなりなスケジュール
初節句かなり無理したあとがある
かなり手間かかりましたと奥信所
大人しそつに見えてかなりのことを言う
雑魚の目にそれは大きないわしたち
社の都合かなりの損を隠してる
こつそりとかかなり進んでいた二人
小錦もつかなり疲れた足捌き

いわゑ 紫香 森子 楓楽 正坊 たもつ 豊太 花梢 美房 柳宏子 いわゑ 三男 二南 洞庵 鬼遊 みつ子 保州 洋 鬼遊 正雄 久峰 萬的

かなりの自信マイクかなかなはなさない
振り向けばかなりの距離を歩いてた
汗かくもかなり厳しいグイエット
釣書には無いがかなりののける口
若いのにかなり前からアデランス
珈琲にかなりうるさいお父さん
群雀 噂はかなり進んでる
手にとつてかなりの物と祖父は言う
かなり良い勝負するのに負け続き
かなり重症 見えているのはあなただけ
それはもう死ぬ思いです花粉症
すぐ踊るかなり淋しい鬼らしい
かなりいい線で挑発しはじめ
古い路地かなりしぶとい京の顔
かなりいい線を行つて棒グラフ
佳 かなり手を抜いたと見える壁のひび
手を染めていたのはかなり前らしい
かなり本読んだがあの世まだ知らぬ
無造作にかなりの壺が置いてある
ライバルもかなり刃こばれしているぞ
人 民法をかなり前から妻は読む
地 奥さんをはかなり自由にさせてはる
天 母さんはかなり悪党だと思つ
軸 気配りもかなり遊んでるらしい

武庫坊 金太 哲夫 吐来 諷云児 正坊 憲太郎 紫香 保州 歌子 英千子 紫香 一三 森子 文子 朱夏 寿美 雅文 英千子 天笑

葉選

里兆 たもつ 金太 女 笙生 しげお 友熙 友熙 螢 女 たもつ 利武 雅文 螢 ダン吉 良知 勝美 小路 朱夏 鬼遊 射月芳 文秋 路児 美津留 天笑 みつ子 柳宏子

正 菁
坊 風
い わ
ゑ ん

恭 昌
ダン吉
希久子

美代子 諷云児
しげお

愛
論

弥
生

かすみ

葉

川柳大賞

青森県・蟹田町

をゆする

るかぜのいろ

福岡県
杉本
森田

雑草の高さで風と向かい会う
 大賞・準賞以外の審査員特別賞は次のとおり。
 母の背に仏と想う風がある 青森県 菊池ふみお
 夢はるか少年が立つ風の丘 静岡県 飯尾こまき
 臍の緒を辿れば風のまちに出来る 青森県 西山 金一
 風ひとつやがてころの杖となり 埼玉県 川名 好之
 もくせい川柳会十周年川柳大会
 ― 合同句集発刊 ―
 とき 7月18日(月) 午後1時半開場
 ところ 豊中市立中央公民館集会场
 (阪急宝塚線、曽根駅から東南歩5分)
 おはなし 黒川 紫香氏
 課題と選者(各題2句)
 「リスト」 田中正坊選
 「豊か」 安藤 寿美子選
 「知る」 小出 智子選
 「十」 橘高 薫風選
 「窓」 岩井 三窓選
 「橋」 中尾 藻介選
 ◎午後2時半締切 投句拝辞
 会 費 1000円(合同句集記念品呈)
 主催 もくせい川柳会
 後援 川 柳 塔 社

柳 界 展 望

賞の一席に樺沢弘子、二席に岩松昌幸、三席に原田快流の各氏を決定した。最高得点句は次のとおり。

言い訳をすれば貧しい顔になる
原田 快流

★NHK学園川柳大会における大会大賞受賞作品から選ぶ平成5年度の文部大臣奨励賞に新畑ひろし氏(富山市)の次の句が選ばれた。

双六の上りで待っていた

情けにはとても脆い力こぶ
米田 幸子

〈同準賞〉

ひたすらに耐えて器が欠けてくる
西原 艶子

父帰る再び振り子うごきだす
江原とみお

★第17回鳥取県川柳大会が3月27日、米子市で開かれたが、特別優秀作品賞に

花の雨 老人というものになり
安江 弥恵

が選ばれ、本社同人の5氏が各題秀句に入選した。

ふる里の山が我慢をせよと言ふ
石谷美恵子

終章のノートはやさしさ

で溢れ 青戸 田鶴
先送りするには丁度よいあした 鈴木 公弘
み仏の笑顔にははの目の高さ 林 荒介

次の世の飯を心配して死ぬる 土橋はるお

★むらくも川柳会は4月12日、チェリヴァホールで創立45周年記念大会を開催した。当日の各題天位句は次のとおり。

桜守りの丹精 見事な花が咲き 小田川昭子

じゃが芋に秀吉の顔 家康の顔 但見石花菜

エプロンに話包んでもつてくる 吉岡きみえ

福の神さんだかあちゃんよく笑う 堀江 芳子

陽がいっぱい今ならかな艶を出す 景山嘉寿子

故郷の道をきれいに掃いておく 加藤 篤子

心から祝うひとりの誕生日 木村 大門

★川柳研究社は平成5年度川柳研究年度賞を決定、5月15日に開かれた本社大会で表彰した。

〈正賞〉
平和像あくまで遠き天を指す 荒巻 重義

〈準賞〉
タンポポの百の行方と百の運 梶原 勝雄

鉄餅胚のいたみは知らぬ風景画 小林 忠義

★汐風川柳社創立45周年記念・第40回愛媛川柳研究会は6月5日(日)午前10時から今治市中央公民館で開かれる。宿題は、箱・拾う・胃・妹・絵・渡す・頭・

一生、特別課題は、岩 各題2句。欠席投句拝辞。会費1000円(発表誌・昼食・記念品を含む)連絡先は今治市北宝来町3-1-26 和田宏。

★ふあうすと川柳社は第39回全国川柳作家年鑑の参加

作品を募集している。7句に参加費3000円を添えて規定用紙で6月30日締切。

★第30回雀郎まつり川柳大会は8月28日、宇都宮市で開催されるが、それに先立って全国誌上大会の作品を募集している。課題「花」(2句)、6月30日締切、

投句料千円、選者は山田良行氏ら10人選で、投句先は、〒320 宇都宮市桜3-2・川俣喜猿方の大会係宛。

▽芳志△
■松村迷観子氏ご遺族から供養として金一封、拝受いたしました。

■羽原静歩氏ご遺族から供養として金一封、拝受いたしました。

■天正千梢さん(本社理事奈良市)から亡夫供養として金一封、拝受しました。

■柿花紀美女さん(堺市)から受賞記念として金一封拝受いたしました。

また、同学園生涯学習賞に川柳部門では、本社理事で川柳塔鹿野みか月会長の土橋登氏、社会通信教育協会賞に田口薫さん(岐阜県)が受賞した。

★小樽川柳社は平成5年度の冬眠子賞に府柴野香京、同準賞に福井千鶴・東岡津多子の各氏を決定した。

身にまとう一枚きりの火の鱗 府柴野香京

★函館川柳社は第2回青柳

★川柳塔みちのくは、新たに年度賞を制定、平成5年度賞は岩淵黙人に決定、ブロンズ像を贈った。

★「川柳堺」300号記念川柳大会は5月1日、堺市総合福祉会館で開かれ、本社同人の次の各氏が秀句賞を受賞した。

拝啓と書くときが出てこない
西出 楓楽

足向けて寝ていまいせんと
いう御恩 寺田 甚一

折りたたみ式になつて
長い足 小出 智子

転移しないと医者にはき
つと言つ 新家 完司

地震にはもう慣れている
種を播く 田中 笑風

ポケットの中で拳となる
震え 稲葉 冬葉

階段の上から猫が呼んで
いる 木本 朱夏

三メートル以上は命綱が
要る 新家 完司

★第6回・時の川柳交歓川

柳大会は5月8日、神戸市立福祉センターで166名が参加して開かれたが、本社同人の小島蘭幸氏が朝日新聞社賞を獲得、次の2氏が秀句賞に輝いた。

人間の柵を霊柩車が見て
る 池 森子

優しくても狂う厳しくて
も狂う 小島 蘭幸

★第17回阪神文芸祭は7月17日午後1時から伊丹市立中央公民館で開かれ、入選

作品の発表・表彰があり、
「人生の楽しみ」と題する

文化講演が行われる。
▽出版△

■『現代川柳入門』（田口
麦彦著・飯塚書店刊・B6

判230頁・1800円）
川柳の本質から作句の技法

まで850句の作品を引用
して詳細に説明してあり、

出色の入門書。
■合同句集「城北川柳・第

五集」（城北川柳会創立30

周年記念句集・A5判92頁）
会員31名の自筆1句と作品
各14句などを収録。

■『大阪府文化芸術年鑑・
一九九四年版』（大阪文化

団体連合会編・A5判38
2頁・3900円）大阪に

おける文化の分野別動向・
大阪文化日誌・府下文化団

体名鑑を収録。「川柳」分
野では、磯野いさむ（番傘

川柳本社）田中正坊（川柳
塔社）三好康夫（文団連）

の3氏による座談会記事が
掲載されている。

■65周年記念同人句集「ふ
あつすと」（ふあつすと川

柳社刊・A5変型判382
頁・上製本・4000円）

新旧同人304名の各10句
を顔写真と住所を入れて掲

載、提供された色紙・短冊
も収録し、「偲び草」で物

故同人作品も納めている。
▽同人消息△

■高須賀金太氏（本社理事

岸和田市）は、3月末で37
年間勤めた大阪市交通局を
退職した。

また一人消える市電の生
き残り

■斉藤島氏は4月1日付で
青森県立三本木農業高校長

から同五所川原農林高校長
に転任した。五所川原市は

同氏の生れ育った地。
■西田柳宏子氏（本社副理

事長・大阪市）は「川柳春
秋」33号から同誌の「なん

でも相談欄」を担当。
■山本希久子さん（同人・

吹田市）は「川柳春秋」33
号の「わたしの川柳作法」

欄に「しんがりを走る」と
題して執筆している。

▽訃報▲
■松本一郎氏（前西宮北口

川柳会副会長・姫路市）4
月14日、脳梗塞のため死去

72歳であった。
■越智トヲヨさん（本社理

事越智一水氏の母堂）今治

市）4月27日死去、94歳。
▽住所変更△
■斉藤島氏（同人名簿P8

さ2行目）

▼訂正▲
■5月号P108（柳界展望）

尼崎いくしま川柳会の平成
5年度最優秀賞は田辺鹿太

優秀賞は児玉歌子・稲垣フ
クコ・山本すみの3氏の誤

りでした。
また、同月号表3の7月号

発表・課題吟「配る」の選
者名は、川竹松風でした。

以上、訂正し、お詫び申し
上げます。

▽お願い△
「柳界展望」の頁は、川柳

塔社を中心とする川柳界の
新聞です。みなさんの身辺

のニュースを編集部あてに
どしどしお知らせ下さい。

■各地句会だより

川柳藤井寺

笠原 吸江

わが「川柳藤井寺」は、昭和五十七年二月に発足しました。けれど、これをさかのぼること二年ほど以前から児島与呂志氏指導のもとに、藤井寺老人福祉センターで川柳講座が開かれており、着々と成果が上がっていました。しかしここは会場の関係から、六十以上の方ばかりでした。藤井寺市民の中で、川柳を楽しみたいとの希望も多く、老いも若きも一堂に会して句会をやってはどうかとの話合いが持たれました。その上で市長と面談をしたところ、市民文化向上の一翼となると大いに賛同を得ることができ、祝詞と激励の言葉をいただきました。句報の題字も、カットにあるように市長の筆になるもので、句会がスタートすることになりました。

第一回句会は十一名の出席でしたが、その後、毎月第三日曜日の午後一時から市の総合会館で行われており、現在、百四十七号の句報を出すに至っています。毎月の出席者は四十名ぐらいですが、悩みは若い人が少ないことです。それと、会場が高齢者にとつて少し遠いこともあり、出席者と投句者が半々の状態が続いています。

また、女性の出席者が少ないにもかかわらず、お茶、お菓子の接待等一切の心くばりをしてもらっています。その他、兼・席題の天位の賞品も女性軍の芳志に甘えています。

会はいつも和気藹々の中で進行し、「天の天」位は、出席者の投票によって決められます。その後、句についてそれぞれ感想を言い合い、勉強としています。わが句会のもう一つの悩みに、ベテランが少ないことがあります。従って選者が四、五人の交替になつてしまします。他市から出席者があると選をお願いします。

いすることもありますが、市民の文化向上という発足の趣旨とのずれが生じることになります。

そのため、出席応援は隣接の羽曳野、富田林程度にとどめております。川柳塔誌の句会案内に出していないのは、そのような訳によるものです。各地からのベテランの方のご出席も有難いのですが、あまり多くなると市民からの出席者、投句者の句が没になることになり、市民の愛好家が減少する心配もあつて、できるだけ招待をひかえているのです。

なお、この句会の母体とも言える老人福祉センターでの句会も、毎月二回行われています。児島与呂志氏が和歌山県岩出町へ転宅のため、その後、吉岡美房氏が引継いで指導に当たっています。その句会での半数の方が「川柳藤井寺」への投句を熱心に続けてもらっています。

川柳
藤井寺

藤井寺長
振端宏

書

最後にわが会の自慢をひとつ披露させていただきます。それは、当会に在席される極めて熱心な白杖の人が、近隣の同好者を集めて藤井寺で句会を催されたことです。ボランティアの協力を得、市長も出席をされ、盛会裡におわれました。以上、近況報告まで。

6 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(水)午後1時から 生きる・言葉(共に共選)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	3日(金)午後1時から 不快・座る・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
八尾市民 川 柳 会	10日(金)午後6時から 迷う・猫・水・未来	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 まつえ	11日(土)午後1時半から 風 船・蟹・大胆	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	12日(日)午後1時から ムード・息子・胸	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後1時から ペール・溢れる・むずかしい・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
ほたる 川 柳 同 好 会	14日(火)午後1時から 強 い・聞 く・美 人	豊中市立釜池公民館 阪急釜池駅西へ150米 〒560 豊中市釜池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卯 の 花	16日(木) 正 午 から 駅前・喉・恨む・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
富 柳 会	16日(木)午後1時から 浅 い・足・除 く	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
南 大 阪 川 柳 会	17日(金)午後6時から 包装・文無し・夜更かし・老眼	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
川 柳 ねやがわ	19日(日) 正 午 から 答・水増し・愚・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時から 銀行・塗る・チャンス・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
京 都 塔 の 会	23日(木)午後1時から 筒・困る・水玉	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
東大阪市 川 柳 同 好 会	25日(土)午後6時から 過去・呼ぶ・はったり・先	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
岸 和 田 川 柳 会	26日(日)午後1時半から 陳列・釣銭・手伝い・同窓	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
はびきの 市 民 会 川 柳	26日(日) 吟 行 猫・暗い・クレジット・退屈・自由吟	(希望者は、吐来・敏までご一報下さい) 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

編集後記

★全日本柳協会は、同協会が公式に使用する用語を規定によって定めている。

これは一般の柳社や句会を拘束するものではないが、川柳界全体としてまちまちの用語を使うよりは、統一できるものはするに越したことはない。しかし、そのためにはトップ・ダウン方式ではなく、時間をかけて協議することが望ましい。

従ってこの規定は「試案」としての意義は認めるが、不備な点が少なくない。

★例えば、「宿題」と「兼題」については、字義的にはどちらでもよいが、普通

名詞とまぎらわしい宿題よりも、俳句・短歌でも慣用されている兼題の方がベターかも知れない。さらに、「雑詠」「題詠」のうち、

雑草・雑音・雑兵など、マインス・イメージを伴う雑詠よりも、「自由吟」が好ましく、これに照応して題詠は「課題吟」となろう。

★投句・出句を一律に出句とすることには、明らかに無理がある。「出句」とは句会の出席者が句を提出することであり、「投句」とは句会に参加しない者、あるいは句会の開催前に郵送その他の方法で句を投ずること、やはりきちんと区別しなければならぬ。また、脇取・文台というよ

うな前近代的な用語は廃した方がよいが、これは「記録係」とするよりも、句箋に作者名を記入する役柄から「記名係」がよいだろう。

★以上はあくまでも私見であり、異なる意見もあるだろうが、用語についての検討は川柳の近代化のために欠かせないと思う。(正)

煙草と呼名

本社句会でぜひ改めてほしいことが二つある。一つは、会場を霞のようにする「煙草」であり、一つは、不明瞭な「呼名」である。

「煙草ぐらい」という人もあるが、およそ個人の嗜好でこれくらい他人を不快にさせているものがあるまい。臭いし、咳や涙が出て喉までも。相手が空気だけに逃げ場はない。楽しいはずの句会に期待したい。

の二時間余がいつも苦痛だ。とりあえず会場の後部を喫煙席にする「分煙」からでも実施してほしい。

「呼名」の改善は、「煙草」ほどの苦労はいらない。あの広い会場での小声や不明瞭な呼名が脇取を疲れさせるだけでなく、選者のリズムを乱し、いかに句会のムードをこわすかを知ってもらうだけで充分だ。柳友の配慮と努力を切に期待したい。

岩佐タン吉

●「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却を誓う心の空しさよ」とは戦後一世を風靡した、君の名は「の冒頭の言葉だが、年齢を重ねると、そんなロマンチックなものでなくなる。

●最近の事ほど忘れやすい。特に記憶しなければいけない大事なことは覚えられない。遠い過去のことは比較的忘れにくい。だから、母校の校歌とか、なつメロの歌詞などは自分でも驚くほど覚えていて。特に感情を伴った事柄は忘れにくい。そうである。初恋の人の面影とか、仕草の一つ一つまで鮮明に思い出される。

●人間の記憶力には限界があるから、忙しい人は次から次へと記憶しては忘れ、記憶しては忘れて入れ替わる。だから、喧嘩をするなら、忙しい人とする方がいい。早く忘れてくれるから……。

●物忘れが重なる、年齢のせいかな、などと落ちこむことが多くなる。しかし、何も彼も覚えていたものもシンディ話である。いい事は忘れずに、何か忘れた時は「これも自然の摂理」と軽く受け流して深刻に考え込まぬようにしたい。(み)

作品募集

8月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葉選
水煙抄 (10句) 黒川 紫選
銀河系 (3句) 河内 天笑選
茴香の花 (3句) 八木 千代選
吟 (3句) 「北」 森川 まさお選
課題 (3句) 「大事」 黒田 能子選
「浴びる」 阿萬 萬的選
初歩教室「虫」 (3句) 吉岡美房担当

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友 (誌代半年分前納者) 茴香の花欄は女性に限ります。

9月号 課題吟 「野」「入門」「跳ねる」
初歩教室「理解」

本社6月句会

日時 6月6日 (月) 午後5時半
会場 メンズファッションセンター2階
中央区内本町1-1 電話06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車 (3番出口) 交差点南西角
おはなし
兼題 「親戚」 門谷 たず子選
「ぬけぬけ」 榎本 吐来選
「苦し」 吉岡 美房選
「四角」 玉置 重人選
「使う」 橋高 薫風選
投句 1題 当日発表 各題2句以内
会費 500円
投句料 400円 (80円切手5枚) 同封のこと

本社7月句会 7日 (木)

兼題 「守る」「敬う」「すっきり」
「定着」「師」

夜市川柳募集

第1回「煙草」 高杉 鬼遊選
ハガキに3句 6月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

7月の常任理事会は7月1日 (金)

NHK川柳作品募集

課題「油断」 森中恵美子選
ハガキに3句 6月10日締切
投句先
〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表 6月25日 (土) ラジオ第1放送
午前11時5分から (予定)

西日本文字放送作品募集

課題「机」 森中恵美子選
ハガキに3句 6月15日締切
投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

〒545

定価 六百元 (送料84円)

半年分 三千八百円 (送料共)

一年分 七千五百円 (同)

平成六年六月一日発行

編集兼 西尾 心 社

印刷所 藤原 童 社

大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 691-1468

振替口座大阪813368番

東野 大八 著

没法子北京

題字・大野風柳 装画・石丸弥平
体裁 四六判・288頁・上製本

定価 2300円

メイファーズ
没法子とは、中国語の「仕方

ない」の意味

戦場で隻手となった川柳人と
赤紙結婚の哀妻を中心に織りな
す没法子街の人間曼陀羅地獄図
著者畢生のドキュメント

◎川柳塔社でもお取り扱いいたします

発行所

蝸牛社

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 郷土史

各種 **本** (製作専門)

- 少数数の本も
取り扱っています。
- ご相談ください。

ミヤケ プランニング
MIYAKE
planning

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

電話 06-659-5514(代)

FAX 06-652-2928

ジェイ出版

電話 06-658-8741(代)